
こんな始まり方もあり！？

M 1 1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな始まり方もあり!?

【Nコード】

N3155N

【作者名】

M11

【あらすじ】

とある出来事から、女の子に恋してしまった女の子。

大河一美の、明日はどっちだ!?

…というのは冗談で、別サイトで公開していたGレノベルをこちらで本公開してみることになりました。

登場人物紹介

別サイトで投稿していた作品を、こちらに移してきました。

いわゆる百合（GL）ものです。
以下に、登場人物を紹介します。

主な登場人物

大河 一美（おおかわ かずみ）

一応主人公らしき人物。皆川学園二年D組。

「文武両道3人組」の一人。今時珍しいスポーツ万能&学業優秀娘。

身長174?、B85W58H87。とある事情により、クラブ無所属。

腰下までくる超ロングヘアが特徴。あだ名は「いちみ」。

等々力 春菜（とどろき はるな）

皆川学園二年D組。

「文武両道3人組」の一人。バレー部のアタッカー。かなり短気。

身長172?、B79W59H88。男子ばりのショートヘア。

あだ名は「ハル」。

一美を「いちみ」と呼びだした張本人。

彩恩 菜々美 （さいおん ななみ）

皆川学園二年A組。

「文武両道3人組」の一人。弓道部所属。関西出身。あだ名は「菜々」。

身長162?、B89W58H86。三人組の中で一番胸が大きい。

どちらかといえばボケ担当。ツッコミがこないと落ち込む。一美を「いっちゃん」と呼ぶ。セミロングヘア+ポニテ。

藤宮 千夏 （ふじみや ちなつ）

皆川学園一年C組。

身長156?、B83W57H85。陸上部所属。走り幅跳びを得意とする。

普段は冷静だが、一度パニック状態になると、周りが見えなくなる。

一美を密かに想っている（クラスメイト談）。

他、数名が登場

と、こんな感じです。

次ページから本編が始まります。

序章　P r e l u d e

「事实は小説よりも奇なり」

世の中は、小説より不思議に満ちている…なんと、これはバイロンの言葉らしい、調べてみたら。

なぜ、調べたのかって？

そりゃあ、調べたくもなりますよ。あんなことが起こったら。

…違うな。

自分のこの感情に気づいてしまったからかな？

…微妙に違う？（何故に疑問形）

何にせよ、自分はある人に恋心を抱いてしまった…らしい。

そりゃあ女の子ですから、恋の一つや二つ…これじゃ、自分が恋多き女みたいだな（苦笑）。

一通り、初恋も片思いも経験した。でも、いままでは恋をしている割にどこか冷めてる自分がいた。

一度だけ、告白されてデートもした。相手はクラスで割と人気があつた彼。自分もまんざらじゃなかった。でも、帰り道でごめんなさいをした。

相手が嫌いな訳じゃない。本や漫画みたいなドラマティックな恋愛を期待していた訳でもない。ドラマはドラマ。でも、どこかで本気になれない。

彼には、悪いことをした。しかし、彼は笑っていた。

「何となくそうなるんじゃないかって、思ってた」
どのあたりから？

「うーん、お昼を食べた後くらいから…かな。考える仕草が増えた

「気がしたから」

意外なほど、よく見てたね…あ、失礼だったかな？

「いや、別に気にしてないよ」

振られて、ショック？

「受けていない…と言ったら嘘になるかな。でも、あっさり受け入れている自分もいる」

本気じゃなかったの？

「もちろん本気さ。でも君の態度を見ていて、考えさせられた」

心のどこかで、何かが違うと訴えてる自分がいるの。決してあな
たが嫌い、と言うわけではないの。ごめんなさい。

「わかってるさ。いい相手が早く見つかるといいね」

あれから…。

告白は何度かあったが、全て断っている。中途半端に受け入れて
も、後で絶対後悔するから。

しかし、あの出来事が自分の人生を変えてしまうとは思ってもみ
なかった。それで冒頭のバイロンの言葉に繋がってくるのだ。

そう、あの子に会ってしまったばかりに…。

序章 } P r e l u d e (後書き)

いわゆる前振り? ってやつです

この次から、本当の本編ですw

「ここまでくれば、歩いても間に合うかな」

ランニングから、歩行モードに切り替える。

直線上の約一キロ先、私の通う『皆川学園』みながわがくえんが見える。

私達の学校は漫画などにありがちな、とんでもない高台にあったりしてなことはない。山宮市さんぐうの市街地のど真ん中にあり、歩いて山宮駅まで十五分位と、アクセスは悪くない。路線バスも走っている。

皆川学園は、いわゆる「お嬢様学校」ではない。しかし、地域唯一の女子校なので必然的にそれなりのお家柄の方々が集まってきたりするようだ。しかも、学校側が文武両道に力を入れているため、学校のレヴェルはかなり高いらしい。

私、おおかわかずみ大河一美は、この二年生。

実を言うと、私は女子校に来たくなかった。特にこれと言う理由はないのだが……。何となく苦手意識があった。

親が熱心に勧めるから、私から折れて受験し入学した。その方が親としては安心らしい（そんなもんかねえ）。

最初はあんまり馴染めなかったが、一年も通えばそれなりに慣れしてくる。普通に友達もできた。

「いちみ〜、おっはよ〜」

後ろから、シャアアアアという自転車の音とともに、友人の挨拶が聞こえた。そして私の横に來ると、自転車を降りて一緒に歩き始めた。

「おはよ、春菜」

彼女は等々力とつりぎはるひな春菜。皆川学園入学時からの親友。去年同じクラスでたまたま席が隣同士になり、お昼を一緒にから意気投合して現在に至る。今年も同じクラスだ。彼女は電車通学組で、駅から自転車で行ってくる。

去年の暮れに愛用の自転車を盗まれてしまい、それ以来折り畳み自転車を電車に持ち込んで通っている。

「今日はちと早くない？」

「そこまでランニングしてきたから」

「ってことは、また助っ人？今度はどこ」

「今回はバスケ」

自分で言うのも何だが、運動能力にはそこそこ自信がある。去年の球技大会では、自分のクラスを学年優勝どころか学園全体で二位に導く大活躍…と目立ってしまった。

それ以来クラブの勧誘が凄かったのだが、事情によりクラブに入れないことを説明すると、クラブの臨時コーチ&試合の助っ人要員を打診されるようになり、私も時間が合えば…との条件で引き受けることにした。主に球技が中心だが、剣道や弓道などの武道もたまに依頼が来る。

「あんたの運動能力は、ほんと底なしね」

「ひとを化け物みたいに言うな」

「その源は、この胸か？んん？」

「胸は関係な…ちよつと、どこ触ってんのよ！って、こら、揉むな！」

何をトチ狂ったのか、春菜が私の胸を揉んできた。事あるごとに彼女は、私の胸に手を伸ばしてくる。これがなければ、いい子なんだけどねえ。

「もう…いいかげんにしなさいっ！」

ビシッ！

離れない春菜に、チョップを入れる。

「ふいっつ、堪能させてもらったぜヨ」

「まったく…あんたはレズか」

「いや、それはない」

そこまでやって、きっぱり否定ですか。

「どっちかと言えば…オヤジ？」

「余計にキモイわっ！」

「じょーだんだよ。これはあ、単なるいちみへの愛情表現だYO」
はた迷惑な表現だな、おい。

「しかし、女子であそこまでスポーツできる人はいないって」

ようやく、普通の会話に戻ったか。

「体を動かすのが好きなだけよ」

「そうだろうけど、いちみの場合レベルが違うのよ」

それは、無駄に高い身長の子だと思っただけが…。

小学校高学年のころからスポーツに興味を持ち、いろいろな競技に参加した。飲み込みが人より早かったせいか、すぐに活躍して大会で優勝したこともある。

その頃から身長が伸び始め、中学ではバレーとバスケットを掛け持ったせいでさらに伸び、今では男子の平均くらい。だから、クラスで並ぶと頭一つ飛び出してしまうので割と目立つ。

まあ、同じクラスの春菜もバレーのおかげで割と背が高いから、二人して目立ってるんだけど…。

「あんな活躍するから、けっこー隠れファンがいるらしいよ、あんな」

「活躍する予定じゃなかったんだけどなあ…」

「で、試合はいつ？」

「今度の土曜日。勝ったら、日曜日も」

「大変だ」

「ま、キライじゃないからね」

それからは、たわいない話をしながら歩く。校門まであと五百メートル。そこに、

「もうかりまっか」

と、曲り角からもう一人の友人が現れた。

「ぼちぼちでんな、って何やらせるのよ！」

「ナイスなノリツッコミや。おはよう、お二人さん」

…普通の挨拶でいいのか、あんなら。

「普通にやったら、オモロくないやん。笑いは人生で一番大事やよ？」
「いや、ウケてないし」

「うっ、痛いところを…」

もう一人の友人の名は、彩恩菜々美。さいおんななみ

関西出身で、三年前からこの地で暮らしているので、学校近くの住宅団地からの徒歩通学組。

彼女もまた、入学時からの親友。弓道部所属なので、弓道部の助っ人依頼は彼女経由が多い。

「ところで、いつちゃん」

「な、何すか？」

「ウチのクラブには、いつ入部してくれるんの？」

ま、またその話ですか…。

入れないという説明をしたにもかかわらず、熱心に勧誘をしてくるクラブが幾つかある。菜々美の弓道部が一番良い例だ。こんなことなら、調子に乗って皆中を連発させるんじゃないやあなかったなあ（自業自得です）。

「入れないと言ったでしょう」

「ウチの部長は諦めてないで？クラブ行く度に、まだか、いつ連れてくるんだ、って聞いてくるし」

…あの部長、意外としつこいな。

「なあ、ホンマに入れへんの？」

「色々忙しいからねえ…ゴメン」

「そーいつて、ホントは逃げてるだけとか？」

かつついゝんっ！

「春菜あ…：…そんなに、三途の川を渡りたい？」

わたしは、笑顔を作りながら恨みを込めて、春菜を見つめる。ついでに、指も鳴らしながら…。

「うあ…本気モードでいちみが怒ってるう…」

「ラクに逝かせてあげるから…ってか、逝ってこい！」

「ごめんなさいいしません。あたしが悪うございました…」

まったく、もう…。一言多いのよ、春菜は。

「まあ、その件はうまくごまかしておくから」

助かります、ホント。

「ところで、春菜あ」

「ん、なんね？」

「どーして、私のことを『いちみ』って呼ぶの？」

「なんでって…漢字そのまんま読みで『いちみ』じゃない」

ガクツ！

あなたは莫迦な子ですか。

「香辛料みたいやな。『一味あります？』みたいな」

蕎麦かうどんに入れられちゃうの？私。

「まあ、あだ名なんてそんなものでしょ。呼びやすければ、何でもいいのよ」

「そうやね。特に意味もないしな。省略するか、短縮するかが普通やもんな」

そうね。菜々美は春菜のことを『ハル』、春菜は菜々美のことを『菜々』。二人とも短縮で呼んでいる。確かにそこには意味はない。私の場合は、読み替えの方がしっくり来るようだ。でも、『いちみ』はないよねえ。

「さて、少し急ぐとしますかね。話し込んでしまったし」

校門を通過するとき春菜がそう言うてきたので、立ち止まって携帯を取り出し、時間を確かめた。

うん、確かに少し急いだ方がいいかな…そう思ったとき、ディスプレイに何か陰みtainなものが映った…ような気がした。

「うきやあああつ！その人！避けてえええええつ！」

「ん？」

声らしきものに反応して振り向いたのがいけなかった。視界に突然、人の顔らしきものが飛び込んできた。あまりに突然すぎて、受け身がとれないっ！

ごちん！

額に何かがいい音を立ててヒットした。と、同時に唇に何か柔らかな感触が…。

「むぎゅっ！」

「！！」

「いちみ！？」

「いつちゃん！？」

人がぶつかった。それはわかった。でも、記憶があるのはそこまでだった。

「…うーん」

だいぶ寝ていたような気がする。

手を目覚まし時計にやっているのだが、時計が…ない。

…あれ？

寝ぼけ眼に天井を見る。

見慣れない天井…いつもと違う朝の匂い…今、何時？

「あっ！！」

思い出したっ！

ガバツとベッドから起き上がる。と、同時に…

「~~~~~っ！」

突然、頭痛が襲ってきた。

ガラッ！

「お、気がついたようね」

アコーディオンカーテンが開いて、白衣を着た人がのぞき込んできた。

「瑞浪先生…？と言うことは、ここは保健室？」

みずなみちか

瑞浪知香先生。皆川学園の常勤保険医だ。

「とりあえずは、正常なようね」

「今、何時ですか？」

「ええ〜っと、四時限の真っ最中だね」

お昼近いじゃない。

「今朝のことは覚えてるかしら？」

「人がぶつかってきたことまでは…」

「じゃあ、頭突きで倒れ込んで気を失ったみたいね。後頭部には、目立った外傷がなかったけど、ちよっとコブが出来たくらいか」

それよりも、額がヒリヒリしますですう。

「見事に額が赤くなってたから、悪いけどそこだけ絆創膏を貼らせてもらったわよ」

言われて、鏡を見ると…うげ、デカデカと貼ってある。どこの漫画キヤラですか。

「二、三日で腫れは引くと思うから、我慢してね」

みんなにイジられそう…。

「他に身体の異常を感じるところはない？」

「頭痛と後頭部以外は、特にないっす」

「まあ、大丈夫だと思うけど、打った場所が場所だからね…。私としては、早退してちゃんとしたお医者さんに診てもらうことを勧めるけど」

確かに…。打ち所が悪いだけで、死に至るケースもあることだし。

「ところで、先生」

「何かな？」

「ぶつかった相手はどうしたんです？」

ああ、と女医は思い出したようだ。

「向こうの方が丈夫みたいだね、額もあなたほど腫れてなかったから、そのまま授業受けてると思うわ。本人も平気そうだったし」

ひえ〜〜っ！

私より石頭だったですか。確かにいい音したもんなあ。

「平謝りだったねえ。他の二人に対して」

そんなことがあったんですか…

キンコンカーンコン…

「お、四時限が終わったみたいね」

ドドドドドドドド…

おお、地鳴りみたいな足音が聞こえてくる。

ガララッ！

「失礼しまっす！いちみ、目え覚めました？」

「こあらっ！廊下は走らないっ！」

勢いよく保健室に飛び込んできた春菜に、瑞浪先生の怒号が飛ぶ。
「すみません。いちみのことが気になって…」

「で、授業終わってすぐにここへ来たのね」

ははは、春菜らしいなあ。

「あ…。いちみ！気がついたのね」

ああ、つい先ほどですが…

「失礼します。…いっちゃん、氣いついたんか」

菜々美も遅れて保健室に顔を出した。何とか生きてますよって。

「よかったわ」。相手は意識あったけど、いっちゃんはウチらが呼びかけても氣いつかへんから、ちようビックリしてもうて…」

「菜々と二人して、ここまで担ぎ込んだのよ」

そうだったんだ…ありがとう。

「そしたら、ちかばー先生に怒られて…」

え？

「頭打った人は、無闇に動かしたらあかんって…ウチら、氣が動転しててすっかり忘れてたわ」

「先週、応急手当の講習をしたばかりなのにね。先生、悲しいわ」
「そういえば、そんな特別授業やりましたね。学校にAEDが配備されたから、この機会につてことで。」

「まあ、次があったら氣をつけて。しかし、あなたが担ぎ込まれたときは驚いたわ」

そうですか？

「怪我などでよく来てるけど、その二人が担いできたんだもの。しかも意識がないというから、二度ビックリよ」

まあ、その辺の記憶は私にはないわけで…。

「どんなにスポーツ万能でも、事故はおこりうるということを身をもって証明しちゃったね」

「あの状況じゃ、さすがのいつちゃんも回避不可能ということやね」

…私は、何かの超人かなにかと思われていたんですか？

「…ところで、大河さん。早退の件、どうする？」

どうしようかな…。そうなると、親にも連絡しないと。

「え？いちみ、早退するのっ？」

「大事をとってね。瑞浪先生も、その方がいいって言ってるし」

「頭やからねえ。精密検査してもらた方がいいんとちゃうか？スポーツやってるし、何か起こるかもわからへんし」

だねえ。では、早退させてもらいます。

「担任には私から言おうか？」

「いえ、この足で職員室に寄っていきます」

「そう。お大事にね」

「結果わかったら、教えてな」

支度をして、保健室を出る。

即座に携帯を取り出し、母親が勤めている総合病院に電話をかけた。母親から、事の顛末について根掘り葉掘り聞かれたが、検査の手配をしてくれると言ってくれた。あとは、タクシーをつかまえて…。

んんっ？なんか、視線を感じるような…。

サッ。

振り向いてみたが、誰もいない。気のせいかな…。

「……………」

1（後書き）

きっかけとなった事件ですw

まだ名前が出てきてませんが、ぶつかった相手というのが
人物紹介の藤宮千夏ということになります

その辺は、話が進めばわかるようになりますw

「お疲れ、一美」

「あ、母さん。病室で待っていたの？」

自宅近くの総合病院。診察受付をしたら即、MRI検査室に誘導されて入念に検査された後に、先生の指示であてがわれた病室に移動したら、母さんが待っていた。

大河美紗子^{みさこ}。私の母親。ここの総合病院で外科の看護師長をしている。

「うっん、たった今来たところよ。休憩もらってね」

師長だからって、サボってないでしょうね。

「莫迦なこと言わないの。色々手配したりなんだから、バタバタしてたのよ？」

そのおかげで、一晩の検査入院ってことになってるんですけど……？
「やっぱ、頭に関しては軽視できないって、脳外科の先生も言ってたわ」

専門医が言うから、そうなのかな。

「あ、携帯貸して。友達にメール入れたいから」

「はいはい」

病院内では、電磁波などの関係で普通の携帯電話が使えない。ので、母さんなど病院で働いてる人は、電波出力が小さい専用の携帯を使用している。それを借りないことには、連絡手段は廊下の公衆電話しかない。

「これで……よし、と」

病院一泊の旨と、病室番号を春菜に送った。うちの母のメルアドを知ってるのは、私の友人関係では春菜だけなので、彼女に情報を送れば後はうまくやってくれる。

「しかし、一美が事故に遭うなんて……」

「相手の前方不注視による衝突事故、ってとこかしら」

「そこで、叔父さんの真似をしないの」

「はは…似てた？」

「口調はね」

親戚の叔父は、交通課に勤務する警察官。事故現場で陣頭指揮を執る、えくと、何だっけ…役職を聞いたんだけど、忘れちゃった。たまに遊びに行つて、ニユースなんかで事故の話題が出ると、先ほどの口調で原因とか色々なことを説明してくれる、強面だけど優しい人なのだ。ちなみに、うちの父親はごく普通のサラリーマン。特徴は…特にないか（笑）

「打ったのは、額だけ？倒れたときに後頭部を打たなかった？」

「とつさに春菜が、身体を滑り込ませようとしたらしいけど、間に合わなくて後頭部も打ったみたい。春菜は『お尻打った』ってわめいていたらしいけど」

「そう…でもさすがは春ちゃん。バレーやってるからこそその反応かしらね」

たまたま隣にいた、つてのもあると思うけどね。でも、よくあそこから身体が動いたよな。

「頭痛以外にどつか悪いところない？」

「悪いところも何も、頭突きの瞬間に気を失つて…」

何か…他の感覚が…何か柔ら…かく…て…あつ！

「何か悪いところあるの？」

ま…まさか…まさか…！

私、ぶつかつた拍子に…キ…キ…キスしちゃった？

「どうしたの？赤くなっちゃって」

し、しかも、唇とくちび…

「~~~~~っ！」

恥ずかしさのあまり、布団を頭から被る。

「何をしてるの。…やっぱり、何か影響が…」

「そうじゃないっ！そうじゃない…けど…」

ナースコールをしようとしてるのを、全力で止めさせる。

「思い出したくないことを、思い出しただけよ」
「ふん」

そりゃ、そうですよ。事故とはいえ、キスですよ、キス。しかも女の子と…母さんでも、こんな事言えないよ。

「キスがそんなに恥ずかしい？」

はうあつ！な、なぜわかったの？

「独り言、大きいわよ？」

もしかして、全部聞こえてた？

「ええ、バツチリ」

あわわ…穴があつたら入りたいとは、こういう事なのね…。

「相手はどんな子なの？」
は？

「キスの相手。お母さん、興味あるわぁ」

あ、あのね…。そもそも一瞬だから、顔なんか覚えていないよ。

「何で女の子だと分かったの？」

うちのガッコ、女子校でしょうが…。

「女子校だって、男性の教師はいるでしょう？」

ぶつかる前に、悲鳴を聞いたもの。それに反応して振り向いたら…

「正面衝突事故…」

そゆこと。厳密には、顔だけ『正面』だけど。

「まあ、大事なくて良かったわ。」

そこへ…

「おつ邪魔しまゝす！」

「ハル、声大きすぎや」

親友二名様ご到着。

「春ちゃん、菜々ちゃん、来てくれたの」

「おばさん、お久しぶりです」

ピシッ！

く、空気が…ま、拙いよ、春菜あ…。母さん、顔は笑ってるけど怒りのオーラが漂ってる…。

「ハル、おばさんちやうやろ？」

すかさず、菜々美がフオローに入る。

「…はっ！み、みみみ、美紗子さん！おおお久しぶりでありますっ！」

「ご無沙汰してます」

「二人とも、久しぶりね。お見舞いありがとう」

「い、いえ、当然のことをしたまででありますっ！」

自分のミスとはいえ、春菜ったら口調が変わっちゃってるよ。敬礼までしちゃって…。

母さんは、『おばさん』と呼ばれるのを極端に嫌う。確かに、見た目は子持ちの母とは思えない位若く見える。街で一緒にいると、姉妹と間違えられる事が多い。

「速かったね、来るの」

メール送ってから、そんなに時間経っていないよね。

「メールもろたときには、もう病院の前やったんよ」

「いちみが病院…と言ったら、ここしかないでしょう」

それもそうか。母さんがいるせいか、怪我なんかで結構お世話になってるしね。

「外科関連では有名な病院だしね」

「某漫画みたいに、優秀な先生がいっぱいいるんだから」

なにげに宣伝しないでください。

「それはそうと…」
ん？

「あの子は入れなくていいの？」

ドアの方に目をやると、知らない女の子が隠れて立っていた。

「ああ、忘れてた。いちみ、事故の原因を連れてきたよ」
事故の原因？

「ようするに、ぶつかった相手や」

…それが、あの子？

「そ。いちみが学校を出た後、昇降口にいたんで」

「都合を聞いて、放課後を待つて連行させてもらたんよ」

そう…学校で感じた視線の正体は、この子だったのか。

しかし、連行って…穩便に済ませたんでしょねえ。彼女に同情するわ。

「ほら、モジモジせんと、入ってきい」

菜々美に言われて、おずおずと病室内に入ってくる。

…ん？下級生？

「そうね。一美とタイの色が違うわね」

私達の学校の制服は、普通のブレザー。どこぞのデザイナーがデザインした…と言うものではないのだが、色使いが洒落ていて意外と人気がある。

そして、リボンタイとバッジで学年が分かるようになってる。

ちなみに、現時点では私達二年が緑、この子は紺色だから一年。ちなみに、三年はピンクが強い赤となっている。

「さ、謝るんやろ？」

「あたし達には、もう済んでるしね」

先輩三人＋αに囲まれていては、さすがにオドオドしてしまうか…。

「あ…あの…」

お、覚悟決まったかな？

「わ…わた…、わたし…」

うんうん、頑張れ、女の子！

「あ…あの…そのお…」

ブチン！

「ええ〜いつ！じれったいんじゃないやあああっ！」

「あ、あかん！ハルがキレてもうた〜」

うるさいなあ、もう…キレるの早過ぎ。

ドキャッ！

はたいて黙らせるつもりが、無意識に拳を握っていたみたい。綺麗に春菜の横顔にヒットしてしまった。

「ぐ…グーで来ましたか…」

ドサツ。リノリウムに崩れ落ちる春菜。

…まあ、良しとしますか（いいのか？）。

「おお、ナイスツツコミ。でも、グーはやりすぎちゃうか？」

暴走した彼女にはこれくらいでいいのよ、と心の中で弁明する。

春菜は、頭の中に『我慢』という言葉が存在してないんじゃないか？というくらい、短気である。こういう時のツツコミ担当は、いつも私に回ってくる。

「ったく、あの子が怯えちゃうじゃない」

「せや。折角勇気を出してここにおんねんやから、野暮はあかんよ？」

「う、うい」

「……」

あらら、私達のやりとりを見ていて固まっちゃったよ。しょうがないなあ、助け船を出しますか。

「あの、お名前は？」

ふじみや
ちなつ

「…藤宮…千夏…と言います。今朝は本当にすいませんでした。ごめんなさい」

ペコリと音がするぐらいに、頭を下げた。うゝん、気持ちいいくらいな謝り方、いいですねえ。

「苦しゅうない、面をあげ〜い」

…は？どこのお殿様ですか、菜々美。ていうかそれ、私が言うべき台詞じゃないの？

「ツツコンでくれへんの？」

ど〜やってツツコめと…。

「は、はい…」

あなたも素直ですね〜。まあ、いいか（いいのかよ）。

「そもそも、何で私にぶつかってきたの？身長差、あるよね」

そう、一番の謎はそこ。私は前述の通り、背が高い。新学期の身体検査では、確か174センチ。彼女は…どう見積もっても157

センチぐらい。普通なら、額同士がぶつかることはないはず。

「えっと…実は私、陸上部に所属しているんです」

「…は？」

いきなり関係のない話が始まり、親友二人は目をテンにして聞き返した。それと事故と何の因果関係が？

「それで、得意種目が走り幅跳びなんです」

「ますます謎めいてきましたよ？」

「よけい分からへん…」

「あ、あたしも…」

「取りあえず、順序立てて説明してくれてるのよね？」

え？よく分かりますね、母さん。伊達に看護師をやっていないということですか。

「あ、はい。それで毎朝、朝練代わりに校門で踏み切りの練習…みたいなのをしてるんです、門のレーンを踏み切り線に見立てて」
確かにウチの学校は、校門内側は砂利を敷いてあるから、そんなことも出来るか…。でも本気で飛んだら、着地で転ぶでしょうに。
「タイミングの確認だけですから、本気では飛んでません、いつもは」

…いつもは？

「今日は、たまたま寝坊しまして…気が動転していて、急いで走ってきたら、つい本番の調子で踏み切ってしまい…」

気がついたら、着地点に私達がいた…」と。

「声をかけたけど、間に合わなくて…本当にごめんなさい」

「おかげで、あたしのお尻が犠牲に…」

「ハルのお尻はどーでもええねん」

激しく同意。

「なあんでえ〜っ？あたしは、二人分を受け止めようとしたのよ！
重なつて倒れていくいちみと彼女を」

「ちよう、間に合わなかったけどな」

それは、感謝してます。でも、この際あなたのお尻は関係ないか

ら。

「それより、あなたの方は大丈夫なの？ 藤宮さん… って言っただかしら」

そつだよ。私の方ばかりこんな大事になってるけど、彼女も額を打ってるはず。瑞浪先生は大丈夫そうなことを言ってたけど。

「あ、はい。身体が丈夫なのが取り柄なので…」

「それ、あまり関係ないような…」

「それに、大河先輩がクッションになったので、大したダメージはありませんでした」

大した怪我がなくてよかった。

「しかし、いっちゃんを一発で沈めるとは、なかなかええツツコミや。普通の人には出来ない芸当や」

ツツコミまれた方の身にもなってるよ。てか、あんなツツコミは二度とゴメンだから。

「事情はだいたい分かったわ」

色々な話を聞いて、看護師なりに納得したようだ。

「取りあえず、一晩のお泊まりは変わらないからね。諦めなさい」

「はあ… い… あ、お父さんには？」

「言ってるわい。出張先から飛んで帰ってきそつだもの」

はは… あり得る。

過去にも、試合中の事故で捻挫したときに、仕事を放り投げて病院に駆けつけた、という逸話があるくらいだ。そのときは休日出勤だったから、業務に支障は出なかったらしいけど…。心配してくれるのは良いんだけど、娘を溺愛しすぎ。

「… 本当にご迷惑をおかけしました」

「まあ、事故やからな。これから気をつければええんやないの？」

「はい… 気をつけます」

「いちみがばおーっと歩かなければ大丈夫」

「ばおーっと歩いてない！ ってか、私のせい？」

「ちゃうの？」

「立ち止まりはしたけど、ほおーっとしてないわよ」
「ったく…こっちは、訳も分からずに巻き込まれたっていうのに、
この二人は…」。

2 (後書き)

少し間が開きましたね すいませんm (――) m

病院での一コマです

主要人物はほぼ出そろいました
病室での展開は、まだ続きます
それは… 次回のお楽しみにw

小一時間しゃべっていたかな？突然、春菜が立ち上がった。

「さて、あたしらはおいとましますよ」

「あら、ゆつくりしていけば？」

「そうもいかんの。今から、親に付き合わないと」

「ウチはお茶の稽古や」

忘れてた。

春菜はうちと同じような普通の家庭（お父さんがある会社の部長らしい）だけど、菜々美の家は、関西では少し名の知れた家系の分家らしい。そのお家柄なのか、日本文化のお稽古事を色々習わされている。だが、本人も嫌いじゃないらしく、割と積極的に通っている。

「そう、二人とも気をつけて帰ってね」

「お見舞いありがとうね」

「い、いえ！恐縮でありますっ！」

敬礼までする春菜。もう大丈夫だって…。

「あなたはどつするの？」

「あ…はい…」

二人が退室した後、看護師は下級生に今後の行動について尋ねた。
「私はもうすぐ休憩時間が終わるから、仕事に戻ら…」

そう言いかけた時、

『大河師長、大河師長。水野先生が呼びです。医務室までお越しください。繰り返しです…』

と、館内放送が入った。

「これって…」

母さんの方を見ると、急にまじめな顔を始めた。看護師モードに入ったようだ。

「ごめんね、急いで戻らなきゃ。千夏ちゃん…だっけ。時間の許す限りゆつくりしていつてね。それじゃ、一美」

「うん、いつてらっしゃい」

「ごめんね」

パタパタとサンダルを鳴らして、母さんが病室を出て行った。

「……」

当の彼女は、ポカ〜ンと口を開けて固まっていた。

「あのお〜、藤宮さん？」

「……は、はいっ！」

「どうしたの？固まっちゃって」

理由は想像できてから、苦笑しながら彼女に問いかける。

「あの看護婦さん、放送があつた途端、慌てて出て行きましたけど、どうしたんですか？」

やっぱりね。最初はみんな驚くのよ、私も含めて。

「サボってるのがばれたんですか？」

「違う違う」

サボりなら、私が追い返してるって（苦笑）。

「さっきの放送は『スタットコール』と言って、先生や看護師の緊急呼出しなの」

「は、はあ」

「あの放送には隠された意味があるのよ」

「？」

「『急患が入ってきます。急いで集まって！』って意味……だったかな？」

そう説明している最中、救急車がやかましくサイレンを鳴らして近づいてきた。それを、病室の窓から二人で見下ろす。やがて、救急車はサイレンを止め、救急搬入のスロープに入って見えなくなつた。

「ね？」

「はあ。それなら、普通に放送すれば……」

「ここは病院よ？そんなことをしたら、他の入院患者さんが不安がつてしまうわ」

「あ…」

「さらに言えば、ここの病院にはいつぱいお医者さんがいるけど『水野先生』と言う先生はいないのよ」

「??」

「そこで、存在しない先生からの呼び出し＝緊急呼出という図式が出来上がるわけ」

「へえ、そうなんですか」

納得していただきました？私も昔、やたら『水野先生』に呼ばれるから、おかしいなあと思ってたわけ。いざ、母さんに聞いてみたら、そういう絡繰りだったの。

「そういえば、そういう暗黙の会話…とでも言っんですか、そういうものがファミレスや喫茶店にもあるのを聞いたことがあります。招かざるお客に対して、特定の名前で来店した旨を伝えるとか」

へえ、それは初耳ですな。

「ま、似たようなものかな？相手に悟られない、という点に関しては」

「ふふ、そうですね」

「あと、訂正。『看護婦』じゃなくて、『看護師』ね。呼び名が変わってるから気をつけて。あと、さっきの看護師が私の母親。紹介しなくてごめんね」

「えっ？そうだったんですか。失礼しましたっ！」

まあまあ、そんなにかしこまらなくても。

「そういえば母さんも言ってたけど、どうするの？このあと」

「え？」

「だって、春菜達に強制連行されたんでしょ。部活とか大丈夫なの？」

あの二人のことだ、有無を言わず連れてきたんだろう。多少強引なところがあるからなあ。

「それは平気です。今日は自主練習日なので」

そうですね。じゃあ、悪く言えばサボっても良いと。

「うう、いじめないで下さい」

あはは、ゴメンゴメン。

「この後、予定ある？」

「いいえ、特には……」

「じゃあ、あなたさえ良ければしばらく側にいてくれないかな？こ個室だし、急な入院だからTVもないし、退屈でねえ……」

まさか、たかが検査入院で個室を用意されるとは思わなかったわ。……母さんの差し金かしら（何の？）。

「それが罪滅ぼしになるのでしたら……」

あらら、まだネガティブになってるよ。

「あのね、今朝のは事故。別に怒ってるわけじゃないしね。被害も額だけ……」

あれ？他にもあったような……記憶がある限りの回想をしてみる。ええと、携帯を確認して、影が映って、声がして、振り向いて、ぶつかって……あつ！

「あ、あの……」

声がハモった？

「な、何かな？藤宮さん」

「い、いえ……先輩からどうぞ」

「……」

い、いきなり気まずい雰囲気だぞ。も、もしかして……

「あ、あのさ……」

「は、はい」

「事故の時に、……しちゃったの、覚えてる？」

「な、何をです？」

どもった。知ってて聞いてるな？確信犯だ。

「……き、き、キス……よ」

うわあ、いざ言葉にすると恥ずかしい……っ！

「……やっぱり、そうだったんですか。何か変な感触が唇にあったなあ」と位にしか感じなかったのですが」

何か解説が生々しいんですが…。

「目撃したクラスメイトにからかわれていたんです、午前中ずっと」

「な、なんて？」

「…そんなこと、言えませんか！」

あらら、赤くなつて俯いちゃったよ。

「まあ、いいわ。お互い、事故つて事で忘れましょ」

「え……」

えって…何でそげな悲しい顔をするの？

「女の子同士よ？あなただっていい気じゃないでしょう」

「……………そんなこと」

へ？

「そんなことありませんっ！」

「うわあっ！」

なんという迫力の全否定…って、ええっ？

「ありませんて…」

「だって、憧れの大河先輩ですよ？文武両道を地でいくスーパーヒロインの一人ですよ？嫌なわけありません！」

…何か、変なスイッチ入ってますか？

「事故とはいえ、入学時から密かに想っていたあの大河先輩とキスできたんです。ライバルも多いし……」

あ、あの？勢い余って告白までしてますよ…って、告白？ ええええええっ！

お、お、お、女の子から告白うっ？

さすがの私も、初めての経験デスヨ？確かに、藤宮さんはかわいいよ？背がちっちゃいのもかわいい要因の一つだし、意外と礼儀正しいし、割とスタイル良いし…って、何を混乱しているんだ、私。

「事故なんかで片付けたくありません。好きなんです、先輩のことが……………あ」

向こうも、冷静になったみたい。

「あわわわ…」

大それたことを言ったことに気づいたようね。赤い顔から一転、顔面蒼白になっているよ。

「すすす、すみません！今言ったことは、忘れてくださいっ！」

「忘れてもいいの？」

「私の戯れ言です。気にしないでくださいっ！」

それはそれで、何か悲しいような…。

「すみません、失礼しますっ！」

だだだだだだ……

あゝあ、ドア開けっ放しで帰っちゃった。
よいしょと。

ベッドから立ち上がり、病室のドアを閉める。

「あの子も、隠れファンだったのね……」

今朝の春菜の話を思い出していた。

女子校特有（？）の百合フラグ。

まさか私に立つとは思ってもみなかった。

だって、私は背は高いけどロングヘア！。どう見ても女の子。こういうのって、ボーイッシュな女の子に対して起こるイベントじゃないんですか（それは偏見です）？

何かこの先、ものすごい波乱が起こりそう……ていうか、結局今夜一人じゃないの！はああ……せめて、TVが欲しい。さっきの告白イベントを忘れるために……。

3（後書き）

病室での風景、後編です

勢いで告白してしまった千夏、脱走くマテ

初めておにゃのこから告白された一美、混乱くマテマテ
この先の行方は…？

私にもわからうわなにするはなせやめ

はっ、はっ、はっ……。

ん？あれ、ここは…？

いつの間にか、病院を飛び出していたらしい。

「ふう〜、っはあ〜っ」

立ち止まり、息を整える。

そうしている内に、だんだんと先ほどのシーンを思い出していた。

「まさか、口が滑ってしまうとは…」

まいったなあ。ごく一部の友人にしか打ち明けていなかった気持ちを、勢いで、しかも本人の前で打ち明けてしまうとは…。

でも、事故とはいえ忘れて欲しくなかった。憧れの先輩との…キス。

大河先輩を初めて知ったのは、入学式。

何かの手伝いで、式典に参加されていたようだった。

そのときは、女子なのに背が高い人だな〜、という程度。

その後、部活動を決めるための仮入部期間で陸上部に行ったとき、デモンストレーションで百メートル走が行われた。

その時、なんと他の部員に混じって、大河先輩が走ったのだ。

結果は、接戦の末の一着。既に一目置かれていたとはいえ、部員を押さえて一着とは…衝撃的な事実に驚いていた自分がいた。

それから、色んな噂を聞いた。

テストでは、必ず学年上位にいたりとか、スポーツ万能で時々助っ人をしてるとか、あまつさえコーチみたいなのもしてるとか…。

実は、先輩達と絡んだのはこの前の事故が初めてじゃない。

過去に廊下でぶつかったことがある。

あのときは、前が見えないくらいの資料を抱えて、準備室を出た瞬間にぶつかった。

実際には、もう一人の背の高い人にぶつかったのだが…

ドンッ！

「きゃあっ！」

「うわっとおっ！」

バサバサッ！

あ、床に倒れる…。

……………。

あれ？衝撃がこない…。

「だ、大丈夫？」

状況を確認。

なんと、大河先輩が下に潜り込んで私を受け止めてる！？

「いっちゃん、間に合った？」

「ん、なんとか」

「せやったら、こっちを何とかして〜。ハルが重くて」

「重いとはしつれーなっ！」

ぶつかった本人は、もう一人いた生徒を押し倒していた。

「もう一度聞くけど、大丈夫？怪我はない？」

「は、はい…」

「良かった。それじゃあ起こして…っと。さて、あっちも救出する
としますか」

「早うして〜。胸がつぶれる〜」

「そこまで重いのか、あたしはっ！」

「誰にでもない、ハルにつぶされるのだけは堪忍や〜」

「そこまで言うかつ！菜々に絶望するぞ」

「もう、漫才はいいから、ほら」

ハルと言われた背の高い人を引きはがす。

「いったい、なにが起きたんだあ〜？」

「春菜の前方不注視」

「原因はあたしかいっ！」

「…すいません。私が注意してなかったから原因の一つである私は、平謝りする。」

「いいんよ。全てハルが悪いんやから」

「…友達やめるぞ?」

「それよりも、散らばった物を回収しよう」

「おお、とんでもないことになってるなあ」

「スルーですか…しくしく」

先輩の一言で、資料を回収し始めるみんな。

「あわわ、私やりますう」

「いいよ、みんなでやった方が早いしね?」

そういつている間も手は止まらない。ものの一分で、ばらまいた全てを回収してしまった。

「ね、早かったでしょ?」

「あ、有り難う…ございます」

私は、しどろもどろに返事をしてしまった。

「春菜も悪いけど、貴女も気をつけてね?」

「まだ言うか」

ぶつかった本人にも謝らないと。

「すいませんでした」

「いいよいいよ。後でいちみを締め上げるから」

「…ほあゝっ、後ろを振り向いた瞬間にぶつかったのに、そういう台詞を吐くんだあゝ」

先輩の背後から、どす黒いオーラが見えた…気がした。

「あ、あはは…そうだったかなあゝ?…ゴメンなさいスイマセン勘弁して下さい」

「そちらさんも気いつけてな。早う戻ろ」

「そうね。それじゃ」

三人組の先輩方はそう言って去っていった。

程なくして、友人の一人が駆けつけてきた。

「千夏！すごいラッキーじゃないのっ！」

「ら、ラッキー？」

「だってあのお三方が、かの有名な『文武両道三人組』なんだよ？」
文武両道…三人組？

「そう。三年の先輩を差し置いて、人気上昇中の」
そうなんだ…。

「わたしら後輩では、なかなかお近づきになれない方達だよ。知らなかったの？」

「一番背の高い人だけは、知ってたんだけど…」

「…何々？ひよつとして、ホレちゃった？」

「ば！バカなことを…ううん、そうかも。」

もの凄くしつかりしていて、トラブルにも動じずに対処してたし、何より抱きしめられちゃったし…。

「ははは、顔真つ赤だよね？」

ええっ？！

そんなことがあって以来、私は先輩を密かに想い続けてきた。
それなのに…。

いきなりあんな告白をして、先輩引いちゃったかな？

しかも、逃げ帰ってきちゃったし…。

ああ、これから先輩にあったとき、どういう顔をすればいいのっ？

4（後書き）

病院飛び出した後の千夏視点です
3人組との馴れ初め？な感じです

… なんか、ぶつかってばっかだなw

二日後。

今日は、通学路を歩いていた。全行程を。

「おっ！ターゲット発見」

そんな声が、後ろから聞こえてきた。

「春菜、おはよう」

「ハロハロ」

いつもながらの軽快なノリの挨拶だ。

「おはようや、お二人さん」

あら、今日は菜々美の合流が早い。

「さすがに、昨日はガッコに来られなかったか」

「なんだかんだで、いろんな検査をされたからねえ」

昨日の光景は…もう思い出したくない。

「で、検査の結果は？」

早速、春菜が例の話題を振ってきた。

「取りあえず、異常なし」

「取りあえず？何かおまけがあるんか？」

「向こう一週間、運動禁止、だつてさ」

あらあゝ、と同じ台詞が二人から漏れた。

「おまけの部分は、母さんからの要望だけだね」

私は、自嘲気味に笑った。

「まあ、頭だし。おば…美紗子さんが心配するのも仕方がないって
今ここには母さんはいないから、言い直さなくともいいってば
(笑)。

「なら、週末のバスケの助っ人は…中止やね」

またの機会に…ってことで、今日謝りに行ってくる。

「事情が事情だし、分かってくれるよ」

「ほんなら、代わりに…」

代わりに？な、何か嫌な予感…。

「ちよう、ウチの部に見学に来いへんか？」

け、見学うゝ？

「せや。見学…ちゆうより、コーチに来てくれへん？」

あのおゝ、見学とコーチじゃ、だいぶ違うんですけど？

「県大会も近いし、お願いやゝ」

お願いやゝ言われても…。

まさか、あの部長が絡んでるとか？

「いややわあ、予定が空いたの今やん。これは、ウチからの依頼。

部長には、ウチから話すさかい」

そうだった。たった今、スケジュールが空いたばつかなのに、部

長が絡んでくるはずはない。意識しすぎかな？

「ま、いつか。部長のガード、頼むよ？」

「まかしとき」

「じゃあ、ついでにあたしんとも…」

「却下。なによ、ついでって…」

春菜のバレー部は、元オリンピック強化選手な人が顧問でしょうに。私が出る幕はないの。

「あ、そうだ二人とも。後で休んだ分のノート見せて」

「まっかせなさいっ！理数系はあたしが…」

「文系は、ウチの担当やもんな」

…などと言っているが、実は二人とも頭がいい。

学年の十番以内を、三つ巴の争いをしているくらいだ。

大抵、私が三人の中でトップ、そのときの調子で春菜と菜々美の順位が入れ替わる。さすがに、ガリ勉屋さんには敵わないが、私を含めて文武両道を地で行く三人組として一目置かれているみたい。

色々なたわいもない話をしながら三人で歩いていくと、一人の女の子が私達を走って追い越していった。そのときは別に気にも留めなかったが、その子は校門の約十メートル手前でピタリと止まった。それで気がついた。

「あの子……」

「ん、どつたの？」

「ほら、あの子」

「……ああ、この前の子やん」

そう、この間私に衝突した彼女だ。

藤宮千夏ちゃん……だっけな。

立ち止まって、深呼吸を繰り返している。

幾度か、立ち位置を変えている。しかも細かく。

「何をしてんの？彼女」

「しっ！黙って見とき」

そして、動作が止まったと思われた瞬間、彼女は走り出した！

一歩一歩、タイミングを計りながらしっかりとしたステップで校門へ近づいていく。

「へえ、しっかりとしたステップじゃない」

思わず、感想を漏らしていた。躍動感があると言ってもいいくらいだ。

そうこうしてるうちに、校門へ差し掛かる彼女。

次の瞬間、ジャンプ！

……と言うより、トンツ、と軽く飛んだだけだった。

「まあ……」

「砂場やないしな……」

本気で飛んだら、砂利で足を滑らせてお尻を打っちゃうしね。

これが、彼女が毎朝している『練習』かあ。人氣が少ないときはいいけど、この前な時間だと……まあ、この前は遅刻寸前だったし、そこまで余裕がなかったか。

「なかなかいい助走だったよ」

私は自然に、彼女に声をかけていた。

「え……？」

突然声をかけられてビックリしたのか、驚いてこちらを振り向いた。そして、

「あっ！」

私とわかった途端、さらに驚かれた。

「幅跳びが得意なだけあるじゃん」

「無駄のない動きやったよ」

他の二人も個々に感想を述べた。

「あ……ああ……ああ……」

あれ、様子がおかしいぞ？顔もなぜか真っ赤になってるし……。

「ししし、失礼します！」

そう言い残すと、脱兎のごとく私達の前から離脱していった。

「……」

ぽかーんと、取り残された私達。

いち早く復活したのは、春菜だった。

「なんだあ？あの態度。先輩を何だと思っとなるんじゃあああああっ

！」

スパーンッ！

「あだっ！なにをするさー」

「やかましいって」

おお、珍しく菜々美がツツコミを入れている……って、そのハリセンはどこから？

「関西人の常備品だよ」

吉。芸人以外は持つていないと思います（その認識もどうかと……）。

「しかし、何で逃げ出したんやろ？」

「いちみを見た途端、だったよな」

「ウチら、アウトオブ眼中やったなあ」

十中八九、あのせいだ。

勢い余って告白しちゃったのが一昨日。

いくら忘れてくれと言っても、告った相手が目の前に現れたら、そりゃあ恥ずかしくて逃げ出しちゃうよなあ。

「……」

なぜか、二人の視線が私に突き刺さっている。

「いつちゃん、一昨日…」

「あたしらが帰った後…」

「何かあった?」

一時限が始まる少し前の2―D教室。

私は、燃え尽きて自分の机に突っ伏していた。

キンコンカンコンコン…

ガララッ!

「きりーつ、礼、着席ー」

ガタガタガタ…

「では、授業を…おい、大河。どうした、なに白くなってんだ?」

「…もう…何も…出ません…勘弁して…」

「な、なんだあ?」

ドッ!

クラスが笑いに包まれていた。

ツカツツカッ…

パコン!

「あいたあっ!」

「何があったか知らんが、しゃんとしろ」

教科書で軽くはたかれたらしい。

「暴力反対」

「なら、普通に前を向いててくれ」

「…は…い」

あゝあ、怒られちゃったよ。

「クツクツクツ…」

ん?前を見ると、春菜が笑いを抑えていた。

ムカムカッ!

あまりにもムカついたので、先生が黒板に板書しているタイミン

グを見計らって、

（天誅っ！）

スパーンッ！

春菜の後頭部をノートではたいてやった。

「いったーっ！」

突然の大声に、教室中が注目する。

「何かな？等々力」

「い、いえゝ。何でも」

ゲラゲラと、みんなが笑っていた。

（何すんのよっ！）

（元はと言えば、あんたのせいよっ！）

（へーへー、悪うござんしたね）

（まったく…）

小声で悪態をつきあう私と春菜。

朝の出来事の後、私は悪友（もう、親友じゃないよ）二人に一昨日の事の顛末を、自分のクラスに着くまで根こそぎ尋問された。

さらに、告白されたことをクラスでバラされてしまい、大騒ぎとなった。

『まさか、あの子に告られるとはねえ…』

『何々ゝ、告白うゝっ？』

『誰か告られたの？』

『そのスポーツ万能娘』

『えゝゝゝゝっ！？』

『えゝって何よ！勢いで口が滑っただけよ…たぶん』

『何人目よ？』

『はあ？』

『告られるの、何人目？』

『ちよ、待って。確かに手紙とかは貰うけど、女の子から告白なんて初めてよ？』

『へえ~~~~っ、意外ねえ…』
『あんたら、私をどんなだと思ってるのよ…』
『ちなみに、相手は？』
『陸上部の下級生や』
『ちよっ、そこまでバラすのっ？』
『勢いとはいえ…』
『告るなんて、勇気あるわね』
『うん、ウチもビックリや』
『一番驚いてるの、本人なんですけど…』
『しかし、三人組の中から、一美を選ぶとは…』
『人を見る目はあるよね』
『ちよっと待て。すると何かい？あたしはダメな女かいっ！？』
『ハルは、外見はいいとしても…』
『性格がねえ？』
『あんたらっ！絶望した！このクラスに絶望したっ！』
『もう、ほっという…』

以上、回想終わり。

そんなこともあつて、授業にも身が入らない。
いつしか、私は窓の外を見ていた。
どこかのクラスが、グラウンドで体育の授業をやっていた。
ソフトボールをやっているようだった。
しばらく、その光景を眺めていた。
なかなか白熱したゲームみたいだね。
…ん？

あ、あの子…。

バッターボックスに立った子を見て、ハッとなった。
千夏ちゃん
彼女のクラスだったのか。

構えは…まあまあ形にはなってるね。
状況は…ランナー、二塁。

カウントは…立ったばかりだからおそらく0―0。
一球目。

ストライクのコール。微動だにできなかった。
慎重に見たのかな？

二球目。

ぶんつ、という音が聞こえそうなスイング。だが、ボールは飛んでいっていない。

当然、ストライク。

三球目。

フルスイング！…したはいいけど、あらら、尻餅着いちゃったよ。
ボールは…キャッチャーミットの中。

スイングアウト、三振。

「あらあゝ、残念」

小さな声でつぶやいた。

「私も残念だよ」

「それは奇遇だ……ね……？」

気がついたときは、時すでに遅し。私の横には、先生が立っていた。

「授業そっちのけで、ソフト観戦か？」

「あはは……、すみません」

「…放課後、職員室へ出頭せよ。復唱！」

「大河一美、放課後職員室へ出頭します！」

「うむ、では授業を再開する」

「やっちゃったあ…」

あ、春菜がまた笑いを堪えてる。

今回は自業自得だけど、彼女に笑われると無性に腹が立つのよね。
え。ストレス解消に、またはたいてやろうかしら。

5（後書き）

日付が進みまして…

一美が教室で大変なことにw

火付け役は、もちろん春菜^^

途中、気になる台詞があると思いますが
華麗にスルーしてください（え

放課後。

「ふう……」

職員室を後にした私。

まあ、普段の行いが良いせいで（自慢かよ）、お小言だけで済んだ。

いつもはこんな事はないんだけど、あの子が目に入ったせい……いや、あの子のせいにしてはいけない。自分が悪いのだ。

……でも、あの子がいると分かった途端、目が離せなくなった。それは事実。

なぜ？

そんなの、自分で分かるわけがない。

告白されたことに対して、意識してる？

何だろ……このもやもやした気持ちは……

しばらく考えながら歩いていると、いつの間にかグラウンドの脇に来ていた。そのまままっすぐ行くと、正門がある。

ふとグラウンドを見ると、陸上部が練習していた。

（今日は、陸上部の番なんだ）

グラウンドは、ソフトボール部・サッカー部・陸上部が日毎に順番で占有している。グラウンドが使えない日は、側にある運動公園（学園で一部出資したという噂がある）で練習している。

陸上部：あの子がいるかもしれない。

そんなことをふと考え、時間も今日はたまたま余っていたので、見物することにした。

「お、一美じゃない」

手近な所に座り込んで、見物して小一時間。

陸上部所属の元級友が、目ざとく私を見つけた。

「どうしたの？今日は」

「ん。何となく見物？」

「コーチ依頼もしてないのに、珍しいね」

「そういう日もあるわよ。休憩？」

まあね、と言いながら彼女は私の隣に腰掛けた。しばらくたわいもない話をしていたが突然、『あの話』を振ってきた。

「ところで…陸上部^{ウチ}の子に告られたって？」

「ぶーーーーーっ！」

飲んでいたジュースを吹き出してしまった。

「な、な、な、なんで知ってるのっ？」

「情報元は彩恩」

…ああー、菜々美と同級だっけ、今年は。

というより、私の知らないところで喋ってるの？菜々美は。

「そんな噂があるよ、ってメールが回ってきて、彩恩に回したら詳細な内容が返ってきたわけ」

「じゃあ、ほとんど知ってるのね…」

否定する余地は無し…と。

「相手は藤宮…だっけ」

「ん」

「藤宮は…ああ、あそこだ」

彼女の指さす方向を見ると、グラウンドの隅にある幅跳び専用レーンに、あの子がいた。

「…いた」

今朝のように助走を確かめたり、本番さながらに跳んだりしている。他の部員と色々話しながら、真剣に練習していた。

「何か気合い入ってるね」

「そりゃそうよ。今度の日曜日に、記録会があるし。その結果次第で、全国大会の予選に出られるか決まるもの」

「記録会？予選？」

聞き慣れない単語に、プチ混乱。

「そ。全国大会の予選出場を賭けた記録会。他の部で言うなら、レギュラー争いつてどこ？」

わかりにくい例えだが、言いたいことは分かった。

「まあ、ゆつくり見物していつてよ。何なら口出ししても構わないから。一美、ウチの顧問と先輩達に一目置かれてるから、大丈夫」

「そうはいつても…」

「ああっ！休憩時間過ぎてるっ！ゴメン、戻らないと」

「はいはい、いつてらっしゃい」

「ごめんね」と言いながら、彼女は戻っていった。戻ったところで、先輩に怒られている。

こっちこそゴメン、と心の中で謝る。

取りあえずは、幅跳びの様子を眺めてみよう。

口を出しても良いとは言ってたものの…今朝のこともあるから出しにくい。

しかし…ええい、もどかしい！

「助走のタイミング、ちゃんと取ってる？」

とうとう、口を出してしまった。

「え………あっ！」

気づかれた。

「あ、あ、あ、あ…」

まずい、これでは今朝の二の舞。

「あっ…」

逃げ出す前に、ガツシリと腕を掴む。

「ああ、ごめん。痛かった？」

「い、いえ…」

「こうしないと、今朝みたいに逃げられちゃうから」

「……ごめんなさい」

今朝のことを思い出したのか、縮こまっちゃったよ。

「まあ、昨日の今日だし、気持ちは分からないでもないかな？でも、逃げてちゃ何もならないでしょう」

「あうう……」

「あまり逃げられてばかりだと、嫌われてるみたいで逆にへこむわよ」

「い、いえ！嫌ってなんかいません」

勘違いされたと思ったのか、今度は慌てふためいている。

「わかってるわ。でも……今は、あなたの気持ちに答えられない」

「……えっ？」

見た目で分かるくらい、彼女は落胆した。

……いけない、言葉を間違えた。

「ああ、そうじゃなくって……私の方も、混乱していて気持ちの整理が出来てない、そう言いたい」

「……」

無反応。なんか怖い気もする。

「勢いとはいえ、気持ちを伝えてくれたことに対して、真剣に返事を返したい。だから、整理する時間を下さい」

言い終わると同時に、頭を下げた。

「そ、そんな……先輩が頭を下げるなんて……」

彼女は驚いている。私が頭を下げるなんて、思ってもいなかっただろう。しかし、これが現時点での私の正直な気持ち。

「あ、頭を上げて下さい。みんなが見てます……」

なにげに頭を上げると……うわ、注目の的になってる？

「先輩の気持ちは分かりました。では、お返事を待たせてもらいます」

「うん。そうしてくれると助かるわ。取りあえず、この件は置いて……」

「はあ……」

「黙認だけど、許可は出てるらしいから口を出させてもらっわよ」
臨時コーチモード、発動！（どんなだよ！）

「えええっ！？」

驚いても遅い。もうスイッチ入ったからねっ！（あのおく、キヤラが変わってるんですが…）

ふと、校舎の壁にある時計に目をむけた。

「あ、もうこんな時間だ」

結局、フルに部活に付き合ってしまった。

「家、大丈夫かな…？」

お父さん、おなかを空かせて待つてるかも…。

真剣に藤宮さんの練習を見ていたため、時間のことをすっかり忘れていた。

仕方ないもの。藤宮さん、教えれば教えるほど上達していくし、技術をスポンジのように吸収して…んもう、また人のせいにしてるよ。

でも、すごく良くなったのは事実。飛翔時のフォームが格段に良くなり、距離が出るようになった。これは、今度の記録会で期待できそうね。

「あとは、踏み切りを安定させる事ね」

「…は、はい」

ちよっと、お疲れモードかな？

「ステップはしっかりしてるんだから、位置と歩数が合えばファールの確率がかなり下がるはずよ」

「わかりました」

「記録会、頑張ってね」

「は、はいっ！」

うむ、相変わらずいい返事だねえ。

さて、帰り支度をして早いとこ家に帰らないと…。

「あ、あの…大河先輩…」

「ん？何かな」

「…あ、あの…ですね…き、記録会…なんですけど…」
「うんうん」

そこへ…

「一美…、彩恩が呼んでるよ」

元級友の声が飛んできた。

「はいな…。それで？」

「…あ、いいえ、いいです。何でもありません」
「ん？何だっただんたろう？」

「そう？じゃ、ごめんね。急ぐから」

「はい、ありがとうございます」

「じゃね…、と言いついて残して、呼ばれた方へ向かう。」

「いつちゃん、珍しいなあ。こないな時間に居るなんて」

「ん…、たまたま？」

「どういう風の吹き回しや？今日はコーチの日やないやろ？」

「なんで、私の予定を知ってるんですか。」

「菜々美には、なぜか私の予定が筒抜けになっていることがよくある。別に教えている訳じゃないのに、私より詳しいときがある。」

「そこは企業秘密や」

「え？な、何で、私の考えてることが？」

「独り言、大きすぎやよ？」

「ガーン…母さんにも言われたけど、そんなに？」

「まあ、それはさておき…ホンマ、この時間におけるのにはビックリや」

「偶然と言えば偶然だけど…」

「事の経緯を、菜々美に教えた。」

「ふ〜ん、そうなんか」

私の説明で、合点がいったようだ。

「取りあえず、急ぐんやろ？ 帰るか」

二人並んで、校門を後にする。

「そういえば、春菜は？」

「体育館にはまだ明かりが点いてたから、まだ終わってないのかな？」

あそこの顧問は、練習熱心だからなあ……。時間オーバーしてよく怒られてるし。

「それで、どないするの？」

……は？

「日曜日や。記録会、見に行くんやろ？」

何でそうなるんですか？

「あの子、誘ってきたんやないの？」

「そんなこと、一言も言ってなかったよ？」

「はあ〜〜〜っ」

盛大にため息をつかれてしまった。

「あんなあ、帰り際に記録会の話を持ち出したって事は、見に来て欲しかったんやないの？」

あ…………。

「憧れの大河先輩に見に来て欲しくて、話を持ち出したんちゃうかな？」

「憧れって……」

そういうこと……なのかな？ 確かに、言われてみれば何かを言いたそうだったけど。

「いっちゃんって、意外とニブやなあ」

ガア〜〜〜〜ン！

「そ、そうなのかな？」

「乙女なら、気付きそうなもんやけどなあ？」

それは、遠回しに老けたと言ってるのデスか？

「あははっ、ちやうちやう。まあ何にせよ、日曜日はお出かけな
そういうことになるのね。私は、まだ治りかけの怪我人だとい
うのに……ああ、私の安息な日々はまだ訪れないの？」

6（後書き）

6 話目ですw

部活のシーンを書いてみました

ちよっとぎくしゃくしてた一美と千夏

一応、収まった…ように見えますが、さて？w

次回、時間軸は日曜日に飛びます

ピピ、ピピ、ピピ……。

「…うにゃ？」

カチャッ。

右手が、的確に目覚ましを捉える。

…あれ？夕べ、目覚ましなんかセットしたっけ？

たしか、今日は日曜だからってセットしなかったはずなんだけど…。

そんなことを考えながら、ムックリとベッドから身体を起こす。

「お、起きよった」

「グッモーニン」

「おあよ…」

声がする方に向いて挨拶して……固まった。

「な、な、な、な……」

「もう六時半だよ？」

「起きろ〜、いちみ〜、生きてるか〜」

な、何であんた達がここにいるのよ〜っ！

「いっちゃんを起こしにきたんよ？」

「出掛けるんでしょ？運動公園に」

そりゃあ、その予定だけど……って、どうやって家に入ったのよ！

「普通に玄関から」

「鍵は？」

「昨日たまたま街でお母はんに会ってな、『鍵を例の所に置いておくから、娘をよろしく』って」

「父さんは？」

「さつき、慌てて出て行ったよ？会社のシステムがどうたらこうたらで」

また、休日出勤？って、それはいいとして。

「現地集合じゃあなかったの？」

「イベントを盛り上げるための、ちょっとした演出？」

「バラエティー番組じゃないんだから、そんな演出いらないわよ。」

「まあ、それよりも」

「朝食出来とるよ。食べるやろ？」

「突発イベントで、食欲なくなつたかも…。」

「あかんあかん。食べなあかんよ」

「折角用意したのが無駄になっちゃうよ」

「…そうだね。頂くとしますか。じゃ、着替えないと…。」

「はい、脱ぎ脱ぎしましょうね」

「替えの下着はどこやったかな」

「下から二番目に派手めのヤツがあるよ？」

「勝負下着、つてやつやな？ほんならそれでいこか」

「あ、あ、あ、あんたら……っ！」

「一人で出来るから、出て行け……っ！」

「勝負下着は？」

「そんなの必要ないっ！」

「つまらんのっ…」

「なんでやねん！」

「なあ、いつちゃん。まだ怒ってるん？」

「いい加減機嫌直しなつて。いちみらくないぞ？」

「朝食を摂取後、私達三人は運動公園へ向かっていた。」

「……誰がこうさせたのよ？」

「久しぶりに、怒りゲージが溜まっていた。」

「朝のひとときが台無しになった、その一点で私は怒っていた。」

「こりゃあ、しばらく収まらないなあ」

「この通り、堪忍や。ちょう、悪ノリし過ぎた」

「菜々美は反省しているようだし、許しても良いかな。」

問題は……。

「朝起こしに來ただけなのに、何で怒るかなあ」
「かつついゝゝん！」

怒りゲージピーク！

「ほほゝう？あ・れ・で・起こしに來ただけえ……」

「朝ご飯も作ったよね？」

「私はその後のことについて、怒ってるんだけどお？」

「……何かあったっけ？」

ブチブチッ！

「いっぺん、逝ってこいやあゝゝゝっ！」

ブウワキッ！

私の鋭いアツパーが炸裂！

「あたしが悪うございましたあゝゝゝっ……」

キラリン……

春菜は星になった。

「いっちゃんの本気、久しぶりに見たわあゝ」

何、菜々美も味わいたい？

「いやいやいやいやいや、滅相もない」

そう、残念ね。

「……うう、いっちゃんイジワルやわあ」

それもこれも、この二人に朝を任せた母さんが悪いんだから！
帰ったら、覚えておきなさいよおゝゝ？

ブルルッ！

「……ん？師長、どうかされました？」

「いや、何か悪寒が……ね」

「風邪じゃないですよ？気をつけて下さいよ」

「有り難う」

なゝんかイヤな予感……まさか、一美怒ってる？

さて、そうこうしているうちに運動公園に到着。

近隣の学校と合同で記録会を開催しているようで、結構な数の人がいる。

情報通の菜々美の話だと、今回は公式な記録会では無いらしいのだが、ここの陸上競技の設備を格安で借りるために近隣の学校に声をかけて、今回の記録会が実現したらしい。結構立派なトラックだもんねえ、ここ。

…ていうか、菜々美の情報網、恐るべし。何でそんな裏情報みたいな事まで知ってるのかしら。

「さうて、幅跳びのフィールドはつと…」

いつの間にか復活していた春菜が、フィールドを探し始めていた。

「まあ、大抵はメインスタンドの真下やな」

「そうなの？」

「ある程度まつすぐな直線が必要とこなんて、限られてるやん」

そうね。幅跳び、三段跳び、棒高跳びはある程度の距離が必要。必然的に場所は限られる。

「ん、最前列はさすがに応援組で埋まってるかあ」

参加する生徒を応援する両親達でいっぱいだ。熱が入ってるところは違うねえ。

「でも、中段ぐらいなら充分座れるよ？そないぎょうさん人がおるわけやし」

んじゃ、砂場が見える所で中段を確保しますか。

「ところで、お昼はどうするの？」

私は何気ない質問をした。

「もうお昼の心配なん？」

「そんなんじゃないっての」

誰一人（私も含めて）荷物を持っていない。お出掛けのバッグは当たり前としても、中にお弁当が入っているような雰囲気もないじゃない。

「公園の門を出てすぐの所に水力弁屋があるじゃない。結構おいし

「いつて評判らしいよ？」

「弓道部で割と寄らせてもろてるしな。そこでええかと」
菜々美のお墨付きなら大丈夫か。

「あたしの評判はあ？」

「あんた、たまにハズレを持ってくるから信用ならん」

「今日のいちみはDSだあ」

人聞きの悪いことを言うな。それを言うなら、自業自得よ。

「お、いよいよ始まるようやよ」

見ると、インフィールド中央に、各校の選手達が集合していた。
「……いた」

早々と、藤宮さんを見つけてしまった。

まだ、向こうは気付いていない。

何かホッとした気分。

「おお、割と後ろ目にいますなあ。どう見ます？解説の彩恩さん」
「下級生ですから、仕方ないかと」

アホなことをやってる二人は無視。

この前の練習の成果を、見せてもらうわよ？

7 (後書き)

日曜日編、序章…ってとこかな？
朝からイベントラッシュ？w

トラックでは、400m走が行われていた。

「非公式な記録会にしては、気合い入ってない？各校とも」

「今回の記録を参考に、県大会の出場選手を決めるガツコもあるみたいやしな」

またもや、菜々美の裏情報炸裂。

まあ、ウチの陸上部も予選を兼ねてるって元級友が言ってたっけ。気合いも自然と入る…てどこか。

「ところで、幅跳びはいつ始まるんだあ？」

「スケジュールにもうすぐやと…あ、出てきた」

メインスタンド下に視線を移すと、選手や役員が出てきて幅跳びの準備が始まった。

選手を見ると…ざっと十四、五人いるかな？

その中に…彼女はいた。

「そんな小柄には見えないね」

「あんたたち二人が大きすぎるんや」

ごもつとまで。

「二人が並ぶと、ウチまで小さく見えてしまっくんやから。ちょっとした悩みのタネや」

意外にも悩んでたのね、小さいこと。

「あんたたちがデカ過ぎなんやあ〜」

珍しく、菜々美が吠えた。

「その代わり、菜々は乳がでかいじゃん。あたしはそっちが羨ましい…」

こっちも、珍しく春菜が落ち込んでる。

「胸が大きくても、良いことないんや。肩が凝るばかりで」

はいはい、自虐ネタはよそでやってなさい。観戦の邪魔よ。

「よっ。やっぱり観戦に来たか」

声がした方向を見ると、元級友がスタンドに来ていた。

「あれ、出番は？」

「取りあえず、一つ終了。次まで時間があるから、休憩がてらあがつてきたってわけ」

なるほど。

「その二人はどうしたの？」

「ああ、勝手に吠えて勝手に自滅してるだけだから」

「…何か、よくわかんないんだけど」

元級友は理解に苦しみ、苦笑していた。

「彼女の応援？」

元級友が、前触れもなく聞いていた。

ボンツ！

一気に、顔が上気するのがわかった。

い、い、いきなり何を聞くのっ！

「か、か、か、彼女じゃないわよっ！」

付き合ってるわけじゃありません！

「そんなに過剰に反応しなくても…藤宮の応援でしょ、って意味で聞いたのに」

……ああ、そゆこと。早とちりしました。

「確か八番目に跳ぶとか言ってたなあ」

ということとは、もうすぐね。

「何本跳ぶの？」

「予選三回、決勝五回…だったかな？」

予選なんてあるんだ…。

「予想より参加人数が多かったらしいんで、急遽そうしたらしいよ？」

「大変ねえ」

「そう思っなら、しっかり応援してやって」

まあ、元よりそのつもりだし。

「それにしても…」

なに？

「彼女」に反応するなんて、あんたも気があるんじゃないの？」

そ、そ、そ、そんなことは……ないと言い切れない。その辺りのことで、数日悩んでるのは事実。

「うわあ、ビンゴですか？」

「よくわかんないのよ。事故以来、気になる存在なのは確かだし、気がつくと自分の視界の中に彼女がいるし……」

そこまで喋って、気がつくとな元級友はため息を盛大にしていた。

「一美、あんた立派に恋してるじゃない」

○

[illegible]

わ、わたし、私、藤宮さんに恋してる……っ？

あんだ、気付いてなかったの？みたいな視線が、元級友から私に突き刺さっていた。

「ま、そこがいちみだしね」

「そうそう。いっちゃんニブやから」

いつの間にか現実に戻ってきた二人にも、攻められていた。

「い、い、いって恋…なの？」

「どう見たって恋だよねえ」

「
んだ
んだ
」

「もしかして……経験ないん？片思い」

そんなことはないけど。

でも、相手は女の子、同性よ？そんな感情が起こるなんてあり得ないでしょ？

「普通ならね」

「でもあんたは告られてるわけだし」

「そこから始まる恋心……つちゆくのもあり、やないかな？ 実際、かわええ娘やし」

そこは、私も認めるけど……。

思い返してみたら、恋煩いみたいな行動をしている記憶は幾つか

あるし、気になってるのは確かだし。

「確定やね〜」

「さあさあさあ、告白はいつ？今日？」

「ま、そう焦らせてもダメだよ」

うるさい外野は無視して…と。

幅跳びレーンに視線を移して…あれ？

い、一本目が終わってるよ。

ガクツ。

バカ騒ぎしてて、観戦を忘れてるとは…。これじゃ、目的がなんなのかわかんなくなっちゃうよ。

ふと、彼女と視線が合った。

あんだけ騒いでたら、イヤでも気付くよねえ。

取りあえず、はにかんで片手を挙げた。

一応、見に来たよ〜の意思表示で。

…ぷいつ。

「え…？」

私は目を疑った。

何か、怒っていらっしやる？

私、何かしたかしら。怒られる理由がわからない。

告白した側が怒ってるなんて、どういうこと？

ようやく、自分の気持ちに気がついたというときにこれじゃあ、

落ち込みますって。

「…あれ？いちみ、どったの」

「今度はいっちゃんが、自虐ネタかえ？」

「何があつたの、一美？」

8（後書き）

いよいよ試合が始まりましたが…何しに来たんだこいつらw
観戦そっちのけでコイバナかよ^^;

ということで、一美が自分の気持ちに気がつきました
周りのおせっかい共のおかげで（お
この先どうなるのか？

さて、どうしてやろつわまてなにするのはなせやめ

「幅跳びの選手は、集合して下さい」

コールが掛かった。

いよいよ出番だ。

今回、選手は十六名。予定人数より登録数が多かったので、急遽予選を行うことになった、と大会スタッフから説明があった。予選で、半分が振り落とされる。

自分にとって、公式じゃないけど学園では初の大会。先輩の話によると、全国大会予選の選考も兼ねているとのこと。全国なんてまだまだなレヴェルだけど、その前にある県大会には出てみたい。

…でも、誘えなかったなあ。

この前は、折角のチャンスだったのに、恥ずかしさと邪魔が入ったせいで…。

いけないっ！

ネガティブに考えてはいけない。

タイミングが悪かったのだ。

また折を見て誘えばいい。

チャンスはいくらでもある。

でも、せっかく大河先輩にもコーチしてもらったんだから、目の前で結果を出してみたい。

「では、一番手の宮脇選手、準備して下さい」

あ、予選が始まる。さあ、余計なことは考えないで、集中集中。

私の跳躍は八番手。教えてもらったことを思い出して！

「千夏。緊張してるかい？」

同じ種目に出場の先輩が、声をかけてきた。

「あ…、キミー先輩。やっぱ、緊張しますよ？初めての大会だし」
ならかわきみえ

榎川公江先輩。県でトップクラスの实力を持つ凄い先輩。先輩達がキミーと呼んでいるのに習い、後輩も『キミー先輩』と呼ぶ。っ

ていうか、それ以外での呼び方では振り向いてもくれない。名字で呼んだ後輩が怒られていたところを目撃したこともある。

「ま、何回出てても大会は緊張するよね」

「え、キミー先輩ほどの人がですかあ？」

「あたいは鉄人じゃあないっての」

苦笑する先輩。その笑いで、幾分か緊張も和らいできた。

「むしろ、少しは緊張もしてないと良い記録は出ないからね。あまり緩んでいると、記録も緩みっぱなしだよ」

「そんなもんですかね」

「そんなもんよ。上を目指してる以上、気負いがないと壁を越えられないよ？」

何となく言いたいことは分かりました。

「順番は？」

「八番目です」

「うーん、微妙な順番ねえ」

やはりそう思いますか。

自分でも、この順番は微妙な気がしていたんです。

「でも、記録を出せば順番なんて関係ないし」

「簡単に言いますねえ……」

この人の強さはこのメンタル面。

去年の県大会で一番手で跳躍し、そこで凄い記録を出してきて後続の選手にプレッシャーを与え優勝してしまった、という逸話のあるもの凄い人なのである。ここ一番でのメンタル面の強さは半端じゃない。

「やっぱ凄いです、キミー先輩」

「そう？もつと褒めて褒めて」

……これがなければ良い先輩なんだけどねえ。

時々子供じみた行動＆言動が出るのがキミー先輩の欠点。裏を返せば、親しみやすい先輩でもある。

「ま、あたいの実力はかずみんのおかげでもあるんだ」

「かずみんって？」

「千夏もコーチしてもらったんでしょ？大河一美」
えっ、大河先輩？

「去年の春か…記録が伸び悩んでる時に、かずみんが体験入部に来ていてね？『それじゃあダメです』ってダメ出しされたのね」

「き、キミー先輩にですか？」

す、すごい…先輩にダメ出しできるなんて。

「それじゃあ跳んでみなさいよ、って喧嘩売ったら、いともあっさり私の記録を大幅に超えたわけ」

そ、そんなことが…。

「目の前でそれをやられたら、もう負けを認めるしかないじゃない？それからは、あたいの何処が悪いのか根掘り葉掘り聞いたわよ」
それで、今のキミー先輩の跳躍がある、と。

「そう。その後、部員全員でなんとか入部してもらおうと必死に勧誘したんだけど…」

ダメだったんですか？

「家の事情で、どうしても部活動が出来ないって頑なに拒まれて…諦めたわけ」

家の事情って、なんなんでしょうか？

「さあ、その辺りはプライバシーもあるから、こっちらも敢えて聞かないわ。でも、部長がいたくお気に入りだから、ウチの部には出入り自由ってことになってるのよ」

だからですかあ。大河先輩がいても、誰も何も言わないのは…。

「いろいろ聞いたおかげで、メンタルも強くなったのよ。やっぱ、出来る子は違うね」

そういう意味では、先輩も違うと思いますが。

「それで先輩？その時の大河先輩の記録って…」

「あたしもまだ超えられないのよ」

県実力ナンバーワンとまで言われるキミー先輩でも超えられない？
「なんせ、即全国優勝してもおかしくない位の記録だから…良い目

標にはなってるんだけどね」

な、何て事！

噂はいろいろ聞いていたけど、勉強が出来て運動能力もこれほどずば抜けているとは…。ますます惚れ直しちゃいますっ。

「次、藤宮選手」

あ、順番が来た。

「ま、取りあえず教わったことを思い出して、確実に一本跳んできな」

「はいっ！」

「うむ、良い返事じゃ。行ってこいっ！」

よしっ！まずは一本。

助走の開始地点、確認。

踏み切り地点、目視…オケ。

風向き…よし。

いざ、スタート！

タッタッタッ…

3…2…1…ここだっ！

ダンッ！

空中姿勢を気をつけて…。

ズザ~~~~ッ！

うん、なかなか良い感じ。

「ただいまの藤宮選手の記録………」

よしっ、自己ベストちょい手前！一本目から良い感じ。

「なかなか良いじゃない」

「あ、有り難うございます！」

キミー先輩に褒められた。

そこで、何気なくスタンドを見上げた。

「！」

大河先輩！

見に来てたんですかつ？

…ん？何か仲間内でじゃれ合ってるような感じがするんですが。良いよなあ、あの二人は大河先輩と距離が近くて…。

当たり前だよな。同学年だし。あの三人組は結構有名だし…私もあんな風に近づけたらなあ。

しかし…私を見に来てくれたんじゃないんですか？

ううん、私は誘ってないからそれは自惚れかな？

でも、ここにいてるって事は、少なからず期待をしてしまう。

でも、観戦してるんですかあ？

「あ…」

目が合った。

片手まで挙げてくれた。

私を見に来てくれたんだ。

でも、何故か私はそっぽを向いてしまう。

なぜ？こんなことしたくないのに。

まさか、嫉妬？誰に？なぜ？

大河先輩の返事はまだ聞いていない。

だから？いや、違う。

さっきの凄い記録の話聞いたから？

それも違うような…。

何だか、自分の気持ちがわからない。

でも、先輩を好きなのはハッキリしている。

私の気持ちをかき回しに来たんですか、先輩？

「ん、どした？千夏」

「い、いえ、なんでも…」

「しっかし、ウチの応援団も気合い入ってるねえ…ん？例の三人組が来てるじゃん。珍しい」

え、珍しい？

「三人揃ってスポーツ観戦ってのが珍しいんよ。いつもは、誰か一

人が試合に出ていて残りが応援、って言うパターンだから」

そうなんですかあ…。

「そう。かずみんも来てるし、教わった者としては良いところ見せないかね」

「…そうですね」

また、ネガティブ方向に行ってしまったようだ。まだまだ試技は続く。集中集中っと。

9（後書き）

大会が始まってからの、千夏視点です

前回とほぼ同じ時間軸です

何故か新キャラも登場（お

一美のちょっとした過去が垣間見えます

先輩に平気にダメ出しするとは…おそろしやw

走り幅跳びを表現するのって難しいです

変なところがあったら、容赦なく…いや、お手柔らかにツッコミをく何

「以上が決勝進出の選手です。決勝は三十分後に開始します」

決勝進出選手リストが張り出された。

ええっ、ギリギリ…残ってるう？

「やったじゃん、千夏！一年ではあんなだけだよ」

「び、ビックリです。初めての大会なのに…」

「かずみん効果が出始めてるかな？」

どんな効果ですか、それ…。

でも、確かに自己ベスト超えは無いけど、その近辺に三本とも揃った。ファールもない。

やっぱ、『かずみん効果』出てるのかな？

「ここまで来たら、自己ベスト超えなさい」

え~~~~~っ！

「どうせ、上はあたいがいるから無理として」

うわ、自画自賛ですか。

「折角、自己ベスト直前まで来てるんだから、いつそのこと超えてしまいなさいな。これ、先輩命令」

出来るかなあ…。

「出来ると思つてやらなきゃ、出来るものも出来ないよ？」

ダメ元つて言う言葉もありますけど？

「それは最後の大逆転を狙つてるとき。全てを出し尽くして戦いに挑むときに使う言葉。今の千夏には関係ない」

…そ、そうですか。

「最初の壁ね」

壁って…。

でも、確かに今日は調子が良い。練習も含めて、まだファールを一回もしていない。こんなの初めて。

自己ベストまであと四センチ。

よし、やれるだけやってみよう。キミー先輩の言うとおり、気持ちが一番最初から負けていたんでは、良いジャンプが出来ないのは確かかも。せっかく、大河先輩も見に来ていることだし、良いところを見せないと。

「では、走り幅跳びの決勝を始めます。跳躍は、予選下位から順に行います」

予選下位から…って事は、私からっ？！

「うわゝ、プレッシャーになっちゃったねえ」

…こんな所で憐れみの目を向けないで下さい、先輩。

「でも、跳ばなきゃ…ですよね？」

「そ。まあ、勝てるわけじゃないから、気楽に行つてきな」

「勝つのは、キミー先輩だから？」

「そゆこと」

二人でウケてしまい、大笑いする。

何か、妙にリラックスしちゃった。

…まさか、これも先輩の計算？さすがです。

「藤宮選手、準備して下さい」

おっと、コールがかかった。

もう一度、キミー先輩を見る。

「」

パチン、とウインクで答える先輩。

（行つてきます）

そつ心の中で返事をし、スタート位置へ向かう。
スタート位置に着き、砂場と対峙する。

（さあ思い出せ、私）

目を瞑り、集中。

目を開け、歩いて歩数の確認。

再度スタート位置に立ち、もう一度集中。

そして、上体を少し引いて反動を付けて、スタート！
タツ、タツ、タツ……。

ステップOK。

踏み切り板が迫る！

3 , 2 , 1 ……。

ダンッ！

いっけええええっ！

フワッ…。

空中姿勢をしっかり…。

ズザア~~~~ッ！

着地成功…っ。

記録員が、計測している。ということは、ファールじゃない。
それよりも、記録はっ？

「ただいまの藤宮選手の記録……」

うつわあ~~~~っ！あ、あと一センチ…。

ガックリと項垂れ、選手待機所に戻る。

「オッケーだよ、千夏！良い跳躍だったよ」

キミー先輩が駆け寄ってきて、手放しで褒めてくれる。

「有り難うございます。でも…」

「でも？」

「自己ベスト、越えませんでした」

ああ、と納得したのか、手を打つ先輩。

「まだ四本残ってるよ。今のジャンプが出来れば、行けるよ」

「…そうですね。まだ、一本目ですもんね」

「そう、その意気。今のモチベーションを崩さないで」

「はいっ！」

さすがは、メンタルの強い先輩だ。落ち込んだ私を持ち上げて、
励ましてくれた。

ホント、よく人を見るよ。

「次、榎川選手」

…あれ？もう先輩が呼ばれた？

「先輩、予選トップじゃないんですね？」

「ん？ああ、予選は色々試していたから、練習みたいなものよ」

「はは……」

予選を練習って…やっぱ、あなたは器が大きいですよ。

「じゃ、行ってくるかね」

「頑張つて下さい！」

後ろ姿で、ひらひら手を振って答える先輩。

ここからが、先輩の本気。じっくり見させてもらいます。

一本目終了。

現在、私の順位は八人中八位。

まあ、決勝に残ただけでも奇跡みたいなものだしね。取りあえず、無難なところか。

そして、暫定トップは我らがキミー先輩。

本人の口ぶりでは予選は抑えていたみたいだったけど、決勝一本目で度肝を抜く跳躍を披露。二位との差がかなりあるスーパージャンプを決めてきた。さすがは、去年の県大会覇者。

「先輩…凄いです。っていうか、凄すぎ」

「そ…お？もつと褒めて褒めて」

うわ、出たよ。先輩の子供モード…。

これで、去年の成績はフロックじゃなかった事が証明された。

キミー先輩の記録が出た瞬間、ライバルと思われる選手が口をあぐり開けて固まっていたのを思い出した。

「…確かにこれは、プレッシャーになるわね」

自分一人でブツブツ言いながら、冷静に状況を分析する。

「ん？何か言った？」

「い、いいええ、何でもないです」

独り言が聞こえていたようだ。

でも、一本目から決めてくるなんて、なかなか出来ませんよ。それも、先輩の強さなのかな？

「ふと思ったんですが、先輩のライバルって誰ですか？」

「何、唐突に」

「いや、ホントにふと思ったんですけどね…」

選手としては、気になるところですよ？

「どしてそないな事を思ったん？」

…何処の人ですか、あんた。

「予選を練習とか、気合いが入ってるようだったし…」

「うーん、いつも通りのつもりなんだけどなあ」

…あれがいつも通り？

「予選があるときは予選でいろんな事を試して、無いときは前半で試すのがあたい流」

へえ、そうだったんですか。

「その後は、記録に向けて全力跳躍」

「記録？ライバルじゃなくて？」

「うん。ライバルなんていないからね」

え？

「いや…一応いるのかな。大会には出てこないけど」

「この大会に？」

「それもそうだし、この後の全国にも出てこないよ」

それ、ライバルじゃないんじゃあ…。

「うんにゃ、あたいにはライバルであり、目標でもあるのよ」

謎めいてきましたよ？

「誰ですか」

聞いてもわからないとは思いますが、聞かずにはいられないですね、ここまで来たら。

「千夏も知ってる人だよ」

「そうなんですか」

「うん、かずみんだもの」

…は？

「大河一美。教わった人の名前を忘れたの？」

「そ、そんなことはありません！」

ただ、意外な名前が出てきたのでびっくりです。

「さつき、記録がどうたらって話をしたでしょ？」

「はい」

「その記録が目標であり、超えようとしてるって事は、ライバル視してる…と解釈できない？」

うーん、出来るような出来ないような…。

「それだけ、ハードルが高いのよ」

「ただけな記録なんですか」

「うんとね…」

非公式な記録なのでか、先輩は耳打ちで教えてくれた。

「そ、その記録ホントですか？」

「紛れもない事実。部員全員が証人よん」

確かにハードル高いけど、無茶苦茶高いですよ？

「今年中に記録を超えてやるんだ」

うはあーっ、キミー先輩燃えてます。

「二本目に入ります。藤宮選手、準備して下さい」

あ、コールがかかった。

「千夏、飛んできな。そして、かずみんを超えるんだーっ！」

キミー先輩にも出来てないのに、私なんか出来ませんってば…。

「いけーっ千夏！飛ぶんだ千夏っ！」

応援団化してますよ、あの人。

でも、少なからず気合いは入った。

あの人、の傍に行く為に、さらなる向こうへ…。

準備OK。

いざ、参る！

タッタツ…。

ん？何か、足の運びがギクシャクしてる？

まあ、いい。踏み切りさえ合えば、飛べる。

3 , 2 , 1 ……。

ダンッ！

踏み切った瞬間、足からグニヤリとした感触が伝わってきた。

「！」

そして、視界が何故か右へ傾いていく。

（ああ、倒れるんだ）

そんなことを思ったのは、砂場にたどり着く直前だった…。

「ちょっとけしかけ過ぎたかな？」

子供じみた応援に、ちよつと反省…。自分の悪いところが出ちやっとな。

でも、千夏には期待している。

彼女には素質がある。

教えたことは、ちゃんと自分のものになっているし、何より練習熱心。ましてや、『あの』かずみんが直接教えたんだ。悪くなりようがない。

「かずみん…」

永遠の目標であり、ライバル（一方的に）。

あんたがいたから、あたいもここまで頑張れてるんだよ。

見学会で見たあんたの記録を抜くことが、最大の恩返しだあたいは思ってるんだ。

…お、千夏がスタンバってる。

いつも通りで大丈夫だよ。

そう心の中で祈る。

スタートを切った。

ん？心なしか、ステップがバラついてるか？

まさか、力んでる？

まずい、あの運びでは、踏み切りでミスる！

その瞬間を、あたいは目撃してしまった…。

10（後書き）

幅跳び決勝シーンです

とうとう事故が発生してしまいました

こんな事故が本当に起こるのか？というツッコミはなしの方向でw

次回は、このシーンを一美視点で書きます

「二本目スタートします」

何とか、ここまで無事に飛んでいるわね。

ホッと胸をなで下ろす。

直前だったけど、教えたのが功を奏してるかな。

正直、決勝は残れないかなあとは思ってたけど、残っちゃうとはね。

「あの子、頑張ってるね」

何気なく、春菜が話しかけてきた。

「うん」

「いつちゃんが教えたんやから、当然や」

何で当然なの、と心の中で菜々美にツツコミを入れる。

元同級生は、出番だからとトラックへ戻っていった。

三人には、良いようにからかわれてしまった。

その代償として、千夏ちゃんを怒らせてしまったようだ（泣）。

真相はわからないが、告白された相手にそっぽを向かれるなんて、予想もしていませんでしたよ。

そして、陸上部の先輩と思わしき人と楽しそうに喋ってるようだし、私のことが好きなんじゃないの？

「なぐに、一人百面相をしてるんだか」

「はっ！ま、まさか今の気持ち、顔に出た？」

「嫉妬や嫉妬。さっきの人と楽しそうに喋ってたもんなあ」

「部活の先輩だから、話すこともあるでしょう。ましてや、同じ種目だし。」

「なぐんか苛ついてる感じだったなあ、その光景を見ていたいちみは」

マジっすか？

「前の椅子の縁をガッチリ握りしめていたから、手形がクツキリと

…」

「ついてないわっ！」

スパーンッ！

春菜に久々のツッコミをお見舞いする。

「あいた〜っ！ノリ悪いなあ、いちみは」

無視しない分、ありがたく思いなさい。

そう…そうよね。

先輩からのアドバイスを受けている…んだよね。

でも…この心の奥底に渦巻いているもやもやは何？

なんか、イヤな子になった気分…。

やっぱり、二人に対して嫉妬してるの？わたし。

「あゝあ、確定だね、これは」

「いい加減認めなよ、いつちゃん。自分の気持ち」

そうだね。

たぶん、私は千夏ちゃんのことを好きになってる。

けど、此処で認めたらなんか負けた気分になりそうなので、敢えて言わない。二人にいじられるのがオチだから。

「あ、そろそろ動くよ」

レーンに目を向けると、千夏ちゃんがスタンバイしていた。

”無理しなくて良いからね”

そう、心の中で祈っていた。

先ほどから、恋愛感情とは別の言いしれぬ予感を感じている。

——何かイヤな予感がする。

こんな感じは、自分を含めて今までのスポーツでは感じたことがなかった。だから、余計に不安になる。

（事故が起これなければいいんだけど…）

スタートした。

…ん？

何かおかしい動きだ。

力みすぎてる？

足の運びがさっきと違う。

踏み切り失敗するかも。

それだけなら良いんだが…。

いよいよジャンプ！

「！」

身体が右へ擦れる。

踏み切り失敗した上に、足を捻った？

ズザザーッ！

千夏ちゃんの身体が砂場の右方向へ投げ出された。

「まずい！」

「きゃあああっ！」

突然の出来事に、春菜も菜々美も声を上げる。
場内が騒然となる。

千夏ちゃんが右足首を押さえてる。

やっぱ、踏み切りで足を捻ったんだ…。

「千夏ーっ！」

先輩らしき人が千夏ちゃんの元へ駆け寄る。

一番早くたどり着いて、様態を見ている。

「担架ーっ！早く持ってこーいっ！」

「救護班はまだかーっ！」

「今呼びにいつてまーす！」

「何をやっているんだ！早くしろ！」

怒号が飛び交うグラウンド。

…早くしてよ。

…千夏ちゃんがあんなに痛がつてるじゃない。

…可哀想だと思わないの？
…もう、待てない！

気がついたら、観客席の手すりを飛び越えていた。

「い、いちみ！？」

「い、いつちゃん！？」

約三メートル下のグラウンドへ着地。

一目散に千夏ちゃんの元へ駆ける。

「よく、ここを飛び降りたなあ」

「感心してへんで、階段で先回りや。ウチが救護室見つけてくるから、ハルは道を作ってあげて」

「あいよ。そっちは菜々にまかせた！」

「千夏ちゃん！大丈夫？」

「おろ、かずみん」

のんきに挨拶してる場合じゃないでしょう、先輩。

「足、触らせてもらうね」

そう言いながらシューズを取り、靴下も取ろうとするが…

「い、痛ッ！ん~~~~っ！」

少し触れただけでかなり痛がる。

まずいよ！これ。早く処置しないとヤバイよ。

「腫れ始めている？」

「そんな感じですね。担架はっ！？」

「まだ来てません」

もおっつ、遅すぎるっ！

「いちみ！取りあえず通路は確保したぞ」

あ、春菜。流石手際がいい。

「救護室は菜々が探してる。取りあえずは運ぶか？」
そっね、その方が早いかな。

そう思うが否や、私は千夏ちゃんを抱え上げた。
しかも、お姫様だつこで。

「もう少しの辛抱だからね」

そう声をかけたが、痛みで余裕がないか。

「いちみ、こつち！」

春菜の声を受けて、スタンドの下の通路へ移動する。

「い、痛い…痛いよあ…」

千夏ちゃんの悲痛な声が、私の心に突き刺さる。

（待ってて、すぐにラクにしてあげるから）

「あ、いっちゃん！こつちや」

程なくして、菜々美の姿を見つける。

「救護室は？」

「ここや」

救護室の張り紙がされているブースを目にする。

「ドアオープン」

前を先導していた春菜が、ドアを開けてくれた。

「ぶつけないように気をつけて…っ」と

「どうしたの…って、さっきから騒いでたのはその子のせいなの？」

なんと、そこには自分たちの学校の保健医である瑞浪知香先生が座っていた。

「ちかばー先生！？」

「どうしてここに…」

「お仕事で頼まれてここにいるのよ。で、どうしたの？」

女医は苦笑していた。

「あ、はい。足を捻ったらしくて…」

「担架がなかなかこないの、担いできました」

「そう…さっき担架が行ったはずだけど、行き違いになっちゃったかな」

そう喋りながらも、すでに千夏ちゃんの足を診始めている。やっぱり頼りになります、瑞浪先生。

「ちょーつと触るね。この辺は？」

「だいじょ…痛っ！」

痛みで顔を歪める彼女。

出来ることなら、代わってあげたい…。

「捻挫だけだとは思うけど…痛がり方が尋常じゃないわね」

「骨折の可能性は？」

「ないと思いたいわね。見た目でも、変な方向に足が曲がってないし」

それを聞いて、私はほっとする。

「とりあえず冷やさないとね」

そう言い、手近な袋から氷嚢を取り出し、氷を詰めて千夏ちゃんの足首にあてがう。

「冷たっ！」

「ちょーつと我慢してね」

しばらく氷で冷やした後、湿布を取り出し患部に貼り付け、そして、手際よく包帯を巻いていく。

「応急処置はこれでよし、と」

「さすがちかぼー先生」

「さすがやね」

「あのね、一応これでご飯食べてるんだからね
ですよ。いつもお世話になってるし。」

「一応病院に行った方がいいかもね。骨折はないと言ったけど、私は医者じゃないし、専門機関で判断してもらった方がいいね」

「やっぱそうなりますか。」

「痛がり方が気になったのでね。骨はレントゲンじゃないとわからないしね」

「そこへ…」

「千夏っっ！」

先ほどの先輩が飛び込んできた。

「はい、救護室ではお静かに」

女医がやんわりと嗜めた。

「あい、すいません…あ、かずみん」

ああ、楢川先輩でしたか。

「んもおゝっ、あたいのことはキミーでいいっていつも言ってるでしょう」

一応部外者なんで、遠慮させてもらってます、毎回。

「で、どうです？千夏は」

「捻挫だけだとは思うけどね」

そう言って、女医は自分の見立てを先輩に説明する。

「そっかぁ…病院どうしよう」

それより先輩、競技は？

「いま一時中断。もう少ししたら再開するらしいから、その合間でここに来てみたのよ」

さらに、陸上部の顧問まで救護室に現れた。

「どうですか、藤宮の様子は」

「ああ、中嶋先生」

先輩にした説明を、もう一度顧問に説明する女医。

「そうですか…病院連れてった方がいいですね」

「それがいいと思います。幸い、病院に詳しい方がいますからね」
そう言って、瑞浪先生は私に目を向けた。

「お？大河いたのか。…なぜ彼女？」

「この子の母親が、総合病院の外科で看護師をしていますから」

ああ、瑞浪先生は知ってましたね、うちの母さんを。

「中嶋センセ、ウチらが連れていきましようか？」

「彩恩…等々力も、三人組が勢揃いか」

「先生は忙しいでしょ？代わりにについて行きますよ」

「それは有り難い申し出だが…どうやって？」

「ウチが車呼びますよって」

言っが早いか、携帯片手に菜々美が救護室の外へ出て行った。
「それじゃ、大河の母さんがいる病院へ？」

自然とそうなりますね。多少は融通が利きますし。

「申し訳ないが頼めるか？今日は副顧問が都合でいなくなてな。先生もここを離れられないんだ」

「先生、貸し一つ…」

スッパ〜ン！

「あいた〜っ！あにするだよ、いちみ」

先生に対して言う言葉じゃないよ？

「相変わらず、ツッコミが早いなあ」

あう、先生に苦笑されてしまった。

「莫迦なことしてないで、連れて行くわよ」

「へ〜い…」

「悪いけど頼むな。後で先生も伺うと言っておいてくれ
了解しました。」

「じゃ、肩を…あちや〜。背が違いすぎて無理だわ」

あらら、確かに…。

「仕方がないわね。千夏ちゃん、我慢してね」

私はそう言つて、先ほどみたいにお姫様だっこで彼女を持ち上げた。
た。

「うええええっ！？は、恥ずかしすぎますっ！」

だから、我慢してねと言っただけだな…。

「いちみ、見せつけてくれるなあ」

…これって、抱っこする方もかなり恥ずかしいのでは？

いま、初めて気がついた…。

「つ、つべこべ言つてないで行くわよ」

恥ずかしさを誤魔化すため、速やかに救護室を後にした。

「せ、先輩！お、降ろしてくださいっ！」

その足で歩けるの？

「あ、歩けます！」

じゃあ、降ろすから歩いてみて。

「はい…っっ！い、痛っ！」

ほらあ、無茶をしないの。

「抱っこの恥ずかしさよりはマシです」

そんなことしたら、悪化しちゃうってば。

「大丈夫です」

パンツ！

「莫迦なこと言わないで」

気がついたら、私は千夏ちゃんを叩いていた。

「怪我の初期の段階でそんな無茶したら、治るものも治らなくなっちゃうわよ」

「……………」

「恥ずかしいのもわからなくはないけど、変な見栄は張らないで欲しいわ」

「す、すみません……」

「こっちも意外と恥ずかしいから、おあいこよ」

そう言い、もう一度抱き上げる。

「いっちゃん、こっちゃん」

遠くから菜々美の声が聞こえてきた。

「あれ、タクシーじゃないの？」

春菜が素朴な疑問を投げかけた。

「家の車の方が早いかと思てな、こっちにさせてもろたんよ」

目の前には…これはいわゆるワンボックスカー？

「この方が乗り降りしやすいやろ？」

そう言いながら、テールゲートを開けてくれた。これなら、抱えたまま乗り降りできるね。

「よいしょと」

ようやく、座席に彼女を降ろす。

「…あ、ありがとうございます」

素直は良いこと♪

「大河様、総合病院でよろしいでしょうか？」

「ええ、お願いします」

「承りました。お嬢様も等々力様もお乗りください」

「よろしゅうな。東雲^{しのめ}はん」

「頼みます」

私らが乗り込むと同時に、車は急発進…じゃないけどスムーズに走り出した。

11（後書き）

前回の事故の部分を一美視点から

結構大胆な行動に出ます

自重しろって言われてたはずだよなw

恋する乙女の行動力は凄い、ということだ（え

「またあんなの…今度は何やったの？一美」

娘の顔を見て、第一声がそれですか…

確かに怪我をすると大概、総合病院のお世話になるわけで。身内がいるつても、考えものねえ。

「今日は私じゃないわよ」

そう言つて、千夏ちゃんに視線を向ける。彼女は今、患者搬送用のキャリーに乗せられている。

「あら、この前の…藤宮さんだったかしら」

「そう。この子が足を挫いちゃったみたいで、連れてきたのよ」

「そう、わかったわ。今日、外科の先生いたかしら…ちよっと待ってね」

そう言い残して、パタパタと走っていった。

「大河先輩のお母様…でしたよね」

うん、そうだけど…どう？痛みは

「まだ痛いですが、少しはラクになりました」

じゃ、救急外来の手続きしちゃうか。

「ああ、それはウチがやってくるよ。ハル、つきおうて」

「ほいほい」

助かるなあ、二人とも。

いつも私の時にもやってくれてるみたいだから、要領がわかってるみたいだね。

「一美。おまたせ」

あら、お早いお帰りで。

「手続きは…あの二人がしてるのね。じゃあ、あそこの三番の診察室にお連れして。急患だからって、ほかの患者さんには話をしてあるから大丈夫よ」

はい…あ、そうだ、最初の痛み方が尋常じゃなかったって、瑞

浪先生が言つてたけど。

「知香ちゃんが…わかったわ。先生に伝えておくわ」

小一時間後…。

私たちは、何故か入院病棟の個室の一つに集められていた。

ここつて、この前私が一晩入院した部屋じゃないの。母さんの策略ね。

コンコン。

程なくして、ドアがノックされた。

「どうぞ」

菜々美が反応した。その声に合わせて、ドアが開いた。

「お待たせね、三人とも」

そう言つて、母さんと松葉杖姿の千夏ちゃん、そして中嶋先生も姿を現した。

「先生！こつちに来て大丈夫ですか？」

「ああ、今お昼の時間だから抜け出せてこれたんだ」

もう、そんな時間なんですか。

「一通り、先生には私から説明しておいたわ」

で、どうなの？彼女は。

「うん、ただの捻挫。骨もレントゲンで見ても、異常なし。ただ捻り方が悪かったみたいで、関節部分に余計なストレスが掛かったのが、異常な痛みがり方の原因ね」

そう…安心したあ。

「とりあえず、痛み止めを打って湿布と包帯を巻き直し。二、三日は不自由するけど、腫れが引いたらあとはテーピングでも大丈夫。

一週間ぐらいはあまり足首を動かさない方がいいわね」

骨とかは大丈夫なの？

「さっきも言つたけど、レントゲンで確認してるから。内出血などの症状もないから、負担かけなければ早く治るわよ」

とりあえずは重傷じゃなくて良かった。

「でも、重傷の一步手前なのは確かね。今回は運が良かった方よ？」
そうなんだあ…。

「あ、あの…色々ありがとうございました」

千夏ちゃんが、恐る恐るお礼の言葉を述べてきた。

「いいのよ、これが仕事だしね。今は痛み止めが効いてるけど、無理しちゃ駄目よ？」

「は、はい…」

「いやあ、大事に至らなくて良かったよ。先生安心したぞ、藤宮」
顧問もやつと安心したようで、安堵の表情を浮かべている。

「よかったなあ、千夏ちゃん」

「やった瞬間はどうなるかと思ったぞ？」

菜々美と春菜も、安心したようだ。

「さて、私は仕事に戻るけど、許可は取ってあるからここでゆっくりしててもいいわよ」

やっぱり母さんですか、この部屋を用意したのは。

「三人とも、色々世話になったな。先生は戻らないといけないから、先に失礼するぞ。藤宮、そのまま今日は自宅へ帰ってもいいぞ。荷物は他の一年に届けさせるから心配するな」

だって。良かったね。

「本音を言えば、会場に戻りたいのですが…この足では無理ですね」
行けなくはないけど、治す方が先だもんね。

母と顧問が居なくなり、私達四人だけが病室に残った。

「あつ、そやそや。もう一度受付に来てくださって言われてたのを忘れてたわ」

「えっ？そんなことわれ…」

ドゲシツ！

な、何か、菜々美の肘鉄が春菜のお腹に入ったように見えたんですか…。

「い・わ・れ・て・た・や・ろ？」

「……そうだったような無いような…」

「だからウチら、も一度行ってくるな」

はいはい、行つてらっしゃい。

「ちよう、時間掛かるかも」

部屋を出る間際に、そんな台詞を残して出て行つた菜々美であつた。なんつー意味深な…。

二人が取り残された病室。

何か、びみよくな空気が漂い始めた。

「とりあえず、座つたら？ 松葉杖じゃ、疲れるでしょ」

変な空気を払拭するために、私は千夏ちゃんにベッドに腰掛けるよう勧めた。

「あ、は、はい」

それに習つて、私も隣に座る。

…隣？

あれ？

何で自然と座つてるのかな？

傍には、丸イスもあるのに。

自分の中で葛藤が始まつた。

「…先輩？」

言われてハツとなつた。

…落ち着け、私。

葛藤を見抜かれてはいけない。

「…足、大丈夫？」

何という質問をしてるんだ、私！

大丈夫なわけじゃないじゃないっ！

「痛みはありませんね、痛み止めのおかげで。包帯のおかげで、歩きにくいですが」

…ふう、とりあえずは普通に会話が始まつた。

「何とか初期対応が間に合つたかな」

「はい…、あの時はすいませんでした。我が儘言つて」

「わかってくれればいいのよ。こっちこそ、叩いちゃってごめんね？」

「いいえ、私が悪いんですし…」

よし、普通に会話が出来る。

「それにしても、転んだときはビックリしたよ」

「何だか力んでいたみたいで…こんな怪我なんて生まれて初めてです。丈夫が取り柄だったのに…」

「そうなんだ…しかし、何で力んでたの？」

…ボンツ！

そんな音が聞こえるくらいに、彼女の表情が一瞬で変わった。

「…キミ…先輩の応援に応えなきゃ、つてのもあるんですが…」
うんうん。

「……………」

え、今何て言った？

「…大河先輩に良いとこ見せたくて…」

小声でようやく聞こえる位の音量で、答えてくれた。

私？

私が見てたから？

「聞きました。去年の大河先輩とキミ…先輩のやり取り」

「どんな？」

「体験入部での…」

…ああ、そんなこともありましたねえ。言われるまで、すっかり忘れてましたわ。

「そして、大河先輩のお友達に嫉妬して…」

あ、もしかして、目が合ったときにそっぽ向かれたやつ？

「本当に怒ってたんだ…」

「え？」

「いやいや、こっちの話」

うきやあ、どどどどうしよう。

まだ怒ってるのかな？

「…折角告白したのに、見てくれないんじゃないかと、勝手に考えて…自己ベストを超えたら、私を見てくれるんじゃないかと思っ…」

そっかあ、それで力んでたんだ。

「返事もまだ聞いてないのに、一人で空回りして…格好悪いです」
あなたの気持ち、教えてもらいました。

ここまで言われたら、こちらもちゃんと答えないといけないね。
もう、気持ちは固まつてるけど。

「ごめんね。貴女が怪我したのは、ある意味私のせいかもね」

「そ、そんなこと！」

「言わせて。私の返事がないから不安だったんだよね？」

「…い、いえ…」

「正直、私の気持ちもあやふやだった。でも、貴女が目をそらした瞬間、言いやまれぬ気持ちになって、ようやく自分の気持ちに気がついたの」

うわ、いつの間にか、告白モードに入ってる？

千夏ちゃんも、真剣な目で私を見ている。

もう、後戻りは出来ないっ！

「真剣に貴女の気持ちに返事をします。私は、貴女のことが好きになりました」

告った瞬間、千夏ちゃんの目から涙が…。

「怪我をしたとき、もういてもたってもいられなかった。貴女の苦痛の表情を見る度に、変わってやりたい、貴女を泣かせたくないと、何度思ったことか…」

「そんなことを思ってたんですか…」

「うん。だから、貴女が無理をして歩こうとしたとき、つい手が…」
「……」

「捻挫で済んで、本当に良かった。心配だったんだから」

そっいつて、私は彼女の肩に手を回し抱き寄せた。

「せ、先輩?!」

「うわゝ、私って大胆!？」

でも、ほっと出来る。ここに千夏ちゃんがいることに。骨折でもしてたら、私号泣してたかも。

「先輩…」

「目をそらされたとき、めっさ落ち込んだのよ?」

「あれは…、すいません」

「いいのよ。おかげで自分の気持ちに気がつけたんだし」
もう一度、面と向かい合う。

「貴女のが好きです」

「…はいっ! 私も先輩のことが好きです」

そう言った千夏ちゃんが…目を閉じた!?

こここれ…もしかしくなくても、きききキスを求めているらしいやろう?」

一度、事故でキスはしてるけど…あれはやっぱリカウントには入らないよね。

そうなると、私も彼女もおそらくは初めての…キス。

しかも、女の子同士…。

ええいっ! 好きになったものは仕方ないんじゃないあ!

彼女を待たせては申し訳ない。

覚悟を決める、大河一美。

ゆっくりと、距離を縮める。

十センチ、五センチ、四センチ、三センチ…。

千夏ちゃんの吐息を感じる。

「せんぱい…」

そこで、その反応は反則です!
い、行きます。

二センチ、一センチ…ゼロ。
ちゅっ。

うわゝ、女の子の唇だゝ。

たつぷり、十秒間は行為に及んでいたようだ。

「…んぱあっ」

ようやく、離れることが出来た。

キスだけで、こんな心が暖まるなんて…。

「何か…ヤバいね」

「…何がですか？」

「…心なしか、ポオ…ッとしてるね。余韻があるとか？」

「離れるのが寂しかった。まだしていたい」

「…私もです。同じ気持ちで嬉しい」

「もう一度…する？」

「はい…」

お互いの気持ちを確認し、再度顔を接近させる。

「ただいま…っ！」

唇が再びゼロ距離になるその瞬間、突然病室のドアが開き、春菜が入ってきた。

「うきやああああっ！」

私達は瞬時に距離を取り、平然を装う。

「あ、お取り込み中やった？」

その後ろから、菜々美も顔を覗かせた。

「ななな、何のことかな？」

平静を装っていたつもりだったが、悲しいかなそこでどもるとは！

「…な？やっぱり」

「隠しても無駄だよ〜ん。ばっちり覗かせてもらったから〜」

な、ななななんですとお〜っ！

「でも、まだまだやな〜。ここは一つ、大人のディープなやつを…」

「うお〜、それはまたエロい…」

「折角両思いになれたんやしなあ」

「…こいつら、黙ってれば好き放題言っただけにいい〜っ！

「春菜あ、菜々美いい？近うよれ」

「…あ」

「ヤバ、地雷踏んだ？」

「地雷って何かしら？私はお二人にお話があるんですけど？」
逃げようとする二人に、私はジリジリと近づく。

「まずいつ！いちみが敬語調になったっ！？」

「どうまずいんの？」

「怒りがクライマックスモードに入ってるう……」

当然でしょう。私はかなりの辱めを受けたんですからねっ！

「ちょっつとその廊下でお話をしませんこと？」

「ははははははいいいいいいい」

「ウチもお？」

「当然ですわよ……あ、千夏さん？」

「あ、はい……って、千夏さん！？」

「少しお待ちになっててね？平和的に話ししてくるから、このお二方と」

「う、うそやっつ！」

「有り得ん有り得ん」

うるさいお二人ですわね。

ガッチリ！

二人の肩を掴み、部屋の外へ連れて行く。

「マジっすかあっつ！……」

あゝビックリした。

大河先輩って、本気で怒ると口調が敬語になるんだあ。
覚えておこ。

……とうとう、してしまった。先輩とキスを。
しかも、事故ではない真正正銘の……。

ようやく思いが伝わった。

怪我の功名って言葉があるけど、この場合も当てはまるのかな？
両想いのキスって、こんなにも暖かいんだなあ。

先輩がヤバイと言った意味がわかるような気がする。

柔らかかったなあ…。

な、何か変態っぽい思考になってるっ！？

でも、にやけ顔が止まらないい…。

先輩と両想い。嬉しいな。

「ごめんなさいね」お待たせしてしまっ…。

あ、先輩が戻ってきた…って、まだ敬語！？

「毎度のことですけども、本当に悪ふざけが過ぎますわ、あのお二人」

まだ怒り心頭…なのかしら。

「今度という今度は、さすがに許せるレヴェルではありませんわ」

「まあ、先輩…その辺りで」

「ま、千夏さんもお二人の肩を持ちますの？」

「そうじゃないですけど…」

…こんなキヤラは先輩じゃない。

先輩はもう少しフランクで、さりげない感じが良いんであって、
お嬢様キヤラは違う気がする。

どうしよう。

このままでは、先輩が先輩でなくなっちゃう…。

「先輩？」

「何かしら？」

先輩を呼んで、不意打ちでキスしてみる。

「んんっ！？」

白雪姫のキスじゃないけど、これで元に戻ってくれるなら…。

「んふ、ちなつ…ちゃん」

…私をちゃんと呼んでる。元に戻ったかな？

「んんっ、ぷはあっ」

唇を離して、様子を見してみる。

「…んもう、千夏ちゃんってば、ダ・イ・タ・ン」

「ああっ、すすすすいません！」

「いいのよ。両想いなんだしね」

…あ、口調が元に戻ってる。

少しは怒りがおさまったのでしょうか？

「何だか、らしくないところを見せちゃったわね」

「唯々ビツクリしまくりでした」

「これからは、貴女にも多少火の粉が掛かるかもしれないから、覚悟してね」

「ふええええっ!？」

私もいじられるのですか？

「そついつのを楽しんでる節があるからねえ、あの二人は」
か、覚悟しておきます。

「さて、帰りますか。家へ送るよ」

先輩が手を差し出してきた。その手を取り、立ち上がる。そこへ、松葉杖をさりげなく渡してくれる先輩。

「ありがとうございます」

「本当はまだここにいたいけど、さすがに…ねえ？」

ここは病院。さすがに長居は出来ない。しかも、あんなことをしてるなんてバレたら…。

「ま、そこまでを見越して部屋を用意したのかもしれないけどね、うちの母さんは」

確信犯ですか。

しかし、松葉杖は歩きにくい。

足首が使えないから、仕方がないけど。

「ごめんね。本当なら肩を貸してあげたいんだけど…」

「いえ、結局は同じですから、歩きにくいのは。それに先輩に迷惑が…」

「いいのよ、そんなことは。折角なんだから、『彼女』を頼ってくれると嬉しいかな？なんて」

そんなことを言うてから、先輩は顔を赤らめてうつむいた。

うわ、先輩かわいい！

何か、先輩の知らない部分がどんどん出てくる。

先輩から『彼女』なんて台詞が出てくるとは。

「立ち回りのに、先輩は『彼氏』だと思ってたんですけど」

「うーん、学年はいつこ上だけど、私も恋する乙女だから、って何言ってるのお、私」

ますます顔を赤らめて照れてしまいましたよ、先輩。

「じゃ、じゃあ取りあえず私の家まで連れて行ってください」

「お安いご用。かわいい彼女のためなら」

ボンッ！

今度は私が『彼女』に反応してしまった。

「お、お、お願いします…」

そう返すのが精一杯だった。

12（後書き）

少し間が開きましたorz

とうとう結ばれた二人…展開早い？w

色々と心の中を打ち明けてる二人です

しかし、周りの人間がおせっかいすぎるww

なお、キスシーンの一部を自主的判断から

カットしています（計20行くらい？）

読みたい人います？たいしたもんじゃないけど（え

そこに、千夏ちゃんの家はあった。

「へえ、私の家からも割と近いね」

それが、私の率直な感想だった。

「そうなんですか？」

「うん。私の家はもう少し学校寄りのところだから」

「そうなんですか…あ、今鍵を開けます」

カチャツ。

鍵の開く音がした後、引き戸を開ける彼女。

「先輩、ひとつ我が儘を言っても良いですか？」

「ほい、なんでしょか？」

「私を部屋まで連れて行ってくれないか？」

えええええええ！

何という大胆なお願い…。

「いいいのののの？わわわ私なんかで」

動揺しすぎだ、落ち着け私。

「先輩じゃなきゃ、こんなお願いしません」

う、嬉しいじゃないですか。

「言い間違えました。『彼女』だからお願いしてるんです」

か、彼女……。

嬉しすぎて、気を失っちゃいそう。

「では、失礼して……」

お姫様抱っこで、千夏ちゃんを抱える。

「ええっ！またですか！？」

…どうも、彼女はこの抱っこに抵抗があるようですね。

「そんなにいや？」

「い、いえ……そうじゃないんですけど、恥ずかしくて」

「大丈夫。今は私しか見てないよ」

「…は、はい…」

そうして、そのまま彼女の部屋へ運び込んだ。
ちよつと階段がきつかったけど。

「到着」

そう言つて部屋に入り、ベッドに彼女を降ろす。

「ありがとうございます」

降ろして手をほどき離れようとしたら、私の首に彼女の手が回り、
引き寄せられた。

「きゃっ！」

自然と、彼女と密着する形となった。

「あわわわわ…」

「すいません。こんな大胆な私で…」

そ、そんなことありません。むしろ大歓迎？

「今、この家は私達二人つきりです」

そんな感じだったわね。ご両親は不在みたいだったし。

「兄弟姉妹はいないの？」

「はい。一人っ子です」

本当に二人つきりなんだ、今。

ということは、このシチュが意味するところは…。

「せんぱい…」

またまた、目を閉じられましたよ！？

誘われてるんだ。

どうも、リードされっぱなしなんですが。

ま、いいでしょう。私もそれを望んでるみたいだし。
ちゅっ。

今までで一番長いキスだったように思える。

「千夏ちゃん」

「は、はい」

「あまりキスばっかしていると、自分が抑えられなくなりそう」

そう、キスの先…恋人同士なら必然的に求めるもの。

「それは…わたしもです」

「え…？」

「私はこの先も求めています。夢が覚めないうちに」

夢じゃないんだけなあ。

「先輩と繋がるのが出来たらこんなに嬉しいことはないですでも…」。

「貴女は足を怪我してるのよ？弱みにつけ込むみたいで…」

「この怪我のおかげで、両想いになれたんです。足首に負担が掛からなければ平気です」

「そうは言うけどねえ…」

捻挫が悪化しないか気が気でない。

「先輩が本当に私のことが好きなら、私を、私のすべてを先輩のモノにしてください」

ズキューン…。

こんなに大胆でしたか？貴女は。

完全にリードされっぱなし。

やっぱ、私は『彼氏』じゃなくて『彼女』なのかな。

ここまで言われたら、行くしかないじゃないですか。

「わかったわ。後悔はしない？」

「先輩となら後悔しません」

「じゃ、じゃあいくわよ」

「そろそろ大会が終わる頃ね」

ふと、部屋にあった時計を見て、そうつぶやいた。

「何をしてるんでしょうね、私達」

「部屋でいちゃいちゃしている恋人同士？」

自分から言って可笑しくなってしまった。

「今日は色んなことがありました」
「そうね…」

大会を見に行つて、貴女が怪我をして、病院へ連れて行つて、それから…。

「何か、今になってドツと疲れが出てきたかも」

「することしましたからねえ」

彼女も、思い出して苦笑する。

「シャワー浴びます？少しはすっきりするかもです」

「そうね…お借りしようかな。貴女も浴びるでしょ？」

「私は…この足ですし」

足下に目をやってうなだれる彼女。

「大丈夫。ビニール袋で保護すれば平気。なんだったら、後で包帯まき直してあげるよ」

「そうですか」

「時間をもつたいないから、一緒に入っちゃおうか？」

「えええええっ！」

「まともに立ちにくいから、大変でしょ？手伝ってあげる」

「そそそそんな、恥ずかしい」

もう、すべてを見せ合つた仲じゃない。遠慮しないの。

「そついうときは彼氏ポジションですね…」

「うだうだ言わないの。お風呂場はどこ？」

小一時間後。

私は普段着、先輩は着てきた私服に戻つた。

さすがに、これ以上長居は無理つてもの。

「そろそろ帰ろうかしらね。結構長居しちゃつたし」

「引き留めちゃったみたいですね」

「いいのよ」。気にしない」

そこに…。

ピンポン。

玄関のチャイムが鳴った。

「誰だろう」

「私が出てあげる。その足じゃ移動も大変でしょ」
「ありがとうございます。」

.....

程なくして、ドタドタと階段を上がってくる音が…二人分？

「千夏っ！お見舞いがてら、荷物持ってきたよ」

扉が勢いよく開いたその先には…。

き、キミー先輩！？

「顧問からある程度は聞いたけど、大変だったねえ」

「まあ、はい」

「かずみんも、千夏に付いててくれてありがとう」

「いえ、暇でしたから」

そういえば、陸上部で私の家を知ってるの、キミー先輩だけでしたね。以前遊びに来たことがありましたっけ。

「そうよ。一年はみんな知らないって言うじゃん？だから、あたいが代わりに持ってきてやったんよ。感謝しなさい」

強引に奪ってきたようなイメージが浮かび上がるんですが…。

「何か言った？」

「いえいえ、何も。」

「それにしても、捻挫で済んで良かったね。今年の全国はフィになっちゃったけど」

仕方がないですね。自分が悪いわけですし。

「でも、来年はいけると思うよ、素質あるし」

大河先輩…。

「かずみんのお墨付きなら大丈夫だ。今年はゆっくり足を治しな。全国は私が制してくるから」

捻挫ですから、一月もあれば治りますよ。

「でも、また力んで飛んだら同じことの繰り返しになっちゃうよ？」

今年いっぱい基礎体力作りに重点を置くこと」

キミー先輩にそこまで言われたら、仕方ないですね。おとなしく従います。

「かずみんは、千夏が暴走しないように適度に監視してね。これは、あたいからの依頼」

「コーチングとは別に？」

「別じゃなくてもいいよ。部に顔を出したときに見てくれたらそれで良いよ」

「ま、受けておきましょう」

「なんか、二人の間で交渉がまとまってる！？」

「それよりキミー先輩、今日の結果は？」

先輩がここにいるってことは、大会が終わったんですね。

「結果なんて知れてるじゃん。あたいの勝ちで決まってるんだからやっぱり。そうだとは思ってたんですが……」

「目標は、あくまでかずみんの記録抜き！それ以外に興味はない」

「わ、私の？」

「去年のあんたの記録が、あたいの目標なんよ」

「……ああ、千夏ちゃんから聞きました。どうぞ抜いてください。抜けるモノなら」

「うわー、キミー先輩にふっかけてるよー」

「言われなくてもやってやるわよ。抜いた暁には、もう一度勝負してもらおうわよ」

「そんな約束してましたねえ、……まずいなあ」

「そんなやり取りがあつたんですか」

「キミー先輩が燃えるわけだ」

「んじゃ、千夏の元気な姿も見られたし、帰るとするか」

「そうだ、私も帰るんだった」

「じゃ、途中まで一緒に帰る？」

「それは、遠慮しておきます」

……先輩が空気読める人で良かった。

「じゃ、千夏ちゃん。お大事にね」

「ゆつくり休みなよ」

二人の先輩は帰っていった。

明日は学校…行けるかなあ。あ、お母さんに送ってもらおうかな。
歩くにはちょっと辛い距離だしなあ…。

13（後書き）

ようやく、こちらも新年1発目をうp出来ました
お待ちになっていた方、すいませんm（――）m
やっぱり、例によって少しカットしてます（お

次回分から、新展開になります

といっても、そう大きくは変わらないかも？

ただ、菜々美の弓道部を書きたくなったので

その方向に行くだけです 新カップルは出るのか？

そんなのわかるわけうわなにするはなせやめ

14 (前書き)

ちよびつと新展開です？

月曜日。

朝も早い時間に、私は校門の傍らにいた。

時々、朝練をやっている部活の生徒がこちらを見ながら、首をかしげてランニングで通過していく。

登校する生徒もまばらな時間に、校門で小一時間立ってれば、それは怪訝な顔をするよねえ。

なぜこんな事をしてるか…。

まあ、ぶっちゃけ千夏ちゃんが無事登校してくるか気になったからなんだけど。

朝慌てて起きて、学校に向かったのはいいけど、途中で家に直接行けば良かったかな？なんて思ったり、それは家の人にご迷惑だとも思っただけでやめてみたり、ならば校門で待っていれば、行き違いはないだろう…などと考えた結果、今に至るわけです。

…こうやって待ってるのも、悪くないかな。

時々、三人で街に行くときの待ち合わせで、春菜が遅刻して待たされるのは違うし。

考えてみたら、付き合いだした恋人同士がよくやるシチュエーションじゃない、これ。

あと、途中で待ち合わせて一緒に登校とか…。

私ってこんなキャラだっけ？

「うん、そうかもしれへんね」

…え？

「おはようさん。こんな時間にいつちゃんに会うなんて、ちょうビツクリや」

「ああ、おはよ」

菜々美がいつの間にか隣にいた。気配を感じさせないとは…。

「ちやうちやう。いつちゃんが考え事をしててウチに気いつかへん

「かつただけだよ」

「そうなの？しかも、私の思考につつこんでるし」

「前にも言ったと思うけど、いっちゃん時々独り言だだ漏れしてるえ」

「ええっ！またやってしまったのか…」

「それよりも、こんな時間に何してるん？」

「…千夏ちゃんが無事登校してくるか見届けたいのよ。菜々美こそ早いじゃない」

「ウチは弓道場の掃除当番や」

「ふゝん、そんなのあるんだ。」

「それよりも、今日こそは部活に来てくれへん？土曜日は色々あつてうやむやになってもうたし」
「そうでした。」

出かけようとした矢先に、夜勤から帰ってきた母さんに止められた上に、買い物に付き合えゝって拉致られたおかげで、行けなくなつちやつたのでした。

「仕方ないわね。放課後顔を出すわ」

「それでこそいっちゃんや」

「やつぱり…いちみ珍しく早いじゃない」

そんな会話をしていると、春菜が自転車で颯爽と姿を現した。

「おはよ」

「おはよゝさん、ハル」

「いつもの時間にいつもの場所にいないから、まさかとは思ってたけど…一瞬遅刻か？と思ったじゃない」

「そんなドジはしないわよ。春菜じゃあるまいし」

「…なんでそこで苛めるんですか」

「ハルの遅刻は、過去に何回あつたかな…両手で足りひんよなあ」

「全方位攻撃ですかいっ！」

そんな三人でのいつものやり取りをしていると、校門前に一台の車が停まった。

その車のドアから、松葉杖がにきつと出てきて、降りてきたのは…千夏ちゃんだった。

「うん…何とか大丈夫。帰りもお願い。学校終わったら電話入れる」
お母さんだろうか…二言三言会話して、車は発進していった。

「ふう…」

意を決した表情…そんなところへ私は声をかけた。

「おはよう、千夏ちゃん」

私の声を聞いて振り返り、ビックリしていた。

「あっ！…お、おはようございます、先輩。他の皆さんも」

「うん、おはよう」

「おはようさん。無事に送ってもらえたんやな」

「あ、はい。仕事へ行くついでだって言われて、早い時間になってしまいました」

「はは…それはまあ、仕方がないかな」

でも、無事に登校してくれて良かった。まずは一安心。

「教室まで送ろうか？」

片方とはいえ、松葉杖では大変でしょう。

「お気持ちは嬉しいのですが、そうそう甘えてばかりも悪いので…
それに目立つちゃうと恥ずかしいし」

え〜〜〜〜つ。折角恋人同士なのに…。

「それに、いつも先輩がそばにいる訳じゃないし、頑張って一人で歩いてみます」

そっか…千夏ちゃんは強い子だね。

「あと、職員室に用事があるので、お先に失礼します」

そう言って、ぴよこぴよこと杖について学校内へと消えていった。

「やゝい、振られた」

グサツ！

春菜からの攻撃に、心が傷つく。

「いっちゃん？優しいのも大事やけど、たまには温かい目で見守るのも大事やで」

菜々美さんのごもつともな意見、ありがとうございます。

「いいもん。悔しくないもん…」

軽くブルーになる私。

「珍しくいつちゃんが駄々っ子や」

放課後。

約束通り、弓道部へ顔を出す為教室を出る。

菜々美は支度があるというので、一足先に弓道場へ向かっている。昇降口まで降りてきたら、下駄箱に佇む人物を発見。千夏ちゃんだった。

「どうしたの？こんなところで」

「…あ、先輩」

ようやく私に気づいたのか、顔をこちらに向けてくる。

「お迎え待ってるの？」

「そうなんですけど…仕事時間が延びてるらしくて、遅くなるって電話が来たんです。それでどうしようかと考えてまして…」

あらら。それはお気の毒に。その足じゃあ帰るの大変だもんねえ。

「どうしようかな…」

そこで、私の中で一つの考えが浮かんだ。

「ねえ、暇なら私に付き合わない？」

「…はい？」

「私、今から弓道部へ行くのよ。見学してみない？」

「弓道部…ですか？」

「うん。菜々美…私たちのグループの一番ちっこい子ね。その子が所属していて、コーチングを頼まれてるのよ」

「そうなんですか」

「ただ待ってるよりはいいかな」と思うんだけどお、どう？」

「こんな足でお邪魔じゃないでしょうか」

「大丈夫よ。菜々美がうまくやってくれると思うし」

「いいのかなあ…」

「何より、私があなたと一緒に居たいから…なんて言ったら引くかなあ」

ボンッ！

変な音がしたなあ、と思って千夏ちゃんを見たら、顔を真っ赤にして俯いていた。

「私も…先輩と…一緒にいいです…」

小声ながらも、はっきりと気持ちを伝えてくれた。

「それじゃあ、行こうか」

私は、照れながら彼女の手を取り、弓道場へ向かった。

皆川学園弓道場。

私と先輩は、道場の入口の前に立っていた。

先輩が扉に手をかけた瞬間、それは起こった。

ドドドドドドドドドドドド…。

な、何？この地響き。

「ちっ、気づかれたか…」

え、何々？

「千夏ちゃん、ちょっと私から離れて。巻き込んだじゃうと悪いから」

「は、はあ」

そう言われて、先輩と距離を取る。

…何が起るんだろう？

何事もないように、先輩は扉を開けた。

ガラガラガラ…。

「待ってたわよ、大河一美！っ！！」

ひ、人が飛んできたっ！？

「フンッ！」

その人…らしきものが飛んできてるにも関わらず、冷静のまま、襟首を掴んだ…と思った瞬間、

「でやあ~~~~~っ！」

柔道よろしく、投げ飛ばしたっ!?

しかも、先輩制服のまま!

し、下着が…見えない。残念(マテ)。

ズダア~~~~ンっ!

相手?は、綺麗に投げ飛ばされていた。

「巴投げ、一本!」

菜々美さんだっけ?決まり技をアナウンスしてる。何でそこまで冷静でいられるんですか?

「部長抑えておいて、って言うておいたでしょう?」

「一瞬のスキを突かれたんや。いっちゃんに対するあの反応速度は、人間業やない思うで」

「毎回付き合わされる身にもなつてよ。ましてや、今回はゲストが居るのに…」

「ゲストお?…おろ、彼女さん、いらっしやうい」

某落語家風の挨拶に、コケそうになる。

「ど、どうも…」

「ちよう、ビックリしたやろ。堪忍なあ」

ビックリしまくりです。人が飛んでくるなんて予想もしませんってば。

「道場に入るときは、いつもこうなんですか?」

「まあ、いっちゃんときだけな。部長と勝負してるんよ」

「投げられたの、部長さんなんですかっ!?」

「そう。弓道部入部を賭けた勝負なんよ」

どんな勝負なんですか…

「…私が投げられなかったら、弓道部に入るという条件でね…今回は勝てると思ったのに…っ!」

復活したのか、部長という人が話に入ってきた。

「否応なしに勝負させられてるんだけどねえ」

先輩が苦笑してる。

「…ん?この子見ない顔だねえ。もしかして、入部希望者?初めま

して。弓道部々長の日比野皐ひつきのという者よ」

ええ？私勧誘されてる？

「…一年の藤宮千夏といえます。期待させて何ですが、陸上部に所属してます」

「あららん、それは残念」

「何で一緒に来たん？」

「迎えが遅れてて暇そうだったから、連れてきた。時間潰しに見学でもどう？って」

別に暇ではなかったんですが…。

「迎えて…あら？足を怪我してるのね」

「はい。捻っちゃいました…」

「それじゃあ立ってるのは大変ね。その子、椅子を用意してあげて」

「はいっ」

手近にいた部員が、部長さんの指示で椅子を用意してくれた。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

その椅子に腰掛ける。ようやく落ち着いた。

「あ、そうそう。藤宮さんって言ったっけ。携帯はマナーにしておいてね。射が乱れちゃうから」

あ、はい。了解です。

「それで、今日はコーチングしてくれるんだよね？大河一美」

「まあ、菜々美にも頼まれてましたので、そのつもりですが」

運動全般何でもOKとは聞いていたけど、さっきの投げといい、武道まで出来るんですね。やっぱ先輩は凄いわ。

「部員を手取り足取り教えてあげて。…もちろん、わ・た・し・も」
「」

カチン！

な、何この人！もしかして私の大河先輩を狙ってる？

「…丁重にお断りいたします。部長に関しては」

「んもおゝ、いけずう」

ゴゴゴゴゴゴ...

こんな所にライバルが居たなんて。
私の先輩を取らないでください。

「おお、向こうから嫉妬のオーラが伝わってくるえ」

「...連れてこない方が良かったかなあ」

「部長、部長。あんまりいっちゃんにちょっかい出すとあちらさんが暴れてまいますよ」

「何で？大河一美は私の物なのに」

「...何ですと？」

「なつた覚えはありません！」

先輩のこの発言で、怒りが少し収まる。

冷静になるんだ、藤宮千夏。

私は、すでに先輩と結ばれている間柄だ。

他の女がちよっかい出しても、先輩は靡かない。

大河先輩を信じるんだ、藤宮千夏。

「実はあ、いっちゃんとおちらさんは、既にラブラブなんですよ」

「.....」

あれ？固まったよ。

「...そんなこと...」

え、今度は部長さんが燃えてるう？

「そんなこと、お母さんが許しませんよっ!!」

私より先に爆発したっ！

「誰が私のお母さんか~~~~っ！」

スッパ~~~~ンッ！

大河先輩が、ハリセンで部長さんにツツコミを!?

「いったゝいっ！やだなあゝ、ちよつとしたジョークじゃないの」

「まぎわらしいジョークはやめてください」

どこからどこまでジョークなんだろう...

「とにかく、千夏ちゃん是我的『彼女』ですから、波風立てないで

ください。私が彼女に怒られる…」

あ、公言しちゃった。…恥ずかしいけど、嬉しい。
周りでも、どよめきの声が上がってます。

「いっちゃん、よく言った!」

「言っしかないでしょう。この状況じゃあ…」

「うんうん、ようやくあなたにもハニーが見つかったのね。お母さん嬉しいわ」

まだ引つ張りますか、そのネタ。

「よし、そのおめでたい出来事に、がつつり練習して県予選突破という花を添えるわよ!」

「お~~~~っ!」

な、何という団結力…ベクトルは変だが。

「普通に練習してください…」

あ、先輩が脱力してる。

14（後書き）

大変お待たせいたしましたm（――）m

新展開、弓道部編？ですw

何気に新キャラ登場してます（お

本当は途中で千夏視点に変わってるところで切る予定でしたが
先が続かなかったので、まとめてしまいました^^；
時間が無くてなかなか書けませんorz
さて、続きをどう書こうかな…

いろいろあったが、弓道部の練習が始まった。

タンッ！

パアン！

タンッ！

心地良ささえ感じる、的を射る音が道場に響く。

「あなたは少し早気があるわね。もう少し会で溜めを意識した方が
良いわ」

「はいっ、やってみます」

「あなたは…離れの瞬間に妻手が下がってるわ。そこを意識して」
「わかりました！」

「うん、さすがは大河一美。指示が的確だわさ」

確かに…細かいところまでよく見ている。

私の幅跳びの時もそうだった。他の人が気づかない細かな部分までアドバイスしてくれた。おかげで、ファウルがだいぶ減った気がする。

「あなたは、胴作りが不安定ね。菜々美、ちょっとお手本見せてあげて」

「ほいほい。足踏みでえ…こうやね」

弓道で基本となる射法八節（というらしい）。その最初の足踏みと胴作り…幅跳びで言うスタートの位置決めと歩数の確認かな？確かに、最初が決まらないと全てがうまくいかないことが多い。最初が肝心、というのはどの競技でも一緒みたい。

「いっちゃん。ウチにアドバイスは無いんの？」

「あんたは全国出てるでしょう」

「そやけど…やっぱ、見てほしいんよ」

「何か最近はしつこく食い下がるわね。何かあったの？」

「まあ、目の前でアレを見せられたらねえ…」

「何があつたんです？」

先輩達三人の会話が聞こえてきた。

「去年の全国一回戦で神奈川の代表と当たってね、一中差で負けたのよ。その落^{おち}*1の射があまりにも素晴らしくて……」

「ふ〜ん、そんなことが……」

「アレ見せられたら、ウチもまだまだやなあ〜、って思つてしもて……しかもハーフっぱい人なんよ」

「そんな人も出てるんだ」

「どこかで見たことあるな〜って最近まで考えてて、ふと思い出したんよ。いっちゃんに似てるなあって」

「そうそう、射の雰囲気が大河一美に似てるんだよね」

「というわけで、お手本の一射をお願いや〜」

「何でそういう流れに……」

「何か参考になるかも知れへんやん。ついでに、彼女さんにも格好ええとこ見せる良い機会やで」

「なんでそこまで……」

何か、先輩の格好いいところが見られる流れですよ。見たいオーラを先輩に発してみよう。

「じ〜……」

「……千夏ちゃんも見たいのね」

コクン。

「はあ〜〜っ、仕方ないわねえ……」

やったっ！どんな姿が見られるか、楽しみ〜。

「袴持ってきてないから、制服姿でやるのは気が引けるけど……仕方ないか。あ、誰か胸当て貸してくれる？あと？も^{ゆがけ}」

「誰か更衣室から予備を持ってきてあげて。あと、スピアの弓も」
「分かりました！」

先輩らしき部員が、更衣室へ消えて数分後、言われた物を持って現れた。

「あなた用に弓は常に準備してあるからね、大河一美」

「用意周到過ぎる…」

ブツブツ小言を言いながら、準備を始める先輩。

…確かに、制服で胸当ては違和感ありまくりですね。

「でも、足が見えてる分は胴作りの参考になるでしょ」

「見える部分も見えない部分も参考になるから、よう見ときいよ、みんな」

「はいっ！」

「あんまり見られるのは得意じゃないんだけどなあ…」

「さて…」と。制服だから最初を省略して、足踏みからでいいよね？」

「任せるわ、大河一美」

なあゝぜか、お手本を見せる羽目になってしまったこの流れ。

そつえば、今日の運勢最悪だった記憶が…。

「キラキラ…」

…何故か千夏ちゃんからも羨望の眼差しで見られてるんですけど。しかも擬音付きで。

ま、ちよつとした試合のつもりでやってみますか。

んでは、集中つと。

「おお？早速行射やうしやうに入ったで」

足踏み、そして胴作り。

「さすが切り替えが早い。凄い集中力よ」

ゆみがま
弓構えから打起し…呼吸に合わせてゆっくりと。

円相えんそうが崩れてない」

「理想的なバランスの打起しだわ」

「身長がある分、綺麗に決まるのよね」

呼吸を整えて…引分けひきわけ。ここから気合いが入る。

キリキリ…弓がしなり、弦が音を洩らす。

注目されているから、緊張しない訳がない。でも、弓道は自分の心との勝負。的を狙ってるとは言え、いかに中あて気を消せるかが鍵

となる。

そして…会。

離れの直前。心を落ち着けて…いざ！

「ゴクッ」

タッ！

手から矢が離れ、的へ一直線。

パァァン！

そして、最後の残心。ざんしん

ここまですが射法八節の一連の流れ。どの動作も気を抜いてはならない。

「綺麗な射…」

「行射の一切に無駄がありませんわ…」

「しかも、てきしん 的心ですわよ」

「どや、凄いやろ？」

あんたが凄いわけじゃないから、菜々美。

「久しぶりに引いて的心つてどんだけよ、大河一美」

「まあ、見えない努力をしてますから」

そういうことにさせてもらおう。

「……」

ふと、千夏ちゃんの方に目を向けると、何故か無言で固まっていた。

「あの…、千夏ちゃん？」

「……」

「おゝい、大丈夫かな？」

「…はっ！」

遠くの世界から帰還されたようです。

「どうしちゃったのかな」

「一連の動作に…見とれてしまいました」

はは…、嬉しいやら何やら。

「こんな素敵な射をしてるんだから、弓道部に入れば全国が狙える

のに…今からでも遅くはない。入部しなさい」

「いやだから、家の事情で入れないと何度…」

まだ諦めてないのか、この人は。

「あんたからも説得しなさい、彩恩菜々美」

「無理」

「即答っ!？」

「今日のコーチングだって何とか来てもらたのに、説得なんかしたら絶交されてまう」

悪いとは思ってるんですけどねえ。家の事情を考えると…ね。

「…私は諦めないわよ?」

いい加減諦めてくれると助かるんですが。

弓道部にお邪魔して約一時間。

大河先輩は、弓道部員にあれこれと指導している（特に一年生）。

中には、素人の私が見ても上達の早い子もいた。

足を怪我している私は、椅子に座ってその光景をずうっと眺めているしかなかった。

誰も私のことを気にかけていない。

練習してるのだから当然だけど。

先輩も指導に夢中で私を見ない。

これだったら、校門で待ってた方がよかったかな。

そんなマイナス感情に脳が支配されてるときに、突如携帯が振動を始めた。

周りに迷惑にならないように端末をポケットから取り出し、サイドボタンで画面を開く。

「…もしもし」

「あ、千夏?母さんよ。今仕事が終わったから、迎えに行くわ。待

たせてごめんね」

「わかった。時間はどれくらいかかるの？」

「そうねえ…十分くらいかしら」

「じゃ、校門で待つてる」

「了解」

プツン。

さて、そろそろ行かないと。

弓道場は昇降口から割と離れてるっぽかったから、急がないと…
と思ったのが拙かったのか、手にしようとした松葉杖を滑らせて落
としてしまった。…ワザと。

カラゝンッ！

その音で、道場にいた皆の視線がこっちに向いた。先輩も含めて。

「あ……」

「どうしたの？千夏ちゃん」

その先輩の台詞よりも早く、近くにいた部員が駆け寄り、杖を拾
ってくれた。

「大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫です。手が滑っただけ」

お礼を言いながら、杖を受け取る。

言えない。杖を落とした事に別の理由があるなんて…。

「すいません。練習の邪魔をしてしまって。迎えが来るので、失礼
しようかと…」

「ま、怪我人だし、杖に慣れてないみたいだから仕方ないわね。

大目に見るわ。退屈だったでしょう？」

「い、いえ…」

反射的に偽りの返事が口をついて出た。

この部長さんには、バレてる気がする。

「出入口を開けてあげて。あと、付き添うんでしょ？大河一美」

「ええ、そのつもりでしたけど。誘った人間ですし」

「じゃ、コーチングはここま…」

「いえ、付き添いは結構です」

「…え？」

驚いて固まる先輩。すいません、嘘をついて。

「リハビリの為に、一人で歩いてみますので」

朝と同じ理由で先輩をはねのける。…本当はついてきて欲しいのに、敢えて天の邪鬼になる私。

また嫉妬してるのかな、先輩に。

「では、失礼します」

そう言つて、私は弓道場を後にした。

千夏ちゃんは弓道場を出て行つた。一人で。

付き添おうと思つていたのだが、朝と同じ理由を言われたら、何も動けなかった。

優しさだけではダメ。時には突き放すことも必要だ。

朝も菜々美に言われた言葉。確かに一理ある。

私は千夏ちゃんに何もしてあげられないのだろうか…？

「行かないのかい？大河一美」

「…えっ？」

「付き添い。そのつもりだったのでしょ？」

「え、ええ…。でも、ああ言われたら…」

行くに行けないでしょう。朝のこともあるし…部長は知らないだろうけど。

「いっちゃん、行かへんの？もしかして、朝の事を気にしてるんか？」

菜々美が話に加わってきた。そりゃあ、気にしますってばさ。

「朝と今じゃ、状況が違つてるよ。彼女さんの心理的状况がな」

「…え、どういう事？」

「理由はともあれ、早く行つた行つた」

「コーチングは？」

「彼女が帰る時点で終わりだ、と考えていたしね。無問題だわさ」
わかりました。それじゃ、失礼させてもらいます。

「胸当てと？は置いてってね。あと弓も」

おおっと、そのまま退散するところだったよ。

「菜々美、パースッ！」

「うわつと。いきなり投げんといてえな。あ、弓は投げたらあかんよ」

「投げないよ。ここに置いておくから、あとよろしく！」
さうて、どこで追いつけるかな？

ようやつと行ったか…。

意外とニブやかなあ、いつちゃんは。

彼女さんが寂しがってたの、氣いつかへんかったんか？

「アンタも苦労してるのな、彩恩菜々美」

「まあ、いつちゃんやし…」

「でも、端から見ると単なる痴話喧嘩だよな？」

「それはどうかと…。いつちゃんも、もうちょい恋愛に関してお勉強してもらなあかなあ」

彼女さん、ツンデレ属性を持つてはるようやね。

それが吉と出るか、凶と出るか…。いつちゃん次第やで？

*1…団体戦で五人の最後に射を行う人

他の武道で言う大将のポジション

15（後書き）

お待たせいたしました

毎度ながら、遅筆でスンマセンm（――）m

前回の続きな感じですね

今回は、千夏と一美の視点がころころと変わります
最後は、モノローグな感じで初の菜々美視点までw

何だかなあ、また千夏やキモチかよ^^；

せっかく誘ってもらったのに、これじゃあねえ…
そら怒りますわなw

次回は、一美が千夏に追いつくあたりから…

もうちょっとだけつづくんじゃよくマテ

下駄箱付近にも、彼女の姿がない。

靴の有無を調べたいけど、学年が違う人の下駄箱の場所なんて知らないし。

全校生徒六百人強の中の一ヶ所なんて事前情報なしでわかるはずもない。

となれば、下駄箱は通過したと信じ、私も靴に履き替えて校門へ向かう。

昇降口を抜けて校門の方へ視線をやると、もうすぐ門へ到達する彼女の姿が見えた。

さらに、その向こうに見覚えのある車一台を視界に捉えた。…お迎えの車だ。

瞬間、全速力モードにチェンジ。後の事は考えず、周りの景色をはるか後方へ追いやった。

追いつく直前、私はありったけの出力で声を出し、彼女を呼び止めた。

その声に反応したのか、千夏ちゃんは振り向いた。まさに車に乗り込む直前だった。そして、もう一人いた隣の女性も同時に反応し

ていた。

「あら、どちら様？」

「はあ、はあ、はあ……や、やっと……追い……つい……たよ……はあ……」

「だ、大丈夫？かなり息が乱れてるけど」

「す、すいま……はあ……せん……全力……疾走……しちゃった……もので……ふう……」

や、やっと……息が……元通りになってきた。久々の全力は意外とくるわねえ。

「せ、先輩……」

「あら、もしかしてこの方が昨日言っていた人？」

「……うん」

昨日の事の顛末は知っているようですね。ならば、自己紹介しなくては。

「醜いところをお見せして申し訳ありません。私、二年の大河一美と言います。昨日は、微力ながら千夏ちゃんの手助けをさせてもらいました」

「そのようね。話は娘から聞きました。千夏の母の沙織と申します。昨日は、娘の為に色々して頂いたようで感謝してますわ」

「いえ、出来る事をしたまでです……」

「でもなかなか出来ないわよ、頭でわかっていても。それで、娘に用かしら？」

「あ、はい。少しお話でもしたいな、と」

「わ、わたしは特に……話なんかありませんけど」

そこで否定されてしまうと凹んでしまうのですが。

「ま、立ち話もなんだし、我が家へどうですか？」

え？それは願ったり叶ったりですが……いいのかなあ。

「ここで会ったのも何かの縁だし、昨日のお礼を兼ねて夕食に招待したいのだけれど……予定は大丈夫？」

「お母さんっ!？」

千夏ちゃんは予定外の事にかなり驚いてらっしゃいますね。っ
ていうか、私も心臓バクバクなんです。

「よ、よろしいのでしょうか？お邪魔しても…」

「大丈夫ですよ。一人二人増えても手間は変わりませんからね」

「ちよつと親に確認してみます」

携帯を取り出し、電話をする。母さんは今日昼からの勤務だから問題ないとして、父さんの残業が気になる。先週、千夏ちゃんのコーチで遅くなったときは、リビングの床に倒れててビックリさせられたからなあ。

『ほい、父さんだが…どうした？』

「あ、父さん。今日は残業どうなの？」

『ん、今日はかなり遅くなりそう。サーバのトラブルが一件片付かなくてな、様子を見ながら修正してるんだが…』

「MMOのほう？」

『うむ、今日配信したアップデーターが悪さしてるみたいで、サーバダウン寸前までいったのを何とか復旧させたんだけど、安定しなくて』

「じゃあ、晩ご飯は無理だね」

『そうだな。下手をすると帰りは母さんと同じになりそう。今日は昼からだつたな、母さんは』

「うん」

『何か…あつたのか？』

「ううん。友達に晩ご飯誘われちゃったから。帰りが早いとまずいな…って。この前迷惑かけたし」

『ああ、なら心配せず行ってこい。こっちは何とかするから』

「うん、わかった。お仕事がんばってね」

『ふお…っ、娘の応援で力がみなぎってきた…っ！』

「…莫迦」

聞こえないように呟き、電話を切る。父さんは嫌いじゃないんだけど、娘への愛情が時々暴走するから困るのよねえ。

「OKです。夕食のご招待をお受けします」

「よかったわあ、お誘いが無駄にならなくて。じゃ、車に乗って
ちよっだいな」

では、失礼して…その前に千夏ちゃんを乗せないと。

「持つわ」

松葉杖を持つととするが…。

「結構です」

そのまま器用に後部座席へ乗り込んでしまった。何か怒ってらっ
しゃる？

「さあ、行くわよ」

その声に反応して、私は彼女の反対側のドアから後部座席に乗り
込んだ。そのタイミングで車は発進した。

「じゃ、お茶はこちらへ置いておくわね。夕食が出来るまでくつろ
いでいてね」

「あ、おかまいなく」

藤宮家。

昨日に続いての訪問。

昨日との違いは、二人きりではないという事。

そして、移動中の車の中でのぎこちない雰囲気。

そんな空気を察したのか、運転手は一言も話さなかった。

で、今現在千夏ちゃんの部屋に通されている状態。

「成り行きとはいえ、二日続けてお邪魔するとはねえ」

そう言っって自分を繕ってみたけど、反応がない。

当の部屋の主は、自分の机に向かって座っっていてこちらをちらり
とも見てくれない。

「あのお、千夏ちゃん？」

「……」

返事もまともに返っってこない。私、何かしたのかなあ。軽い自己

嫌悪に陥る。

「…なんで」

え？

「何で追いかけてきたんですか？」

「やつと返事が…って、一言目から攻撃的なんですけど。」

「まあ、朝みたいに拒絶されたのが気になったんだけど…朝と雰囲気の違いが違ってたって、菜々美も言ってたしね」

「言われるがままに追ってきたんですか」

「そうなるのかな？正直よくわかってなかったんだけど」

「はあ~~~~~っ」

「そこまで言ったら、盛大に溜息をつかれてしまった。」

「噂には聞いてましたが、先輩って本当に鈍感ですね」

机の方から上半身だけ捻って、呆れ顔で睨まれる。

「な、何ですとっ！？後輩にまで言われる私って…」

「彩恩先輩に聞いてたとおりでした」

「って、菜々美かい！大元は。確かに、彼女には事あることにニブだのニブチンだの言われてショックを受けてるんだけど…。そんなに酷いのかなあ、私って。」

「わたしが道場で杖を落とした理由、わかりますか？」

え、滑らせて落とした…んじゃないの？

「やっぱり…わかってないんですね。わたしを道場に連れてきたのはどなたですか？」

それは…私だよね？

「その人は道場で何をしてましたか？」

「もちろん、弓道のコーチングをしてましたよ？頼まれていた事だったからね。」

「では、連れてこられたわたしは何をしてましたか？」

「それは、足を怪我してるから用意してもらった椅子に腰掛けて見学…あ。」

「私が何も相手をしてあげてなかったから、退屈で寂しかったんだ」

ね…」

それは怒るわなあ。誘っておいで何もしてあげてないってどんだけよ、私。

「今になってわかるなんて、酷いですよあ…」

「うわ、数時間前の自分をぶん殴りたい気分だわ。」

「なんか…ゴメン」

「寂しかったんですからっ！」

そんな台詞と同時に千夏ちゃんが私に飛びつき、そのままベッドへダイブする。勢い余って押し倒された格好になる。

「んっ！」

そして、唇を奪われた。

「わたしは先輩の何なんですか？」

「恋人…ですね。ごめんなさいいしません許してくださいい…」

何かいつも弄られる春菜の気分が少しわかったかも。

「許しません。彼女をほったらかしにした罰を受けてもらいます」
ば、罰って…一体どんなのかしら。

「い、今から、せ、先輩を、お、襲って、い、苛めます」

え…襲われちゃうんデスカ？後輩に苛められちゃうんデスカ？

「あ、あの…ですね？一応私にも、心の準備ってものが…」

「罰ですから、そんなものは要りません」

全否定ですかっ！？ち、千夏ちゃんが怖いですうっ！

「さ、さあ。覚悟はいいですか？」

ジリジリと、彼女の手が私の制服に近づいてくる。もう逃れられない。

「夕飯出来たわよ。降りてらっしゃい」

制服に手が掛かったその瞬間、下から私達を呼ぶ声が飛んできた。
「…残念です。襲えなくて」

私はここぞとばかりに安堵した。貞操の危機をかるうじて脱出で

きた。小母様には感謝です。

「許した訳ではありませんので」

そう言って、私から離れる。

「反省してますので、何とか許してはもらえませんか……」

そう私が言くと、何かを考えるように千夏ちゃんは押し黙ってしまった。

「……そうですね」

襲われる以外の代案なら、何とかなると思っんですが。

「では、今度の休みにデートしてください。そうすれば、考えを改めなくてもいいです」

なくもないって……微妙な条件ねえ。ま、襲われるよりはいいかも？

「そんなに、わたしに襲われるのがイヤなのですか？」

何か心がこもってないみたいでイヤなのよねえ。ああいうのは、互いが求め合わないと盛り上がらないし。一方通行な行為は個人的に嫌いなものよ。愛情を押し売りしてるみたいで。

「結局のところ、デートはして頂けるんでしょうか？」

「そ、それはもちろん、喜んで！」

全身全霊をもって承らせていただきます。

「では、下へ行きましょうか。そろそろ母さんが……」

「何してるの千夏？早くお客様をお連れしなさい」

「って、言われますから……って言おうとしたんですけどね」

こればかりは、苦笑せざるをえなかった。

「ごちそうさまでした。美味しかったです」

「お粗末様。お茶を用意するけど、何がいい？」

「あ、お構いなく。そろそろ家に戻らないと……約二名分のご飯の支度をしないといけないので」

「あら、そう。残念だわ。もう少しお話したかったんだけど」

「またの機会に、ということだ」

「じゃ、車で送るわね。外はもう暗くなってるし」

「ああ、大丈夫ですよ。家は割と近いし、わざわざ車を使う距離じゃありませんから」

「そう？ 気をつけて帰るのよ？」

「はい。お気遣いありがとうございます」

「千夏、玄関でお見送りして」

わかりました。

「わざわざすまないね」

礼儀の一つですから気にしないでください。

「じゃ、お言葉に甘えて」

先輩と玄関へ移動する。

「怪我人なのに悪いわね」

自分の家ですから、平気です。それよりも、今日は変な事になって申し訳ないです。

「変な事って？」

まさか二日続けて家に上がってもらう事になるなんて…。

「ああ、そっちね。元はと言えば、私に原因があるんだから。それより、罰の方かと思っただわ」

それも原因は先輩じゃあないですか？

「ああ、ごめんなさい」

デート、約束ですよ。ドタキャンとか、予定変更とかはなしですからね。

「最優先事項としてスケジュールに組み込ませていただきましたっ！」

最敬礼する先輩。もう怒ってませんですよ。襲えなかったのは残念ですが。

「さりと危険な発言はしないでください…」
では、また明日学校で。

「うん。…あ、良かったら、お昼一緒に食べない？」

え、どういうことですか？

「どうも何も、お昼を一緒にしたいなあ〜というお誘い。今から頑張ってお弁当作るから」

そ、それはわたしの役割なのでは…。

「今日のお詫びを兼ねて作らせて。お願い」

今日の件は、デートの約束で片がついてるじゃないですか。

「それはそれ、これはこれ」

もう…仕方がないですね。わかりました。

「ようっし。気合い入れるぞ〜。それじゃ、おやすみ」

おやすみなさい。気をつけて帰って下さい。

「見送りありがとうね〜」
パタン。

玄関の扉が閉まった。

怒濤の展開な放課後だったなあ。

またしても、嫉妬してしまうなんて学習能力ないなあ。

でも、先輩の色々な表情を見られた。普段しつかりしている印象な先輩が、あそこまでダメダメになるなんて意外だった。調子に乗って苛めてしまったけど。

「千夏〜、いつまで玄関にいるの？早くシャワー済ませなさい」

はい。シャワーの準備しなきゃ。

週末は先輩とのデート。楽しみだな。

この怪我のせいで、あまり遠くへは行けないけど、恋人同士となつて初のデートだから、準備にも気合いが入るってもんですよ。

…ちゃんとその辺、空気読んでくれますよね、先輩？

16（後書き）

大変お待たせしました

ようやく更新です

書く時間が欲しい

仕事が変に忙しくて…

遅筆なのがさらに遅くなってしまってますう…orz

えゝ、お知らせです

この度、夏コミに当選しまして

この作品を頒布する計画をしています

もちろん、このままではなく

加筆修正&おまけを収録する予定です

詳しいことはブログで決まり次第うpします♪

<http://norickrcstyle.blogspot.com/>

17（前書き）

デートの前に、お弁当イベントを書いてみました

「おは」

「おはよう」

「おはようさん」

翌日、いつものように通学路で三人集合。

「今日は早出やないんやな」

「あれは昨日だけよ」

「ホント、昨日はびっくりしたさ。予告なしの早出って初めてだよね？」

「うーん、そうだったかな？」

「まあ、それだけ彼女さんが気になった、ちゅーことやもんな」

「心臓に悪い事はもう勘弁な」

そう言う春菜に、私はこめかみにアイアンクローをかませる。

「い、痛い痛いっ！何で攻撃されてるの？」

「さっきの言葉、そっくり返してあげるわ。私は、あんたのせいで何度心臓に悪い経験をした事か…」

言ってさらに指に力を込める。

「いい痛い痛いってば！シャレになってないよ！」

おっと、無意識に力を入れすぎたか。解放するとしますか。

「ひっっ、まだヒリヒリするう…」

「これに懲りて反省するんやな」

普通にしていれば何も問題ない春菜なんだけど、時々とんでもないポカをやってくれる。去年の特大遅刻事件が一番印象に残ってるんだよね。色んな条件が悪い方向に重なっての出来事だったので、怒るに怒れなかったんだけど。

「ん？巾着持ってるんだ、いちみ。今日はお弁当？」

「久しぶりにね」

「しかも二つ…ゴチになりやす」

「あんたのじゃない！」

巾着に手を伸ばしてきた春菜を振り払う。

「ウチんの…でもなさそうやな」

「菜々美は毎日お弁当じゃない」

そう言つて、私は菜々美の手元にある小さなトートバッグに視線をやる。

「ほんなら、誰の分…あ、そういうことやな」

菜々美、鋭すぎ。

「そう、千夏ちゃんの分よ」

「ほほ、何でまた」

「昨日誘つたのよ、お昼一緒にどう？つて」

そう言つたら、突然二人は小声でひそひそ話し始めた。

「ちよつと、どういうことですか？奥さん。らしくない行動を取つてますわよ」

「まあ、ちつとは色気づいてきたゆうことやないでしょうか…」

「少しは成長した、とみてよろしいんでしょうか」

「突発的な思いつき、という線も捨てがたいですなあ」

…全部聞こえてるんだけど。

昨日の帰り際に誘つたのは事実。突発的に思いついたのも事実。当たつてるだけに言い返せない。

しかも、昨夜帰ってから家で一悶着？があつたわけで…。

昨夜一〇時頃に話は戻る。

お風呂の準備をしながら、お弁当の下準備をしていたところへ、両親と一緒に帰ってきた。…のはいいのだが。

「た〜ら〜い〜ま〜っ…ヒック」

「今帰つたら…ウイ」

ちよつと待て！二人とも酔っぱらいかよ！？

「父さんは良いとして…いや、こっちも状況が良くないが取りあえ

ずスルーして、母さんまで酔ってるってどういう事なの？」

「な、何と…父さん無視された…泣いちゃうぞ…」

もう、うるさいから黙ってて！

「たまたまあゝたべようゝえきでえゝいつしよにいゝなつてえゝ
おとうさんとおゝなつてえゝいざかやさんでえゝはなしにいゝ」

あう、話が支離滅裂になつてゐる。仮にも看護師でしょう。急患来たらどうするのよ。

「だいじょうびゝ、きょうはあゝきゆうかんゝおやすみだからあゝ
あははははははゝ」

だめだ、使い物にならん。急患の電話が来ない事を祈ろう。それにしても飲ませ過ぎよ、父さん。

「俺は止めたんだぞゝ。目を離れた隙にいつの間にかがばがば飲んでたんだ、止めようがないって」

ああゝあ、折角軽い食事作つておいたのに…無駄になりそう。

「お、一美用意してくれてたんだ」

「こんな状態じゃご飯食べてないでしょ」

「え、なに？ かずみのごはんあるの？」

何か勢いよく反応したんですが？！

「たべるたべるゝ、はよもつてこゝいつ！」

もう、酔うと途端に扱いにくいキアラになるんだから。はい、お茶漬けと簡単なおかずだよ。

「きやつほゝつ、かずみあいしてるゝ」

酔っぱらいの愛情なんかいらん。

「でも、よく用意してあつたな」

「ま、どっちも夕飯食べてこないんじゃないかっていう予想もあつたんだけど…明日久しぶりにお弁当作ろうかなって、その準備もしてたの」

「父さんも弁当欲しいですっ！」

予想通りの反応…はいはい、用意するわ。

「はいはゝい、かあさんもほしいゝっ」

か、母さんまでっ!?

「だめなのぉ? かずみつめたいい」

ああ、もうわかったから作るわよ、母さんの分も。手間は変わらないし。

「娘の弁当キターーーーーーッ!」

「わーいわーい」

もう収集つかん。早く食べて寝ておしまいっ!

「大変やったのう…」

「ちっと同情するよ…」

な、何故回想シーンにコメントが。

「何言ってるん」

「全部喋ってたじゃん」

あうっ、またやってしまったのか…。

取りあえず、お弁当は用意できたわけで…問題はアレだね。

「まさかとは思うけど、菜々美。千夏ちゃんのクラス知ってる?」

「何でそんな事聞くんの?」

「私知らないし、変な事まで知ってる菜々美なら…」と

「変な事とは失礼な。情報収集の努力の結果や」

それは知ってるけど、たまにベクトルが変じゃない。特に、私の家の内部事情に変に詳しいじゃない。教えてもいないのに。

「いつちゃんの周辺の調べ物が、一番面白いんや」

「それはいいから、知ってる?」

「それは当然や」

どや顔で返されても…。なら教えて下さい。

「本来は自分で調べるものやから…高いで?」

お金取るのっ!?

「取らへん取らへん。ちょう、おかずをわけて欲しいんや」
え、何、ついてくる気満々?

「もちろんや。お昼一緒させてもらっえ」

「面白そう。あたしも行こうと」

「は、春菜まで!？」

「ま、まずい…二人でお昼という計画があ…。千夏ちゃんの怒り顔が目に見えようだよ」。

授業が終わってお昼時間。

ここは一年C組。わたし、藤宮千夏の所属するクラスです。

今日は、大河先輩とお昼を一緒にする日。

でも、肝心の先輩から具体的なお誘いがなかった。わたし、どうしたら良いんだろう。困った、動けない。

「千夏、お昼一緒にしないかい？」

友達からもお誘いが来るのだが、

「ごめん、今日は先約があるから…」

と、三連続で断っている。まいったなあ。…そう思ったところに、突然教室のドアが開いた。

「たのもっ！」

「…道場破りちゃんねん」

いつも通りの漫才を見せる等々力先輩と彩恩先輩が、わたしたちの教室につ!？」

「泣いてる子はいねが? 藤宮はいねが?」

「なまはげもちゃうねん」

先輩達の突然の登場に、教室に残っていたクラスメイト達は固まってしまって微動だにしない。

このままでは漫才が止まらないので、唯一面識があるわたしが前に出るしかない。

「どうしたんですか、お二方」

「おお、彼女さんや。昨日ぶり」

「本人が出てきたんなら、手っ取り早い」

何の話ですか？

「待ち人を連れて来たんよ」

よく見たら、二人の後ろには大河先輩が恥ずかしそうに立っていた。

「…この二人に任せるんじゃないかった。激しく後悔」

その気持ち、お察しします。

「騒がしくしてごめん。お昼食べよ」

「それはいいんですけど…どこで食べるんですか？」

「屋上を考えてるんだけど…あ」

わたしの足に視線をやる先輩。

「迂闊だった。怪我の事を失念してたよ」

日曜日に怪我した右足首。腫れもほとんど引いているけど、包帯のおかげで歩きにくい。しかし、移動はそんなに大変ではなくなってきた。

「大丈夫ですよ。一階ぶんの移動くらいは平気です」

「そうなの？」

「病院での処置が良かったのか、痛みはもうありません」

先輩の中で、まだ何かが引っかかっているのだろうか？もう大丈夫ですよ。そんなニュアンスで言葉を伝える。

「…無理してない？」

「全然です」

「…信用するわ。じゃ、屋上へ行こう」

わかりました。

夢に見た光景が現実になろうとは。

幸せすぎて気を失いそう。

しっかりするのよ、お楽しみはこれから。

屋上に着いて手頃なベンチを確保し、昨夜から仕込んできたお弁当を広げる。女の子同士なので量はそんなに要らないから、味と盛

りつけで勝負！みたいな感じのお弁当にしてみました。ちなみに、お弁当に飢えていた約二名にも一応作っておいたのは、ここだけの秘密」

「うわゝ、凝ってますねえ」

ちよつと気合い入れすぎたかな、はは。

「本当に頂いても良いんですか？」

「そのために作ってきたんだしね。食べてくれない方がショックだよ」

「では遠慮なく頂きます…は良いんですけど」

おかずに箸が届く直前で千夏ちゃんの動作が止まる。

「…これは一体何の公開処刑ですか」

やっぱ、気になっちゃうか…。

「ああ、こちらは気にせずごゆつくり」

「存分に二人の世界に行きなはれ」

この場において欲しくない余分な面子が二名ほど、対面のベンチに鎮座している。

「ただの見物人ですから」

「ウチは報酬を貰わなあかんからな」

ごめんなさい。ついてくるって聞かなくて…。

「まあ、今回は仕方ないですね。でも、次回からは…空気読んで下さいね」

了解しました。この程度で済んでよかったあ。次回は、菜々美をどう振り切るかがネツクね。

「大丈夫だよ。ウチだって、そうそう邪魔はせえへん。馬に蹴られたないし」

「今回はたまたまついてきただけだし？後は、いちみの態度次第かな」

春菜の場合、対処方法は幾つもあるから気にしてないわ。最悪有無を言わさないから。

「何であたしの時だけ攻撃的かなあ…」

「ハルの場合、自業自得やから」

取りあえず、食べようか。お昼休みが終わっちゃう。

「…そうですね。では改めて、いただきます」

おかずの定番である卵焼きから箸をつけるようです。今回のお弁当は、冷凍物は一切使ってない。自分が食べるだけなら別に拘らないけど、初めてのお弁当でそれは失礼に当たるよね。

手間はかかるけど、今回は合計四人分を作ったのでそれほど苦じやなかった。普段は家族の食事の時間がバラバラなのであまり量が作れないし、間違えて作りすぎると料理が無駄になりかねないという理由もあって、夕食のみそれに作って朝食は夕食の残りを適当にアレンジして完食する。お弁当に回すまでの量は作らない。だから、お昼は学食が購買が普通な私。

「…美味しいです。そして、悔しい」

え、何故悔しいのですか？美味しいという評価は素直に嬉しいんですが。

「わたしも料理しますが、ここまでとは…」

ほお、千夏ちゃんも料理するんだ。

「母さんの帰りが遅いときがあるので、時々…」

じゃあ、次の機会にお弁当作ってもらおうかな。

「…は、はい」

あら？顔を赤くして縮こまっちゃったよ。

「ああ、あ、直球投げちゃったよ」

「普段は出ないのに、こういうときだけは出るんやから始末が悪いんよ」

え、私が悪いの？

「自覚ないから余計に…」

「それがいつちゃんやし」

何か、好き放題に弄られてるんですが…。

大河先輩のお弁当を完食。ごちそうさまでした。

「うん、綺麗に食べてくれたわね。お粗末様でした」

ふと対面に視線を移すと、二人の先輩が姿を消していた。どこへ行ったのだろうか？

「ああ、何か呼び出しをされたみたいよ、二人とも」

そうなんですか。お弁当に集中してて気づきませんでした。

「美味しそうに食べてたもんねえ。作った甲斐があつたわ」

な、何か今になって恥ずかしさがこみ上げてきた。変な顔とかしてなかったよね？と、自問自答する。

「はい、お茶。緑茶だけどいいよね」

あ、ありがとうございます。緑茶はあんまり飲んだ事がないので嬉しいです。

「そうなんだ。親戚が静岡にあるから、新茶なんかよく送ってくるんだよ」

そうなんですか。じゃあ、普段から緑茶を？

「そうでもないよ。父さんが『緑茶以外は認めん！』っていうから、父さんがいるときだけ」

わたしの家でも、来客があるときぐらいです。

「割といい値段するからねえ」

それより、今度の休みの予定大丈夫ですよ？

二人だけになったので、改めて昨日の話題を先輩に振ってみた。

「今度の休み…何だっけ？」

せ、先輩…本気で忘れてるんですか？

「あ、デートするんだっけ。忘れてませんよ。お弁当に気合い入れすぎて、頭から抜けてたよ」

人はそれを忘れるって言うんですっ！本気で怒りますよ！

「本気モードは勘弁して下さい」。頭からは抜けてたけど、手帳にはちゃんと書いて予定組んであるから」

ほら、と手帳の中身を見せてきた。うん、ちゃんと書いてある。

先輩は文武両道なのに、並列処理が苦手なのかな？それとも、恋愛

ことが絡むと途端にダメダメになるのかなあ。

「昨夜の内に書き込んでおいたんだよ？完全には忘れてないんだから許して〜」

はあ、わかりました。じゃあ、お仕置きはデート当日に実行します。覚悟しておいて下さい。

「えっ、ま、マジですか…」

さて、どんな内容にしようかな。別の意味で楽しみになってきました。

「何か、千夏ちゃんが黒くなっていく…」

とはいえ、内容は三分の二ほど決まってるんですけどね。先輩のわたしへ愛が試されるんですよ。

「ど、どんな内容なのか気になる〜っ！」

17（後書き）

前回、お昼に誘うシーンがあったので書いてみました

もうちょっと書きたい気もあつたけどネタが出なかった…orz

最後は、デートの前振りで終わってます
どんな内容になるのか？

次回はコミケ後の更新となります
相変わらず遅筆ですいません…

次の日曜日。

特に目覚ましもかけなかったけど、六時半頃起床。

さすがに、今回は寝起きを襲ってこなかったか。今日のイベントはさすがに知らないはずだからね。

…うわ、何この寝汗。変な夢でも見たかしら。何も覚えてない。

その辺りを起きない頭で考えてたら、ベッドの脇に置いてあった携帯が着信を知らせてきた。

「…もしもし？」

相手も確かめず私は応対する。

『お、いっちゃん。おはようさん』

菜々美だった。

「ん。こんな早い時間にどうしたの？」

『モーニングコールや。今日はそっちに行けへんから』

そうそう家に来られても困るんだけど。

「私頼んだっけ？」

『いんや、これはウチからのサービスやねん』

別にそこまでしなくても…ん？まさかとは思っけど。

「わざわざありがとね。もう一眠りするから」

『あかんよ寝たら。せつかくのデートっちゅう時に』

「…なぜそれを知っている？」

『ウチを出し抜こうって思うても無駄やよ。方々にアンテナを張ってるんやから』

それにしてもおかしい。デートの事は、私達二人しか知らないはず。どこから漏洩した？細かい打ち合わせをして正式に約束したのは昨日の夕方。漏洩したとしても時間がなさ過ぎる。

『その辺は守秘義務やからな。いっちゃんでも言えへん』

菜々美には隠し事すら出来ないのか…。

「で、家に来ない代わりに電話をした、と」

『念のためにな。ハルみたいに寝坊はないと信じてるけどな』

「お氣遣いどうも」

『まあ、寝坊して慌てて猛ダッシュうちゅうのも、イベント的には面白^{おもろ}いけどな』

それをやるのは男子のシチュでしようが。そんな事したら千夏ちゃんに怒られる。

『前から思ってるんやけど、いつちゃんは彼女さんに対し腰引けるんちゃうか？』

「どうなんだろう。焼きもちし易いからなあ、千夏ちゃんは。その辺を恐れてる部分は認めるけど」

昨日までも、お昼を一緒にしたり部活に顔を出したりしたけど、その度に怒られてる気がする。普通に行動してるだけなのになあ。

『いつちゃんは人当たりが良いのが長所やけど、今はそれが裏目になってる感じがな』

かも知れない。思い出せば、陸上部で少し他の娘と話した後には千夏ちゃんを見ると、必ず怒りオーラを纏ってたからなあ。焼きもち嬉しいけど、心臓に悪い。故に怒らせないように努力してるんだけど。

『彼女さんの機嫌を損ねないよう、早よ起きて支度せな』

「待ち合わせ十時だよ？まだ余裕…」

『その考えがあかん言うてるんよ。年上は早めに出かけて相手を待つくらいの余裕を見せんと』

ごもつともで。

『それに、いつちゃんも女の子なんやから、支度に時間かけて小綺麗にして行かんとな。せつかくのデートなんやし』

どうも、そういう乙女の部分が欠落してるよ、と遠回しに指摘されてるようだ。気をつけよう。

「わかった。シャワー浴びてスッキリしてから支度を始めるわ」

『ん。それがええよ。何や、結構考えてるやん』

「いや、夢見が悪くて寝汗が酷かったので浴びたいな」と

『それが理由なんか。…はあ、頭いた』

電話越しで菜々美に呆れられてしまった。

『…わかった。なんとかして一時間後にそっち行くから、それまでにシャワーと朝食を済ませとくこと。ええな？』

「ええっ、く、来るの？こっちに」

『支度手伝うたる。話してたら、こっちが不安になつてきたわ』

「い、いいよ、一人で出来るから、無理に来なくて良いよ？」

『この際、いっちゃんに乙女というのをレクチャーしたる。覚悟し
いや』

そう言つて、菜々美は電話を切った。

ど、ど、ど、どうしよう。菜々美がこっちに来る！まあ、それは良いとして…。

「何をされるか、非常に不安だ…」

朝から軽くブルーになった私は、鬱な気分を払拭する為にシャワーへ向かったのだった。

時間が経つて、九時半。

山宮市駅近くの、シネコンが入ってる商業施設。この入口で千夏ちゃんと待ち合わせ。

もう、朝からドタバタだった。

電話の後、シャワーを浴びて朝食を食べ終えたタイミングを見計らつて、菜々美が予告通りに家にやってきた。

そして、服から下着から色々引っ張り出してああでもないこおでもないとコーディネートしたあげく、自前の化粧道具を持ち出して軽く化粧までさせられた。

『いっちゃんは、元々顔立ちが良いから軽くファンデとグロスを引くだけでも充分やな』

『化粧までするなんて…』

『せつかくの初デートやし、気合い入れんと』

『此処までする必要あるの？服もまさかこれを選ぶとは…』

そう、服はピンク系ペイズリー柄のワンピース。それに袖レースのプルオーバーと透かし編カーディガンという組み合わせ。いつか菜々美に似合うと勧められて買って以来、あまり袖を通してなかった一品。どうやらこのときを見越していたようだ。

『うん。これでOKや』

そう言われて姿見に自分を映してみたが、自分じゃない自分がそこに立っていた。

『これが…私？』

『そう。素材がええから、少しいじるだけでこれだけ映えるんよ。やゝええ仕事したわあ』

『で、下着は…っと、ええっ、何でこの下着なのっ！？』

出された下着は、胸を寄せて上げるといって売りのブラに大胆なTバックのショーツだった。

『これぐらいは普通やで。見えない部分にも気合いを入れるんが乙女というもんや』

『それはどうかと…でも拒否権はないのね』

そして、待ち合わせ三十分前に此処にいるという状況。

『デート頑張りや〜』

そう言つて菜々美は駅へ向かう途中で別れた。今日は日本舞踊のレッスンだとか。春菜は今日は部活があるはずだから、基本的に邪魔が入る事は無いはず。そんなことを考えながら待ち人が現れるのを待っていた。

そして、時計は九時四十五分。

「あ、先輩」

待ち人来たる。

千夏ちゃんは、涼しげな感じのパフTシャツとチェック柄のチュニックと言つ組み合わせにレギンスという格好だった。

「少し涼しげで良い感じの格好だね」

「あ、ありがとうございます。先輩も大人っぽい感じで…。しかもお化粧までしてます？」

まあ、半分は菜々美の仕業なんだけど…と、これは言わない方が良いか。また怒られてしまうのがオチだ。

「それにしても早かったね、来るの」

「早めに来て待つつもりだったんですが、逆にお待たせしたようですいません」

来た早々、誤り始める千夏ちゃん。

「いいのよ。私の方が早く着いちゃっただけだしね。少しでも年上らしいとこを見せないと。足はもう大丈夫？」

「はい。まだ湿布と包帯は欠かせませんが、だいぶ普通に歩けます」
そう、それは良かった。じゃあ、徐々に足を慣らしていかないかね。

「ところで、今日は映画ですか？」

「うん。たまたま見たい映画がここでやってるから。一緒にどうかなってね」

「ああ、このタイトルですか。わたしも興味がありました。へえ、今此処でやってたんですね」

「およ、千夏ちゃんも興味あったんだ、この映画」

「TVでCMを見て以来…」

この映画、とある有名な小説が元になってるって菜々美が言ってたなあ、確か。

「取りあえず、行こうか」

「はい」

さて、受付でチケット購入つと。

「学生二枚お願いします」

「…本当に学生？」

怪訝そうな表情でお姉さんに見返される。

うう、まただ…。背が高い故の見解の相違。どっかの主人公じゃ

ないけど、不幸だ。ましてや、今回薄く化粧もしてるしなあ。こ
うなったら、泣く子も黙る必殺アイテムを提示するのみ！

「学生証です！」

「わたしも提示します」

つられてか、千夏ちゃんも隣から学生証を掲げる。

「失礼しました。学生二枚ですね」

提示された金額を払って、その場を後にする。少し憤慨しながら。

「先輩：いつもあなんですか？」

「背が高い故にね。私服だと学生に見てもらえないのよお…」

自分で言っててさらにダメージを受ける。あうっ。

「大きいってのも大変ですね」

まあ、背の高い男子に比べたら頭をぶつけない分、まだマシかな。

「でも、その背の高さでわたしは先輩を色んな場所で見つける事が
できたんです。背が高くて良かったと思ってるんです」

：嬉しい事を言ってくれるじゃあゝりませんか！そう思ってくれ
るのなら、あながち背が高いのも悪くないな。

「さて、もうすぐ上映時間だね。何か買っていく？」

「あ、じゃあジュースでも買いましょうか」

二人分の飲み物を買って、いざ上映ブースへ。

「へえ、シネコンってこんな感じになってるんだ」

「ん、もしかして初めて？」

「記憶にある限りではそうですね。意外と狭い。でも、スクリーン
は大きいです」

「わりと階段急だから気をつけて」

そう言って、彼女の手を取る。

「あ、ありがとうございます…」

暗めのブース内でもわかるくらい、千夏ちゃんの顔が赤くなっ
ていた。

「ふあゝっ。なかなかの感動作だったゝ…って千夏ちゃん、怒っていらっしやいます？」

上映終了。先輩と連れだってブースを出てきたわたしだが、作品の内容に苛立ちを覚えていた。

「何で…なんであそこであの人が死んじゃうんですかつ！一番の功労者なのに…」

そんな憤慨してるわたしの目元にハンカチがあてがわれていた。いつの間にか、わたし泣いてた？

「優しいんだね…」

そんな言葉が、先輩の口から放たれた。

「そ、そんなこと…わたしはあの理不尽な展開が許せないんです」

「まあ、確かにね…。でも、あの部分は史実に則ってるわけだし、実際にあった事なのよね」

そうなんですか？その辺はまだ習ってないからよく知らないんですが。

「脚本書いた人もすごいよねゝ。あの人が死ぬっていう伏線をこれでもかって張ってたからねえ」

ああ、それは何となく見ていてわかりました。

「だから、なおのこと許せないんです。あの人を含め、作戦に参加した人全てが生き残ってほしかったです」

それが、わたしの正直な気持ちだった。

「ハッピーエンドが好きなんだね、千夏ちゃんは。わかる気がするなあ。現実には厳しいから、せめて物語の中だけでも幸せでありたいよね」

世の中は、みんなハッピーエンドを目指して生きてるんじゃないでしょうか。

「そうね。どうしようもない過酷な環境の中で生きてる人もいる。目標を重視するあまり、道を違えてしまった人もいる。しかし、どんな人も幸せを目指して生きている。そう私は信じているけどね」
何か哲学的ですね。そうあってほしいと願う自分もいる。

「さて、時間も時間だしお昼にしない？」

近くの時計を見たら、十二時を回っていた。

「そうですね。それじゃあ、駅へ寄ってもらってもいいですか？」

「何かあるの？」

「いえ、荷物をロッカーに預けてきたので……」

「あ、そうだったんだ。じゃ、早速取りに行こう！」

そう言っていると、先輩は私の手を取って歩き始めた。

駅で荷物を取り出し、やってきたのは駅南側に広がる緑地公園だった。なかなか広くて、一日いても飽きないくらいの市民の憩いの場所。

「この辺が良いかな？」

先輩は、大きな木の下の日陰になってる部分を確保していた。そこへ、私はレジャーシートを取り出してその場所に敷き、荷物を置いた。ふう、結構重かったなあ。

「あのおゝ千夏さん？質問よろしいでしょうか」

はい、何でしょう？

「その大きな荷物……の中身が気になるのですが」

まあ、気になりますよね、この大きさは。

「前にわたしが言ったこと覚えていますよね？」

「ええ……と、お仕置きがどう……とか？」

「そうです。言うなれば罰ゲームです」

「ば、罰ゲームう！？」

くふふ、動揺してる」

「何されるんだろう……」

「では、罰ゲームです。このお弁当を完食して下さい」

そう言って、わたしは包みを広げた。

「……これを？」

先輩が驚くのも無理ない。何たって、ふだんの食事の二倍くらいの量があるお弁当が姿を現したからだ。

「ち、ちよつと半端ない量なんですが…」

「わたしへの愛が試されるといったはずですよ?」

「それにしても、後が怖い量だなあ…」

「た・べ・て・くれますよね?」

念押しのクラスマイルを先輩に向ける。

「こういう色モノ担当は春菜なんだけどなあ…ま、そこまで言われ
たからには頑張るよ」

がつついて食べるのは禁止ですよ?ちゃんと味わって食べて下さいね?

「うつ、た、退路を塞がれてしまった…」

では、まずはこちらのタコさんウイナーを…はい、あゝんしてください。

「え…そこまでやるんですか?こつぱずかしい」

「だからいいんです。お仕置きであり罰ゲームなんですから」

さあ、いっぱいありますからねえ。どんどん食べて下さいね。

恐怖?の昼食が終わった。

かなりの量だったが、何とか完食した。

「本当に完食するなんて…」

そのつもりで作ってきたんじゃないんですかいっ!

でもさすがに動けないので、千夏ちゃんの膝枕で横になっている。

「悪いわね、重いのに」

「いえ、大丈夫です。でも大丈夫ですか?食べてすぐなのに横にな
って…太りませんか?」

「あの量を作ってきた本人が言う台詞か?」

「あう、すいません」

「この量を食べてすぐに動いたら、おトイレと友達になっちゃうよ
ですね」

「食休みも大事だよ。そればっかやってると太るけどね」

そう言って二人で笑う。

「しかし…良い風が吹いてるねえ」

「そうですね。心地よい風です」

「枕の感触も良い感じだし」

「お、オヤジですかっ！」

「失礼な。オヤジなのは春菜だよ」

色んな事を言い合いながら笑いあう私達。

突如、会話が止まった。

見つめ合う二人。

どちらからともなく…というより私が目を瞑り、それが合図で千夏ちゃんが顔を近づけてきて…唇が軽く合わさる。ちゅっ、という音が聞こえた気がした。

「人に見られるかも知れませんよ？」

「でも、したかったんだ、今」

「どうしてです？」

「…言わなきゃ、ダメ？」

「お仕置きの続きです。言わないと許しません」

え、まだ続くの？お仕置き…。

「あなたが…千夏ちゃんが愛おしいから…恥ずかしっ！」

言った瞬間、どうしようもない恥ずかしさがこみ上げて来て、思いつきり視界を閉じる。そしたら、また唇に柔らかい感触が…今度ははつきりと感じ取れた。その後、唇を啄むように何度もキスをしてきた。何かほっこりとした気分になって、視界を開いた。そしたら、瞳が潤んだ彼女の顔が見えた。

「わたしもです。先輩の事が大好きです」

そしてもう一度合わさる唇。もう押しつけるだけじゃ足りない。でも、ここは外。遮る物が何も無い。しかしこれ以上したらもう止まらない気がする。

「…ねえ、今から家に来ない？」

何とか理性を取り戻し、千夏ちゃんを誘ってみる。

「…は、はい。でもいきなり行つて良いんですか？」

彼女も、もしかしたら私と同じ気持ちかな？

この誘いの意味を読んでくれるよね？

「今日も誰もいないし…ね？」

彼女は何も言わず俯いたが、小さく頷くのを私は見逃さなかった。

私の家までの道すがら腕を組んで歩いてきたが、会話は皆無に等しかった。でも、彼女の温もりが感じられてるので何も気にならなかった。時折、目線が合わさったときも微笑むだけだったが、心地よかった。

「どうぞ」

「おじやましまゝす…」

千夏ちゃんを玄関に招き入れ、ドアを閉める…と同時に、私は彼女を抱きしめた。

「せ、先輩っ!？」

正面から抱きしめ、唇を奪う。しかもいきなりディープに。

「んっ、んんんっ!」

ビックリしたのか、千夏ちゃんは身体を離しにかかる。

「いきなりどうしたんですか」

「家に着いたと思ったら、抑えが効かなくなっちゃって」

「い、いきなりすぎますっ!」

あう、怒られてしまった。

「ごめん。でも、公園からずっと我慢してたんだよ？公園でのキスが、私の欲望に火をつけたんだよ」

「…そんなこと、言わないで下さい…」

…うう、否定されたあゝ。

「…我慢してるわたしが莫迦みたいじゃないですか。わたしだって先輩といちゃラブしたいのを必死に我慢してるんです」

あれ？やっぱ同じ気持ちじゃない。

「強引な先輩もキライじゃないですが…むしろ普段から少しは強引

さを見せてほしいところですが…もう少し空気読んでほしいです」

何かダメ出しされてるようなされてないような言い回しなんです
が…結局どうなの？

「部屋まで我慢して下さい。その後は…」

周りをよく見て行動しろっていう事なのね。

「はい。せっかく先輩の家に来たのに…」

いきなり襲われたら、目も当てられないという事か。

「じゃあ、部屋へ行こう」

階段を上がり、千夏ちゃんを我が部屋へ招き入れる。

「うわあゝ、綺麗な部屋…」

朝のバタバタで、結果的に軽く掃除をする羽目になったのは此処
だけの秘密だ。

「千夏ちゃん…」

先ほどの反省から、今度は優しく後ろから抱きしめる。ああ、ち
つこくてやゝらかいなあ。

「先輩…」

私の腕の中でもぞもぞしたかと思ったら、正面を向いて背中に手
を回し…力が入ったと思った瞬間、ベッドに押し倒された！？

「あ、あれ？どゝなってるの？」

この小さい身体のどこにこんなパワーがあるんだ？大きい私がま
た押し倒されるなんて。

「…先輩が悪いんですよ？」

え、何の事？

「キスしたり、腕を組んだり、抱きついてきたり…もう無理です。

この前出来なかった事を此处で実行します」
も、もしかして…。

「せ、先輩をお、襲っちゃいます」

やっぱりっ！？でも、もう私も我慢の限界。何をされるんだろ
うという期待感が勝っている。

「…優しくして下さい」

そう言うのがやっとだった。

「お仕置きですから、聞く耳持ちません」

そう言うと、彼女は激しいディーブキスを私に与えながら、ワンピースに手をかけた。

「何かごめんね。デートがこんなになっちゃって」

ベッドに横たわる先輩とわたし。そこで、突然先輩が謝ってきた。
「本当は、お昼の後もウィンドウショッピングをしたり、おやつタイムしたり…と色々考えてたのよ？」

先輩にしては珍しく考えてたんですね。

「何気にひどいよお、それ」

ふふふ。だって、普段が完璧なのに恋愛ことまで完璧じゃあつっこむところがありませんからね。

「うう、千夏ちゃんがいぢめるよぉ」

愛情の裏返しだと思って諦めて下さい。

「さて…これからどうしようかしらね」

「そうですね…」

二人で後の予定を考えていたら、階下でドアの開く音が聞こえてきた。玄関だろうか？

「一美、いるの？」

例の看護師らしかった。先輩のお母様だっけ？

「あい、部屋にいるよ。お客人も一緒」

そう先輩が答えると、階段を上がってくる足音が聞こえてきた。程なくドアが開いた。

「良かった、いたのね。…あら、千夏ちゃんだっけ？いらっしやい」

「お、お邪魔してます…」

しどろもどろになりながらお母様にご挨拶。

「母さん、帰り早いじゃない」

「うん、今夜の深夜勤が足りない事がわかってね、一回戻ってきた

の。また夜に行かないと」

「あらら、それは大変だ。じゃ、晩ご飯作るよ」

「お願いね。その間にお風呂入ってくるわ。あなたも、ご飯食べて行きなさいな」

ええっ！お邪魔じゃないでしょうか？

「大丈夫よ。今日はあの人がいないから女子三人で賑やかにやりましょう。都合とかどう？」

電話さえ入れれば大丈夫だと思います。

「よし決定！一美、料理は任せたわ」

「はいはい、早くお風呂行って来れば？」

頼むわよーと言いつつ残して、看護師は階下に消えた。

「いきなり決まっちゃったけど、本当に大丈夫？」

それは平気です。わたしもまだ、帰りたくなかったし…願ったり叶ったりです。

「うっ、そういうところが反則なんだよなあ」

ど、どういことですかっ！

「理性を壊されるくらい可愛いってこと！ますます好きになっちゃう」

珍しくストレートな返し…恥ずかしいじゃないですか。嬉しいけど。

「んじゃ、晩ご飯作るか！あ、良かったら手伝ってくれる？」

「はいっ！喜んで」

即答したわたしは、先輩と手を繋ぎ階下へ降りていった。

18（後書き）

お待たせしました コミケ後1発目です

普通のデートから一転、ムフフな感じになってますね
相変わらずそのシーンは書いてませんがw
ツッコミどころが満載かも知れませんがw
後日もうちよつと修正入るかも？

数日後。

「おは」

「おはようさんさん」

「おはよ…って、どうにかならないの？菜々美の挨拶」

「芸人は日々精進やで？」

芸人関係ないと思います。

そう心でツツコミを入れてるその時に、もう一名が合流してきた。

「おはようございます、皆さん」

「よう、藤宮」

「ぐーてんもるげん」

「また訳がわからない挨拶…」

「今のは、立派なドイツ語の挨拶やよ？発音正確やないけど」

「あ、そのフリース漫画で見た事あります」

ふーん、そうなんだ。さすがの私も、ドイツ語は習った事無いからなあ。

「あ、遅れてごめん。おはよう、千夏ちゃん」

「お、おはようございます…」

な、なぜ朝の挨拶で照れるのですか？

「そりゃいちみは彼女の想い人だし？」

「まだ付き合って日が浅いんやし、当然の反応や」

さいですか。

でもあの時は驚いたなあ。あれは、家で夕食後彼女を送る途中での出来事だった。

『せ、先輩』

『ん、なあに？』

『あ、明日から朝の登校と一緒にしてください』

『…え、いいの?』

『この足なので歩調は遅めですが、なるべく一緒の時間を過ごしたいんです。学年違うから、学校では別々になっちゃうし…』

『でも今部活では、ほぼ付きっきりでいるでしょうに』

『それだけじゃ足りないんです』

『ん〜、まいったなあ…』

『え、ダメなんですか?彼女からのお願いなのに…』

『…そうじゃなくって、私が言いたい事を全部言われちゃったんで、まいったなあ〜と』

『それじゃあ…』

『むしろ、こちらからお願いしたいくらいだよ』

『…っ、あ、ありがとうございます!』

『ただし、余計なおまけがいるから二人つきりじゃないけど、それでもいい?』

『余計なおまけとは失礼やな』

『なんだ。これでも氣イ使ってるんだゾ?』

え、また回想にツツコミが?

『その独り言ダダ漏れは、もはや病氣やな』

『ま、そこがいちみクオリティだけだな』

うう、本人が気づいてないのが一番シヨックだよ。

『困った癖ですね。これでは隠し事が出来ません』

あうう、千夏ちゃんにまで呆れられた…。

『迂闊な事喋って、亀裂入らんように氣いつけや〜』

『亀裂入ったら、広げてやろうかな〜』

何だって?言ったわね、春菜…。

『そうかいそうかい。今日も空の旅がご所望?それとも珍しくモグラと仲良くなりたいたいのかなあ?』

指を鳴らしながら、笑顔で春菜を睨み付ける。

『うひゃ〜、いちみの怒りに火がついちやった?これはヤバい、逃

げるが勝ち」

珍しく春菜が逃げ出した。謝る気はないって訳ね。

「マテコラ〜っ！」

今日こそ、その減らず口を矯正してやるっ！

「あゝあ、行ってもうた…」

「追いかけてなくて良いんですか？」

わたしは素朴な疑問を菜々美先輩にしてみた。

「ああ、平気や。毎度のスキンシップなんよ。あれで結構喜んでるところがあるからなあ、ハルは」

わ、ワザと先輩を怒らせてるんですかっ！？

「Mっぱいところがあるからなあ、ハルは。でも、何かあったときはああやって、いっちゃんを元気づけてるんよ、いつも」

「親友だから出来るんですね…」

「大抵はハルが口滑らせて自爆してるだけやけどな」

「はは…」

でも、そういう事が出来る関係って羨ましい。わたしは、まだそんな域にはたどり着けていない、残念ながら。わたしにもああいう風に出来的时候がくるんだろうか。

「大丈夫。今にあの役目はあんさんに回ってくるから」

「そ、そうでしょうか」

「間違いなく」

そうありがたいですが、ワザと怒らせるなんて無茶ですよ。

「怒らせるんやなくてもいいんよ？どんな方法でもええねん、何かあったときは元気づけたってな」

「なれるよう頑張ります」

そんな話を菜々美先輩と歩きながらしているときだった。

ドンッ！という衝撃が突如、右後方から飛んできた。

「きゃあっ！」

バランスが崩れ倒れそうになるが、菜々美先輩がすかさず支えて

くれていた。

「おおっと。大丈夫か？」

「あ、はい、何とか。ありがとうございます」

「まあ、隣におったしな。こらゝ、その子。氣いつけえやゝ。相手は怪我人やで？」

「すみませゝん、急いでたもので。ごめんなさゝい」

ぶつかつた相手は、それだけ言つと脱兎のごとく走り去つていった。

「何やあの気持ちの入つてない謝罪はあゝ」

確かにそんな感じでしたね。氣にも留めていないっていうのかな？ そうついた類の謝罪でしたね。

「何か起こらんとええねんけど…」

どうしたんですか、怪訝そうな顔してますよ？

「あんさん、暫く周りを氣いつけたほうがええかも知れへんで？」

は、はあ。まあ、氣をつけるにこしたことはありませんが…。

「なゝんか、嫌な予感がするねん…」

結局、二人の先輩はそのまま学校まで行つてしまつたようです。

なので、菜々美先輩と連れだつて学校に到着してしまいました。何だかなあ（笑）。まあ、こんな雰囲気も悪くはないし、菜々美先輩とも距離が近づいた感じもする。とにかく、この三人の先輩といると退屈しない。ハル先輩も割とわたしに氣を遣つてくれるのがよくわかる。だてに『文武両道三人組』と呼ばれてるわけじゃないんだ。

彩恩先輩と昇降口で別れ、自分の下駄箱に到着。いつものように扉を開けていつものように上履きを手に取ろつとしたところで、わたしの動作が止まつた。

「あれ？ 何だろ」

そう呟いて、下駄箱の中にある違和感の正体を手に取つた。

「…手紙？何でまた」

今時、大抵の友達とは、ちょっとした話はメールでやり取りするのが普通になってる。…という事は、面識のない人からの物だと推測できる。

（差出人書いてあるかな？）

そう思い裏返してみると、ハートマークの封印シールが！

（も、もしかして…これが噂に聞くラブレターってやつ？）

漫画なんかで見た事あるシチュエーションを、わたしが実際に体験するなんてビックリ。っていうか、何でわたしなの？何も取り柄がない幅跳び選手ですよ？ましてや怪我をして印象良くない方なのに…。しかも、大河先輩がわたしとの関係を公言しているんですよ？あの後、瞬く間に噂が広まって大変だったんですから…って、めちゃめちゃ混乱してるよ、わたし。

（取りあえずこれを仕舞わないと…友達に見つかったら、えらい騒ぎになるのは目に見えてるよ）

取りあえず、周りを確認。

前方、よし。

後方、よし。

左右、よし。

念のため…上方、よし。

下方、よし…って、本当にいたらパンツ見られちゃうじゃない。何やってるんだろう、わたし。

誰もいない事を確認して、ブツを折りたたんでスカートのポケットに仕舞う。本当はこんな大事なモノ折りたくはないんだけど、ひよんな事から見つかってしまわない為に敢えて小さくした。

「おはよー！」

ほっとしたと同時に、クラスメイトが肩を叩きながら挨拶をしてきた。

「うひゃあああああっ！？」

「うわ、ビックリした」。どうしたの？」

「い、い、いきなり驚かさないでよっ！」

心臓止まるかと思っただよ。

「驚いたのはこっちだよ」。普通に挨拶しただけじゃん」

そう言ったのは、沖^{おき}祐華^{ゆうか}。クラスメイトの中では仲が良いほうの一人だった。

「にしても、驚きすぎだよ」

「ごめん、考え事をしてたから…」

「何かあったの？」

「まあ、大したことじゃないよ」

「ふうん。ま、いいや。教室いこう？宿題見せてもらわないと」

「またあゝ？やってきてないの？」

「いや、今回はやってきたよ。ただ、合ってるか自信がないだけ」
わたしを見て、安心したい訳か。

「だって、千夏の英語は完璧じゃん」

小さい頃から習わされてるおかげだね。母の友人にも外人^{ネイティブ}の方が何人かいるし…どんな縁があるのか謎な人なんだよね、うちの母さんは。

「それじゃ、容赦なくダメ出しするからね」

「え…お手柔らかにお願いします…」

そんなこんなで、その後お昼前まで手紙の存在をすっかり忘れていたわたしだった。

午前中の授業終了。お昼休みだ。

今日は特に用意してないので、購買でサンドウィッチをゲット…出来るかなあ。ま、何とかなるでしょ。

「ほら春菜、いつまでも沈んでないで購買行くよ？」

私は、前の席にうずくまってる物体を軽くはたいた。

「うえゝい…」

ようやく起き上がったよ。

「そんなに数学の先生に負けたのが悔しい？」

「だあゝって、あんな引っかけ問題にやられるなんて……」

私たちの間では阿呆な子で通ってる春菜だが、何故か数学がずば抜けて出来るので、授業で時々先生と対決するというイベントが起きる。ここ最近は春菜が勝利していたせいか、今回は先生が意地悪な問題でリベンジを果たしていた。まったく、大人げない数学教師だわ。でも、後でちゃんと解説してくれるのでわかりやすい授業だと評判は良いのだ。

「ま、引つかかるところが春菜らしいけどね」

「何とでも言ってくれい……」

「いつちゃゝん、ハルゝ、お昼行くえゝ……って、どしたん？ハル」

菜々美が合流。

「数学イベントで、春菜が負けたのよ」

「おやまあ、えげつないのおゝあのセンセも」

春菜との勝負を楽しんでる節があるけどね。

「それより、購買行くんやろ？早よせん」と

お昼ゲットが遅くなる上に、千夏ちゃんを待たせてしまう。お誘

いは四時限の前にメールで済ませている。

「ほら行くよ！」

「へゝい……かつたるゝ」

長身が丸まったら格好悪いから、しゃんとしなさいってば！

「お待たせゝ」

屋上のいつもの場所。最近はここで四人でお昼が定番になりつつある。

前回の初お昼のあと、一度二人でお昼を食べたが何か物足りないという考えで二人は一致し、以後は四人でお昼するようになった。段々この四人で、一グループな感じになりそう。

「って、あれ。反応なし？」

春菜がそう言うのも無理はない。私達が傍で声をかけたというの

に、同じ姿勢で微動だにしない。

「どしたん…ん？手紙…？」

菜々美は、彼女が持つてゐる手紙に気がついたようだ。

「何々…な、何やて！」

その驚きの声に千夏ちゃんがビクツと反応した。

「ダメでしょう。人の手紙覗いちゃ…」

「そないな事言うてる場合やない。見てみい！」

問題のモノを奪い取る菜々美。

「あ…」

千夏ちゃんが小さく声を上げたが、全くと言っていいほど抵抗しなかった。

菜々美から手紙を受け取った私は、文面に目線を落として…驚愕した。

『大河一美に近づくな。守れない場合は成敗する』

「どういう事よ、これ…」

「何々…なんて書いて…マジかよ、これ」

春菜も横から覗いて…驚いていた。こんなことをする輩が、この学園にもいることがまず驚きだ。女子の嫉妬は恐ろしいって話はよく聞くけど、実際目にとくるものがあるわねえ。

「この手紙、どうしたん？」

菜々美は、千夏ちゃんに事の経緯を質問していた。

「…今朝…下駄箱に…仕舞い込んだ…忘れてて…時間…あつたから…今読んで…」

固まっていたところに、私達が来たって訳か。

「千夏ちゃん、こんな手紙無視していいからね。私達の関係は誰にも邪魔させないから」

「おお」

二人が感心したように手を叩いていた。当たり前じゃない。千夏

ちゃんを泣かせる人は、絶対に許さない。

「先輩……」

涙目で顔をこちらに向ける彼女。

「いつも通り、普段通りでいいからね。こんな事で離れたら、私が寂しくて泣くかも」

「それはそれで見てみた……おぼうあつ！」

ああ、無意識に手が出たわ。ごめん春菜。

「反応速過ぎつす……」

「まあともかく、誰がこんな事をしたか調べる必要があるな」
見つかるかなあ。

「ウチの情報収集力をなめたらあかんえ。必ず見つけ出したるからな」

「あ、ありがとうございます……」

それからというものの、嫌がらせ行為がエスカレートしている気がする。

通学途中では、必ず誰かがぶつかってくるようになったし、朝の下駄箱の中は嫌がらせの手紙でいっぱい。あまつさえ、休み時間中に廊下で話をしているときでも、誰かがぶつかるようになってきた。

何で？

わたし、何かした？

ただ先輩と仲良く……それ以上もあるけど……してるだけなのに。

こんな事が続くと、心が折れそう。

先輩は気にしなくていいって言うてくれたけど、こうも続くとさすがに……。

「千夏、大丈夫？ 顔色悪いよ？」

教室で祐華が心配して、私の顔を覗き込んできた。

「うん、何とか…平気だよ」

「何かあったの？イジメ？」

「よくわかんない。先輩には気にしなくていいって言われてるけど…」

「先輩って…大河先輩？」

「知ってるの？」

「うん。剣道部にも来た事あるんだよ、あの先輩」

まあ、弓道部に行くくらいだからそれもあるか。

「そういえば、ラブラブだったよね？千夏と先輩は」

「な、何故それを…」

「有名じゃん。弓道場で堂々と宣言したって話」

こ、こんなとこにまで浸透してたとは…。

「実はさ、チラツと耳にしたんだけど…あんたの事を良く思わない上級生がいるって噂を聞いた事があるんだよ」

え……？

「じ…上級生って、二年？」

「いや、どうやら三年らしい。ほら、元々先輩の方が有名人だろ？その先輩といちゃついている生意気な一年がいるって噂を聞いた事があるんだ。それって千夏の事だよな？」

「…その噂、いつ聞いたの？」

「今週の頭かなあ。剣道部の先輩が話してたのが聞こえてきたんだよね」

それって、あのデートの後ってこと？見ていた人がいたんだ…。

別に地元だったから目撃されてもおかしくはないけど、たまたま良く思わない人に見られていたんだ。

「まさかとは思うけど、その先輩が何かしたとか…」

「ああ、それはないない。うちの先輩達は逆にあんた達を応援してるんだよ？」

そうだったんだ…。

「誰がいったいこんな事を…」

そう言つて、私は例の手紙を机の上に置いた。

「な、何これ…ラブレターっぽいけど？…え、何この文面。全部こんな感じなの？」

「うん…」

全部で二十通くらいはあると思う。数えるのが嫌になるくらい。

「陰険だなあ。言いたい事があるんなら、直接言いに来てっての」

こんな女子校で陰険な…いや、むしろ女子校だから起こるのかも知れない。男子ならもっと直接的にくるはずだから、女子特有なやり方なのかな？

「もし何かあつたら、大河先輩が来るまで私が守つてあげるよ。剣道部の意地と誇りにかけて」

ありがとう。友人として期待するわね。

帰りのLHRが終わった。

さて、気持ちを切り替えて部活に行こう。

「千夏、下まで一緒に行こう」

「うん」

祐華と一緒に教室を出て、階段に向かう角を曲がったときだった。

「藤宮千夏さんですね？」

「あ、はい…」

声をかけられたので、反射的に反応した。

…あ、三年生の人？

「何も聞かずに、わたしについてきてくださいますか？」

え、え、ええ？

「部活がありますので…」

「ついてきてくださいますか？」

顔はにこやかだけど、雰囲気が穏やかじゃない。有無を言わさない感ありありだ。

まさか、この人が一連の事象の黒幕？

「千夏をどこへ連れて行く気ですか！」

「貴女には関係ありません…が、騒がれても困りますので、ご同行していただきます」

「…断つたら？」

「剣道部が県大会出場を辞退する事になりますが」

脅迫だ。最悪は実力行使に出るという宣言だ。っていうか、祐華が剣道部だという事まで知っている！？

「わたしが断つたら、どうなりますか？」

「剣道部が陸上部に対象が変わるだけです」

という事は、ついて行かないとキミー先輩に迷惑がかかるという事になる。

「祐華、ごめん。付き合って」

「…仕方がないなあ。ま、守るって決めたしね」

「賢明な判断痛み入ります。あ、そうそう。携帯を預からせていただきますわ。メール等で知らされては困りますからね」

仕方なく、わたし達は携帯を差し出した。

「こちらですわ」

三人で階段を下り、昇降口を抜けて学校の裏手へと案内された。

放課後。

いつも通り、陸上部へ私は顔を出した。

そろそろ千夏ちゃんの足も良くなってきたので、少しずつ足に負荷をかけて慣らしていく方向へ練習をシフトしていくつもり。

取りあえず、秋口までは無理をしないで身体を壊さないメニューで基礎練習を続ける。そうすれば、秋の新人戦には間に合うはず。

「こんにちは」

挨拶をしながら幅跳びレーンへ向かう。

「よ、かずみん」

レーンでは、既に櫛川先輩が練習を始めていた。

「気合い入ってますね」

「まあね。全国でかずみんの記録を抜くんだからね」
そんなこと言ってましたね。

「前にも言いましてけど、助走の開始位置はちゃんと意識してますよね？」

「もちのロンロン。まさか、そこだけで記録が伸びるとは思ってなかったからね」

「踏み切り位置との関係が変でしたから。そこさえしっかりしてればバネはありますからね、先輩は」

「アドバイス、サンキューね。かずみん」

変な先輩だが、この人もまだ伸びしろはある。千夏ちゃんついでに時たま見てさし上げてます。

さて千夏ちゃん…は、あれ？

「先輩。千夏ちゃんは？」

「およ？そいえば見てないなあ、千夏」

「今日はまだ姿を見ていません」

話を聞いてたのか、他の幅跳び選手が教えてくれた。

「ふん、いつもは一番乗りで来るのに…珍しいな」

そいえば、私が陸上部に顔を出す頃には既にストレッチ初めてたもんなあ。遅いですっ！って怒られた事もある。正式部員じゃないから、その辺は勘弁してもらいたいんだけど…。

「ホント、どうしたんでしょうね…」

「そいえば、同じクラスの部員が居たなあ。おーい…」

そう言つと、先輩はその対象の部員を呼び寄せていた。

「千夏見なかったかい？」

「え、来てないんですか？先に教室を出たから、てっきり来てるものだと…」

「一人で？」

「そいえば、剣道部の子と一緒にしたね。仲がいい子が一人いまして、その子と出るのを見ました」

じゃあ教室には居ない、と。

「貴女は何故それを見てたの？」

「私、日直だったので雑用をしてるときに…」

その後の行動は見てない、か…。

「どこか寄り道してるとか？」

「する理由がありませんよ。テスト前でもないのに」

となると…彼女の身に何かが起きた？

そんな事を考えてるとき、ポケットの中の携帯が振動してること
に気がついた。

発信相手は、情報収集のスペシャリストだった。

「菜々美？どうした？」

「いっちゃん、彼女さんそこに居てへんか？」

「いや、今居ないんでどこに…ってな話をしてたところ」

「うわ、ちよう間に合わんかったか…」

「どういうこと？」

話の筋が見えず、相手に質問していた。

「今回の黒幕がわかってん」

「マジで？」

「まさかと思うた人物が黒幕やってん。ウチも驚いたのなんのって

…」

「誰なの？」

「それは追々話すとして、今から部室棟辺りで合流できひんか？」

「まあ、いつでも動けるけど？こっちは」

「ほな、また後で」

そう言って電話は切断された。

合流するって事は、どこかに移動するんだろつか？

今ここに、千夏ちゃんがない事と関係あるのかな？

「つてなわけで櫛川先輩、ちよつと席を外します」

「あいよ。千夏の事はかずみに全権委任だから問題ないよ」

い、いつのまにそんな事になってるんですか…。

「顧問も部長も承認済みだよ」

本人抜きでそういう事を決めないでくださいよ。

「それはともかく、何があったか知らないけどちゃんと千夏を連れてきなよ?」

「それはもちろん!」

そう言い残して、私は菜々美が待っているであろう部室棟へ向けて全速力移動を開始した。

「こちらです」

そう言って案内されたのは、学校の裏手。三棟ある校舎の一番北側、いわゆる旧校舎といわれる一番古い校舎のさらに裏手へと連れてこられた。

確かに、ここなら多少騒いでも気づかれない場所だよね。いかにもってところに案内されたなあ。

さて、何が出てくるやら…。

「案内ご苦労。消えなさい」

そんな台詞が、何故かわたしの後ろから聞こえてきた。しかも、馴染みのある声だ。それを合図に、案内人はわたしの前から姿を消した。

「……どうということなの?」

頭の中で警鐘が鳴り響くわたしは、そう訪ねるのが精一杯だった。とある可能性を認めたくない一心で。

「こんな状況になれば、さすがにわかるわよね」

まだだ。

わたしの前は無人。

後ろには、友人しかいないはず。

「…祐華?」

言葉が出ないなかで、わたしは敢えて友人の名を呼ぶ。

「何かしら? 千夏」

「もしかして、貴女が全部仕組んだの?」

「…そうだと云ったら？」

友人から肯定している風な台詞が返ってきた。

「何でこんなイジメまがいな事をするの？」

祐華は親友とまではいかないけど、かなり仲がいいクラスメイトの一人。というか、向こうからスキンシップをしてくる位。こんな事をする理由がわからない。

「どっかの先輩とラブラブなあんたには、わからないでしょうね」

「んなつ！それは関係ないんじゃない？」

「大ありよっ！」

大迫力な返事にたじろぐ。

「事あるごとに先輩先輩先輩先輩先輩先輩…」

そ、そんなに言ってたかなあ。

「だってわたしの気持ち、知ってるでしょう？」

相談した事もあるくらいだ。知らないわけがない。

「当然よ。だからじゃない」

そこがわからないんですか？

「自分の気持ちを押し殺すのに必死だったんだから」

ま、まさか…祐華も先輩の事を？

「でも、わたし達はお互いに気持ちを認め合って、正式に付き合う事になったんだから…」

「そうよね。で、弓道場で先輩がとどめを刺して、学校中に知れ渡った」

それはさつき話したとおりですよ？

「拳げ句の果てに、駅前でデートしてるし…」

見たのは祐華だったのか。

「デートを目撃して、貴女に対して嫉妬の炎がついたのよ。折角、気持ちを押し殺していたのに…諦めていたのに…」

しかし、何で今頃…。まあ、祐華が先輩の事を好きだと知らなかったわたしも悪いのかな？

「それでも、先輩の事は渡さないんだからね。たとえ相手が祐華で

も

「先輩なんか要らないわよ」

え？

「わたしが欲しいのは、……なんだから」

え？声が小さくて聞き取れないんだけど。

「わたしが欲しいのは、ち・な・つ、なのっ！」

数瞬、お互いに沈黙。

「ええええええええええ！？」

声を大にして驚いたのはわたしだった。そ、それって、祐華がわたしの事を…好きって事？

「う、う、う、嘘……でしょ？」

「こ、こんな事冗談で言えるか……っ！」

「そんなそぶり、見せたこと……」

思い返せば、ない事はないか。確かに、普段から過度なスキンシップをしていた記憶がある。胸を揉むなんて日常茶飯事だし、キスを迫られた事も何度かあったなあ。その時は冗談で返していたけど。「幾つか質問」

「何？」

「部活の先輩の噂は？」

「ああ、あれは相乗効果を狙ったのデマ♪」

マジデスカ。

「普段の時ぶつかったりしてるのは、祐華じゃないよね？貴女と話してるときもぶつかられたし」

「あれはみんな、あんたと先輩の仲を良く思わない人達に協力してもらったの。もっとも、他のみんなはわたしと違って先輩に好意がある子ばかりだけどね」

目的は違えど、利害が一致したという訳ね。

「先ほどの三年生の人？」

「家の使用人よ。年上だけどね」

え、祐華ってお嬢様なの？

普段話をしてるときには、そんなそぶり見せた事ないじゃない。

結構気さくだし、誰とでも仲良くなれるし…。

「どんな家柄だろうと、わたしはわたしだしね」

でも、一番気になる事、それは…。

「わたしのどこが好きなの？何でわたし？」

「千夏は、どんな事でも一生懸命じゃない。確かに勉強も運動もそこそただけど、物事に真剣に向き合ってるあんたを入学時からずっと見てきたんだから…」

ドジったりしないように気をつけてるだけなんですが…人から見るとそう見えるのかなあ。

「この前のソフト、三振ばかりでみんな笑ってたけど、わたしには一生懸命な姿に見えて…ますます惚れたんだからっ！」
わたし的には恥ずかしい記憶しかないんだけど…。

「弓道場の一件を聞いて落ち込んだし、デート現場を見て何とか二人を引き離せないかと考えたり…」

…もしかして、病んでるってやつなのか？これ。

「わたしたち、友達でしょ？」

「そうだけど…わたしはそれでは満足できなかった。もっと仲良くなりたい、千夏をわたしのモノにしたい、そう考えるようになったの」

最近やたらとスキンシップが過激になってきたのはそれでか。事あるごとにスカートを捲ろうとするからなあ。何とかして抵抗してるんだけど、たまに捲られたときは落ち込んだんだから。

「取りあえず、祐華の気持ちはわかった。でも、わたしの気持ちは大河先輩に向いてるんだから。気持ちは嬉しいけど…ゴメン」

もう先輩と結ばれた以上、この気持ちは変えられない。

「そう…どうあってもわたしには応えてくれないのね…」

タイミングが違えばわからなかったけど、わたしが好きなのは、やっぱり先輩であって祐華じゃない。友人としては好きだけど、それ以上にはなれない。

「……やはり、実力行使するしかなさそうね」

そう祐華が呟くと同時に、周りの空気が冷えた気がした。そして先輩が怒った時に見えるどす黒いオーラが見える気がした。

「もう一度、右足を怪我してもらうよ。そして、今度はわたしが献身看護するんだ……先輩なんか近づけさせないんだから……」

そう言って近づいてくる祐華。手には、いつの間にか木刀を握りしめている！

「ごめんね千夏。あんたが悪いんじゃないだよ。あの先輩の存在が、わたしをこうさせるんだから……恨むなら先輩を恨んでね……」

やっぱり病んでるよ！

しかし、困った。逃げ出したいんだけど、まだ足は完全に治ってるわけじゃないから、ダッシュが出来ない。どうしよう。このままじゃまた足を怪我する羽目になってしまう。どうしたら……。

「痛いかも知れないけど、我慢してね？今度はわたしが千夏の足になつてあげる……からっ！」

木刀を振り上げる祐華。

衝撃に備え、目をつぶる。

……………。

あれ？何も起きない。

「ふう、何とか間に合ったか。こんなもん振り回しちゃ危ないでしようが」

……え？先輩の声？

恐る恐る目を開けると、じたばたしてる祐華と振り下ろされる寸前の木刀を握りしめる先輩の姿が！

「は……な……っ！」

「離せと言つて離す阿呆がどこにいる」

「大河一美の莫迦っ！」

「む？それは聞き捨てならないわね。ふんっ！っ」と

そう言つて木刀を握りしめたまま祐華を振り回す先輩。握力が限界だったのか、木刀から手が離れ祐華が地面に落ちた。

「菜々美」

「ほい、彼女さん保護。大丈夫やったか？」

はい、まだ何もされてなかったの。

「それは良かった。間一髪やったな」

「な、なんで此处が…」

祐華に目をやると、悔しさのあまり歯をギリギリさせて先輩達を睨み付けている。

「ウチにかかればあんな捏造情報、一発でウソやとわかるえ？」

しかし、まさか先輩達が此处に乗り込んでくるとは夢にも思わなかった。

「さあ、話は全て聞かせてもらつたわ。私の千夏ちゃんに手を出そうとするなんて…覚悟は出来てるんでしょねえ」

黒モードな先輩発動だ。これで謙譲語がでるようなら、怒りMA Xレベルだ。

「…ふん。泥棒猫のように横からかつさらつていったくせに」

す、すごい。火に油を注ぐような台詞。先輩と対等に張り合う人なんてキミー先輩以外見た事がない。

「出会いとは偶然なのは認めるけど。泥棒猫は聞き捨てならないわね」

「何を言ってる、このドサンピンが。ああ、可哀想な千夏。将来、ボロ雑巾のようにされて捨てられるんだ…」

「酷い言われようだなあ…」

そんな事はないと信じてますが…大丈夫でしょうね？

「なあ、千夏ちゃんも疑いの眼差しで見るかなあ…私ってそんなに信用ない？」

「いつちゃんは恋愛に関してはニブやからねえ」

「…そつちからツツコミが来るとは予想外です」

菜々美先輩の言う事も、もっともです。

「まあ、いいわ。今回はここで引いてあげる。いいこと、大河一美。」

いつか貴女から可哀想な千夏を取り返してやるんだから。覚えておきなさいよ」

そう言い残して、祐華は私達の前から立ち去っていった。

「ふいっ、なかなか迫力のある子だったなあ。あれ、本当に千夏ちゃんの同級生？」

「情報ではそうやったんやけど」

あ、はい。クラスメイトで友達です。

「え、友達なの？そんな感じがしなかったんだけど」

此処に来て豹変したっていうか、わたしもビックリしてたんです。

「しかし、意外なところにライバルが出現か」

「安心出来なくなったな？いっちゃん」

「何で？」

「今までのようにしていると、彼女さんが心変わりしてまうかもしれないで？」

確かに、呆れて浮気するかも知れませんね。

「さらりと恐ろしい事言わないでよぉ。今まで以上に頑張ります。だから見捨てないでえ」

まあ、それは先輩次第ですね。

「取りあえず、部活行きましょう」

わたしはそう言って、この話を切り上げる事にした。

この日をきっかけに、わたしと先輩と祐華の妙な三角関係が始まったのだった。

19（後書き）

毎度お待たせしております

今回は、少し毛色を変えてちょびつとダークです

暴漢に襲われる千夏を一美が助ける…というイメージで

書き始めたのですが、終わってみれば単なる痴話喧嘩（お

それもこれも、祐華の登場のせいで…（人のせいにすんなや

本来は、別に黒幕を設定してたのですが、また新たに

キャラをたてるより祐華をそのまま黒幕にした方が

面白いのでは？と思い、シナリオを変更

伏線回収に手間取りましたが、何とか完成しました

もつとダークにするつもりでしたが、シナリオ変更で

泥沼？恋愛事情に… しかもヤンデレっぽくなっちゃったし^^；

しかも、自身初の一話1万文字オーバー（o）/！

ここまで書いたので、祐華も今後登場してくると思います
遅筆ですが、乞うご期待w

20（前書き）

今回はちと番外編をお送りいたします
夢で見たネタを覚えていたので^^；
一美達も少しは絡んでますが
全く別カプのお話です

とある日の通学路。

「ええゝいつ、鬱陶しい！離れんかいっ！」

「そ、そんなご無体な。こんなにもお慕い申し上げてますのに……」

「だからって、背中に張り付くなつ、タコ！」

「そんな愛称ではなく、ちゃんと名前でお呼びくださいませ、清華様」

「様」付けと背中張り付きをやめたら、考えなくもないな、多佳子お嬢様」

「そちらこそ、お嬢様はおやめくださいませ」

朝から喧嘩してるのかじゃれてるのかわからないやり取り。

わたしの名は、城端清華^{みづはな}。皆川学園の二年生。もう一人の名は、壬生多佳子^{みぶ たかこ}。同じ二年生で、認めたくないけどクラスメイト。さらに認めたくないけど、学内公認カップルとされているらしい。

…わっちは認めてないんだけど？タコと付き合うのは。

ああ、タコってのは、わっただけが使ってる多佳子の愛称。本人はおるか周りもお気に召さないらしい。

そりゃそうだ。タコは周りも認める生粋のお嬢様だ。そんな人をタコ呼ばわりなんて…ってよく言われる。

でも、本人は、愛称で呼ばれた事は嬉しかったようだ。何かの拍子でタコって呼んで以来、それがずっと続いている。

実は、タコとは去年もクラスメイト。詳しくは忘れたけど、タコに課せられた仕事を手伝ったのがきっかけで慕われるようになり、先ほどのような告白も何度もされてる。が、わっちが冗談として受け流してる。このような状態が半年以上続いている状態なのだ。

タコの事が嫌いな訳じゃない。むしろ好きな方だ。

この気持ちを見せると、何か負けた気分になるような気がして、敢えてテキトーに流している。こんなのバレたら怒るだろうな。も

しかしたら気づいてるのかも知れないけど。だから、わっちは照れ隠しにタコが嫌がる”お嬢様”を時たま使う。

「はいっ、これでよろしいですか？清華」

そう言っ、ようやく背中の中重圧が解放された。肩胛骨辺りに押しつけられた二つのプレッシャーも一緒に。

「やっとタコが離れてくれた」

「まだ仰いますか？その愛称」

「これで慣れちゃったからねえ。わっち的にはGJなんだが」

「GJじゃありません。莫迦にしてるんですか？」

「うん」

「あつさり肯定されましたわね。もう一度背中に…」

「冗談も見抜けないのか、お嬢様は」

「これでも、随分貴女に鍛えられましたけどね」

「タコを弄ると楽しいからなあ」

「わたくし、イジメられてたんですかつ？」

「イジメと弄るのは違うから。わっちのは愛あるイジメ」

「イジメてるじゃないですかっ！」

世間一般のイジメとは違うんだけどなあ。好きな子をからかう男子…って、子供かいつ、わっちは。

そんな風に、二人でじゃれ合いながら登校するのが毎朝のお約束。暫くして路地を曲がったところで、とある四人組と鉢合わせた。

「お」

「あ」

「よ。おはよう、大河」

「あら、清華。おはよう」

文武両道三人組と称されるグループの一人、大河一美に挨拶する。彼女とは、去年クラスメイトだった。背がやたらに大きいので記憶に残りやすい。…羨ましいぞ、その背丈。

「その他大勢もおはよう」

「何だよそのモブ扱いはっ！」

「等々力は弄られキャラだから」

「ちょ！弄っていいのはいちみだけ！」

「弄り仲間がいて嬉しいわ、清華」

「ストレス発散には最高だしな」

「あたしで発散しないで、お願いだから…」

「多佳子はんも、おはよう」

「おはようございます、皆さん。…そちらの方は？」

「あ、初めまして。一年の藤宮千夏といいます」

「ああ、貴女が噂に聞く一美さんの伴侶でございましたか」

「…伴侶…ポツ」

「結婚してないし！千夏ちゃんもそこで変に照れないのっ！」

「一生を添い遂げてくれないんですか？先輩…」

「…段々扱いが難しくなってきたる気がするのは気のせい？」

「お、早くも不協和音か？」

「いつちゃん、彼女さんを悲しませたらあかんえ」

「あんたら、絶対楽しんでるだろ」

「大河も苦労してるのな」

「お互いにね」

「…はあ…」

同時に溜息をつくわっち達だった。

「あ、そうそう。今日、バスケ部に顔を出すわね。前回の助っ人キヤンセルのお詫びとして」

「ん？そんな話は聞いてないけど」

「あ、まだ部員までには話が行ってないのかな？部長さんにはもう話してあるけど」

ふん、じゃあ今日の部活辺りで話があるかもな。

「了解した。楽しみにしてるよ」

そう、わっちはこの学校でバスケをやっている。…誰だ、チビのくせについていうヤツはっ！

そうだよ、チビだよ。150センチ無いけど頑張ってるんだ。文

句は言わせない。中学からやってるのに、全然背が伸びない。牛乳も毎日欠かさず飲んでるというのに……。ちなみに、牛乳は低温殺菌が謳い文句の製品に拘ってるんだ。普通のヤツより美味しいしね。って、脱線したな、話が。わっちは、この背の低さを逆に利用して相手を攪乱したり得意の3Pスリーを連続で打つSGとSFを兼任したようなプレイをしている。ので、悪い流れを変えたりしたいとき等に重宝されてるようだ。でも、もう少し背があればなあ……。PFパワーフォワードやりたいなあ。まあ、無いものは仕方ない。大河が部活に来たときは、身長シユガチドングスモカ郎ワイドの対比もあっていい練習台になる。彼女もそこら辺がわかってるのか、ミニゲームではよく絡んでくれる。

「今日、一美さんが参加するという事は、熱いバトルが見られるんですね？」

ん？タコが食い付いてきたぞ。

「もしかして…見学するつもりか？」

「もちろんそのつもりですが？」

確定事項かよ。

「見るのは構わんけど、黄色い声を上げるのは勘弁してくれ」

「よろしいじゃないですか。清華の素敵なお姿を見られるんですから」

周りからの視線が痛くなるので、マジ勘弁してほしいんですが…。

そんな事を考えてたら、大河に肩を叩かれた。

「その気持ち、良くわかるわ」

お互い有名人だもんね、って付け加えられた。わっちはあんたほどじゃないと思ってるんだけど？

「まあ、見るのは自由だからいいけど」

「では、放課後はご一緒してもよろしいですか？」

「見る気満々なのに、今更だな」

「お熱いでのお、サヤ」

「こっちもラブラブやのう」

横から等々力と彩恩にからかわれた。

「やかましいっての」

「さあ、急がないと遅刻するよ」

大河の一言で、その場の全員が歩調を早めた。さて、放課後がんばるぞ。その前に勉強も頑張らねば。

放課後。

バスケット部の部室。

わっちは一人残って佇んでいた。

「はあゝっ、うまくいかない日ってあるもんだなあ…」

今日の部活、予告通り大河がやってきて色々面倒を見てくれた。助っ人が出来なかったお詫びも入ってるようで、かなり念入りに付き合ってくれた。

…のはいいのだが、ミニゲームでのマッチアップでことごとく大河に競り負けてしまった。いつもなら五分五分か僅かにわっちが競り勝つんだけど、完敗は初めての経験。人並みに落ち込んだるのが今の状態。周りは、そういう日もあるよって励ましながら部室を後にしていった。気を遣われたようで余計に落ち込むんだよ、そういうのって。

「……清華、おられますか？」

声がする方向に目を向けると、部室の入口にお嬢様が立っていた。
「タコ…」

「なかなか外に出て来られないから、様子を見に来てしまいました」
待っててくれたのか…。

「先に帰ってくれても良かったのに」

「想い人を置いて帰るなんて出来ません」

はは、彼女はそういう人でした。

「こんな情けない姿、タコには見せたくなかったよ…」

「一人前に落ち込んでらっしゃるのですか？」

ビクッ！心の内を見抜かれて驚く。

「…わ、悪い？」

「ふう…貴女らしくありませんわ
え？」

「これくらいで凹むなんて、いつもの貴女らしくないと言ってるんです。普段のわたくしを弄るような活気は、どこへいったんですか？」

何か、挑発してるのか？

「うるさい！今のわっちの気持ちがあんたにわかるかっ！」

「ええ、わからないですわ」

なぬ？そこは嘘でも、わかると返すところじゃないのか？

「わからないからこそ、落ち込んでないで立ち上がりなさいって言ってるのですよ」

な、何というジャイアニズム…無茶苦茶だよ。

「こんな事でへこたれる貴女じゃない事は、わたくしが一番存じ上げております。さあ、立ち上がっていつものようにわたくしを弄ってくださいな」

それがご所望なら…と、いつもなら行くのだけど、今回はいつもより凹み度が大きいわけで…。

「ごめん。今日はムリっぽい…」

「あらら。意外と重傷なんですねえ」

…意外は余計だ。

でも、遠慮無い言葉を投げかけるのはさすがだ。変に気を遣われるより気が楽だ。そんな事を考えていたら、目の前にタコがやってきてしゃがみ込んだ。

「ほら、顔を上げてくださいな」

言われるがままに顔を上げると、突如唇を奪われた。

「んんっ！？」

唇に伝わった柔らかい感触に、わっちは身を委ねた。しかし、その感触もすぐに消えてしまう。時間にして一秒無かった。

「落ち込みを治すおまじないですけど…効きました？」

…はい、確実に効きました。でも…。

「まだ足りない」

「仕方ないですわねえ。相当の重傷ですわ」

そう言つと、タコは再度わっちの唇を奪う。今度はたっぷりと。

「んっ、んちゅ、ちゅっ、さや、か…」

「ちゅっ、んふう、んんっ、た…か…」

たっぷり一分くらい唇を愛撫されてしまった。

わっちとタコは、正式に恋人同士としては付き合つてはいない。

わっちが告白を受け入れてないから。しかし、何時頃からか唇を許すみたいな関係になつていた。普段はわっちがタコを弄る立場だが、こういうときは立場が逆転してタコに攻められる。大概が、わっちが落ち込んだときに起こる。最初は、本当におまじないみたいに軽くキスするだけだったが、段々深みにはまっていつている。でも、タコの行為は本当にわっちの落ち込みを治してくれる効果があるので実感している。気持ちがふわぁ〜となつていき、嫌な事を忘れさせてくれる。

「どうですか？」

「うん、かなり効いた…でも」

「でも？」

「まだ足りないって、身体の中から訴えてきてる」

「そうですか…でも、ここから先は貴女の言葉が必要になるんですよ…」

「わっちの…言葉？」

「そうです。わたくしの告白に対する答えという言葉」

来た。いままでさんざんはぐらかしてきたツケが、ここにきて具現化するとは。おそらく、タコもわっちの気持ちを知つてて言つてるんだと思う。ちゃんと言葉にして伝えてくださいって。最初は、本当に冗談だと思つてたタコ…今は失礼だな、多佳子の告白。何度もされる内に悪い気分では無くなつていた。むしろ気持ちよかつた。わっちも認めてしまうと、その気持ちよさが無くなつてしまうと思

って逃げていたのかも知れない。

「そっか…それじゃあ、答えないといけないな」

もう逃げてはいけない。

「多佳子、好きだよ。いつもはぐらかして、いつも苛めてごめんね。だから、嫌いにならないで…」

一世一代の告白。しかし、今までの事を謝罪したせいで、後半は涙声になってしまった。格好悪う。

「何を仰いますか。いつ、わたくしが貴女を嫌いになると言いましたか？」

「…言っていない気が…」

「そうです。言ってません。お慕い申し上げるとしか言ってませんですよ？」

「そっか、それはすまなかった」

「では、本日をもって恋人同士という事でよろしいのですね？」

「そう…なるんだな」

改めて恋人と言われると恥ずかしいが、嫌な気分じゃない。むしろ、なるべくしてなったという感じかな。

「では、よろしいですか？」

「ん。来て…」

わっちがそう言つと三度唇が奪われ、そのまま座っていたベンチに押し倒された。そして、多佳子の手がユニフォーム越しにわっちのそこそこある胸の膨らみに触れてきた。

帰り道。

タコとわっちは、手を繋ぎながら通学路を歩いていた。

「どうですか？落ち込みは治りましたか」

「ん。完全に」

何か、いろいろ吹っ切れた感じがする。バスケに関しても、タコとの関係にしても。

「それにしても激しかったな。お嬢様なのにごで覚えてきたんだ？」

「…そんなこと聞くなんて、野暮でございましてよ」「お互い初めて…だよな？」

「あ、当たり前ですっ！何を言い出すんですかつ！」
怒らせてしまったようだ。

「まあ、いいや。ありがとう、多佳子」

「えっ!？」

いきなり名前で呼ばれたのに驚いたようだ。

「どうしたんですの？愛称ではなく名前なんて…」

「嫌か？」

「貴女らしくないというか…」

「これでも結構気恥ずかしいんだぞ？」

「それこそ貴女らしくないですね」

そこまで言いますか。

「ふう、せっかく感謝の言葉を述べようと思ったんだが、やめにしよう」

「ええっ!？そこまで言っておいてそれは認められませんかよ？」

「いや、何か負けた気がするからやっぱ言つのやめた」

「そ、そんなあゝ。体を張ってまで頑張ったというのに…」

ようやく、いつもの調子に戻ってきた。

ああは言ったが、感謝してるんだ、多佳子。今回はあんたの気持ちに救われたんだ。どれだけわっちを見てきたのかがもの凄くわかつたんだよ。これから、わっちの事を見ていておくれ。そしてまた…落ち込んだら、おまじないを頼むよ。

「さあって、家に帰って晩御飯だ」

「待ってください！感謝の意を求めます！さゝやゝかつ!！」

20（後書き）

本編の序盤に、バスケ部が…という記述をしたので
片方をバスケ部員にしてみました

モデルは…察しのいいかたはわかるかと^^;

ちなみに、タコお嬢様は身長160?です 胸がEカップ（お

清花は149?、Bカップです 補足説明終わりくマテ

次回は本編に戻ります…が

このカプも、どこかで登場する…かも?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3155n/>

こんな始まり方もあり！？

2011年12月2日19時56分発行